

平成20年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

2010.3

大阪市教育局
(財)大阪文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成20年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成21年度事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育局が(財)大阪市文化財協会に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育局文化財保護担当において行った。

目次

I 北区

天神橋遺跡発掘調査 (TJ08-3) 報告書	3
------------------------------	---

II 中央区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW08-1) 報告書	19
----------------------------------	----

大坂城跡発掘調査 (OS08-4) 報告書	27
-----------------------------	----

III 天王寺区

大坂城跡発掘調査 (OS08-9) 報告書	33
-----------------------------	----

伶人町遺跡発掘調査 (RJ08-2) 報告書	37
------------------------------	----

細工谷遺跡発掘調査 (SD08-5) 報告書	43
------------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH08-2) 報告書	51
------------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH08-3) 報告書	55
------------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH08-6) 報告書	63
------------------------------	----

上本町遺跡発掘調査 (UH08-12) 報告書	67
-------------------------------	----

IV 住吉区

帝塚山古墳群発掘調査 (TZ08-1) 報告書	73
-------------------------------	----

山之内遺跡発掘調査 (YM08-3) 報告書	77
------------------------------	----

I 北 区

北区天神橋一丁目における建設工事に伴う天神橋遺跡発掘調査(TJ08-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区天神橋1丁目27-1・74の各一部・75
- ・調査面積 52㎡
- ・調査期間 平成20年9月3日～9月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は天神橋遺跡の南部に位置し、南には天神橋、北には天満地域における中心地の1つである大阪天満宮が立地する(図1)。天神橋筋遺跡は、古代には東大寺新羅江荘あるいは安曇江荘、中世では渡辺津といった、文献史学からその存在が想定される拠点施設の推定地、あるいは近隣地域である。豊臣期には城下町として整備され、また近世には大阪天満宮の門前町として発展した。こうした賑わいは、例年行われる天神祭などによってその一端を窺うことができる。また各時代における当遺跡の重要性については、これまで文献史学の成果から評価されることが多かったが、発掘調査成果の蓄積、中でも今回の調査地の西で行われたTJ00-2次調査[大阪市文化財協会2002]を経て、考古学的手法によってもある程度の評価が可能となっている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下約2.0mにおいて江戸時代前期以前と考えられる遺物包含層・遺構の存在を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。



図1 調査地位置図

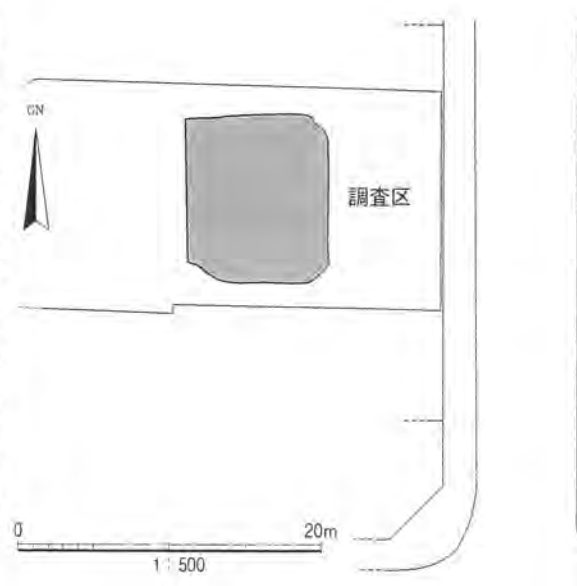


図2 調査区配置図

調査着手前に事業者側で擁壁工事および現地表面から約2.0mまで重機による掘削が行われたのち、2008年9月3日から調査を開始した。掘削はすべて人力によって行い、その間、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、9月12日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。示北記号は座標北である。

〈調査の結果〉

1. 層序

先述のように、調査着手時にはすでに現地表下約2.0mまで、すなわちおおそ第2層までの地層が除去されていた。以下では、各層の特徴について述べる(図3～5)。

第0層：現代の整地層である。層厚は最大で210cmであった。

第1層：徳川氏大坂城期の整地層である。灰黄褐色を呈し、炭・シルトの偽礫を多く含む砂からなり、層厚は最大で40cmであった。詳しい年代は不明だが、第2層以下の年代から18世紀以降のものである。中央部には敷地境の石垣(図5の▼部分)が存在した。後述するように第2層は炭・焼土を多く含むが、本層にはそうした特徴が認められない。

第2層：17～18世紀の整地層である。オリブ黒色を呈し、炭を含むシルト質細粒砂からなり、層厚は最大で40cmであった。層準の中位には炭層を挟み、また鉄滓を多く含んでいる。図8に示すように、本来は本層に伴う多数の土壌などを検出した。本層の段階では当調査区で鍛冶が行われていたと考えられ、これらの土壌は鉄滓などの廃棄場を中心とする。

第3層：オリブ褐色を呈し炭を含むシルト質砂からなる整地層

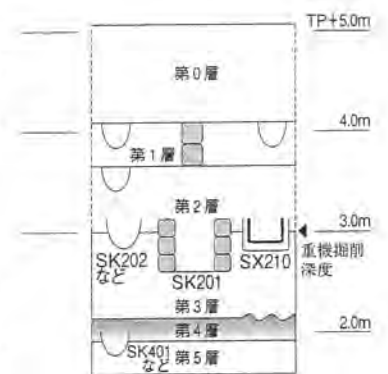


図3 地層と遺構の関係

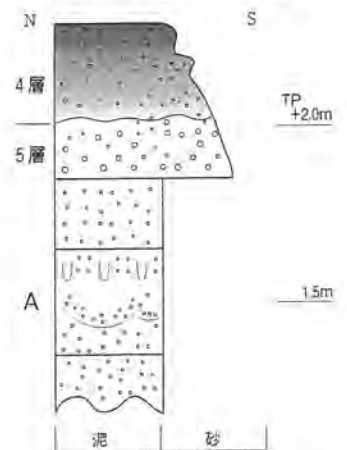


図4 第4・5層模式柱状図

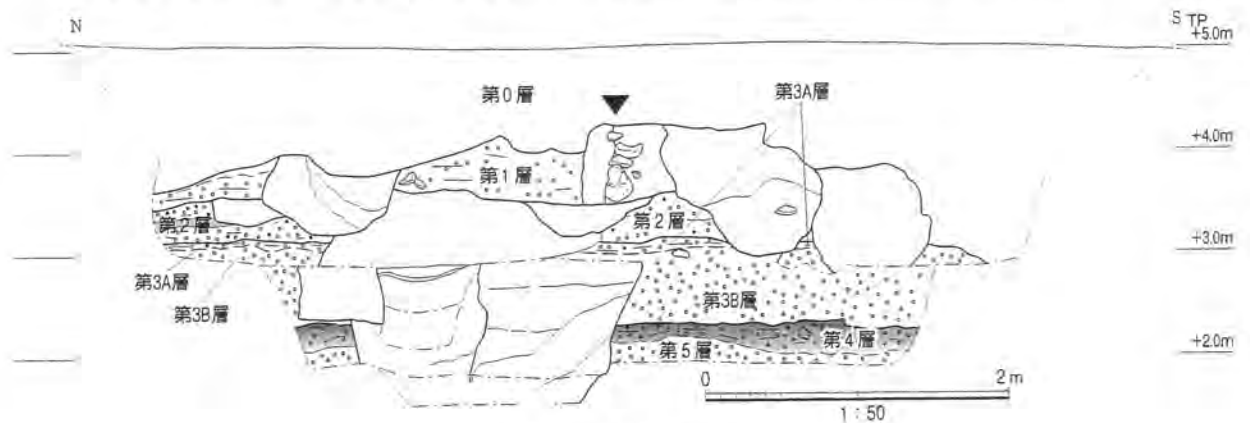


図5 調査区東壁断面

で、層厚は98cmあった。調査区の東部では最上部が攪拌されており、この最上部を第3A層、それ以下を第3B層として区別した。出土遺物が少なく時期の特定が難しいが、出土遺物や上・下層の年代から推して、豊臣後期の整地層である可能性が高い。

第4層：暗オリーブ褐色を呈するシルト質細粒砂からなる古土壌および作土である。東壁における層厚は30cmであるが、西へ向うにつれやや厚さを増し、調査区西端では40cmの厚さがあった。本層の上面では耕作に伴う溝群を検出した。また本層層中において、土壙SK401や小穴、溝SD402などを検出した。出土遺物から、奈良時代～中世前期の時期が与えられる。

第5層：黄褐色を呈する細粒～粗粒砂からなる自然堆積層である。上部は中粒～粗粒砂に上方細粒化するが、最上部はやや淘汰が悪く、生物擾乱、あるいは風成層の可能性もある。また中位(図4-A)では直径1.5cmほどで縦方向に延びる生痕化石を確認したほか、トラフ型斜交ラミナが観察できた。推定される古流向は東北東→西南西である。なお、本層以下から遺物は出土していない。

2. 遺構と遺物

a. 第4層の遺構

第4層に伴う遺構については、その上面と層中にわけて報告する(図7)。

まず上面検出遺構については、調査区西部において第4層上部が攪拌された状況が認められた。この攪拌された土を除去すると、3条の溝状遺構を検出できた。形状から推して、耕作に係わる遺構である。

第4層の層中では、土壙SK401、溝SD402などのほか、土壙・小穴などを検出した。

このうち南北に長い長楕円形を呈するSK401は、南北1.68m、東西0.72mを測り、検出面からの深さは0.30mであった。本遺構からは、埴の一部5が出土している(図6)。5は上面および側面に丁寧なヘラケズリを施す一方、底面の調整は粗い。また、底部は二次的な被熱により変色している。

SD402も南北に延び、長さ3.04m以上、幅1.28m、検出面からの深さは0.16mを測る。本遺構からは、平瓦7や石製紡錘車8などが出土した。

これら第4層に伴う遺構から出土した遺物には時期的な指標となる資料が少ないが、第4層と同じく奈良時代後半に中心を持ち、中世前期までの遺物を含んでいる。なお、第4層および第4層に伴う遺構からは、埴5、瓦6・7といった、古代においては寺院あるいは官衙的施設に出土が限定される遺物が出土している。今後周辺での調査によってこれらに係わる遺構が検出されることが期待される。

b. 第4層出土遺物

第4層からは、須恵器杯1、土師器杯2・高杯の脚部3、製塩土器4、平瓦6、和同開珎9などが出土した(図6)。このうち須恵器1は杯Bで、高台が底部の周縁近くに付く形態である。底面にはわずかに火襷が観察でき、またヘラ記号「×」が刻まれている。口縁端部がわずかに外折する土師器2は杯Aで、ナデ調整で仕上げを行うが、外面底部にはユビオサエの痕跡を残している。器壁の状態は良好であるが、ヘラミガキは認められない。また口縁部にはわずかにススが附着している。高杯の脚部3は面取りをしており、杯部の底面にはわずかに暗文を観察できる。製塩土器4は外面にユビオサエ

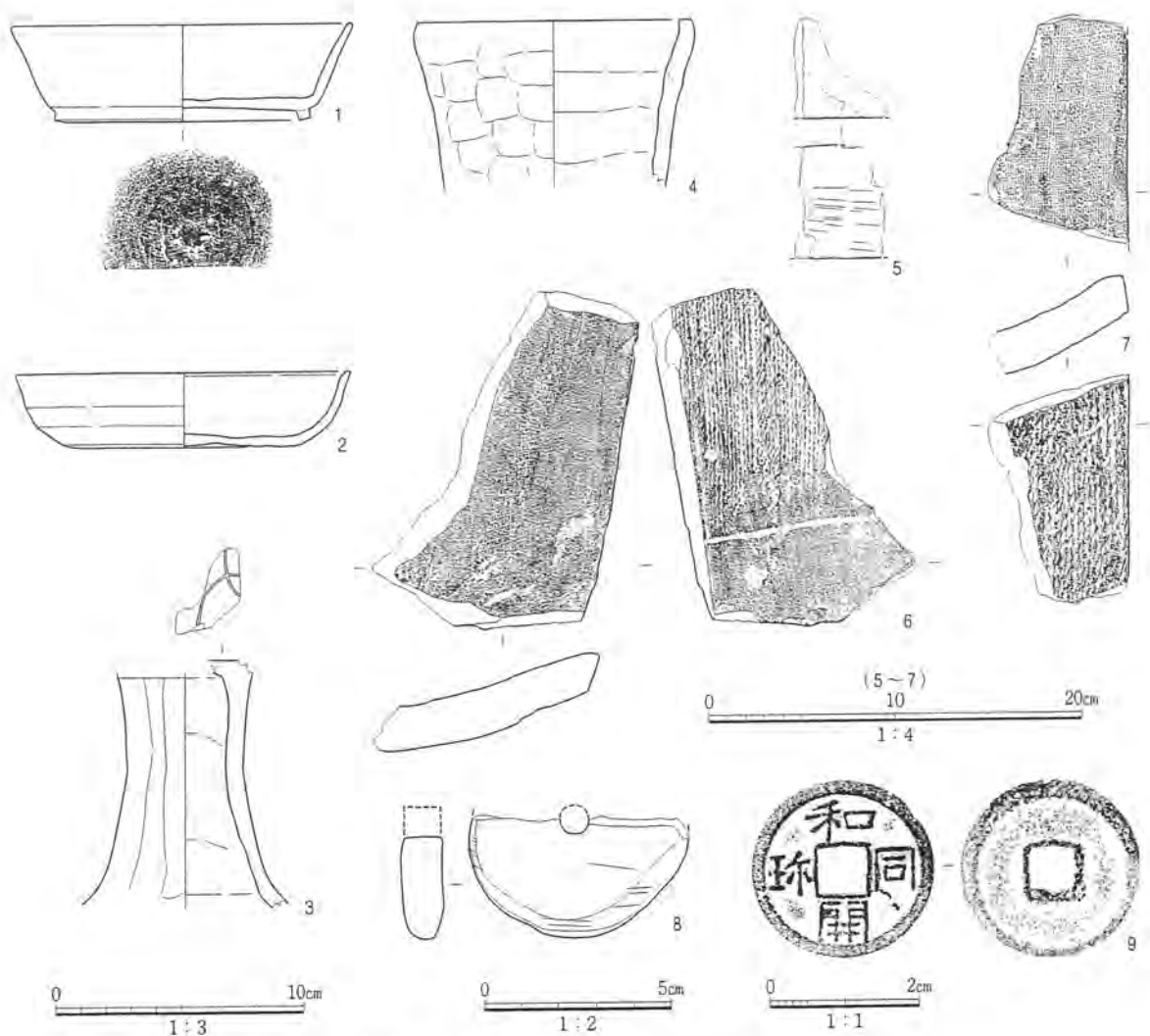


図6 第4層および第4層内の遺構出土遺物
第4層(1~4・6・9)、SK401(5)、SD402(7・8)

の痕跡を顕著に残し、内面はナデで調整する。また、内面は一部が淡桃色に変色している。平瓦6は全体的に著しく歪んでいる。凹面に布目、凸面に縄目タタキの痕跡を留めるが、布目はその大部分をナデで消している。側面はヘラケズリによって成形し、凸面には性格不明の沈線が施されている。和同開珎9は直径4.05cm、厚さ0.15cmを測り、鋳上がり、残存状況ともに良好である。門構えの開く、いわゆる「新和銅」である。以上のほか瓦器の細片などが出土しており、本層から出土した資料は、奈良時代後半期を中心としつつ中世前期までの遺物を含んでいる。

c. 第3層上面検出遺構

調査区のほぼ全面にわたって多数の遺構を検出したが、重機によって当面まで掘削されていたため、本来は上層に伴う遺構を多数含んでいる。検出した遺構には、穴蔵SK201のほか、土壌SK202~209、SX210などがある。これらの遺構からは、SX210内に設置された溶解炉や、鞆の羽口、坩堝、鉄滓など、金属加工に係わる遺物が多量に出土した(註1)。これらのうち、鉄滓の出土量は約230kgに及んでいる。また、敷地の中央部では土壌などの分布が希薄な範囲が東西に延びている(図8の網掛け部分)。この範囲には礎石と思われる石材や、それらの抜取り穴と考えられる小土壌が分布して

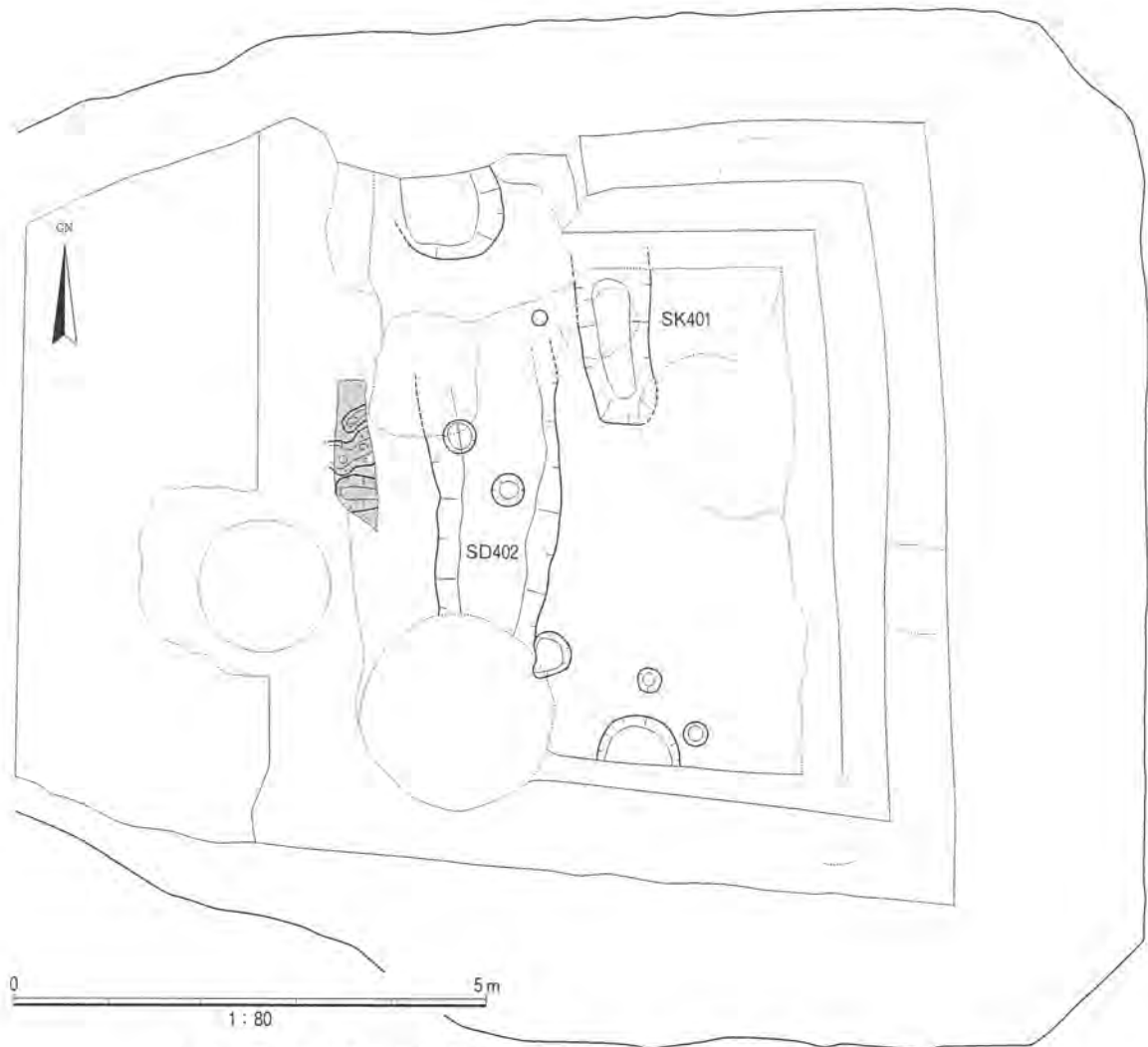


図7 第4層の遺構(網掛け部分は上面検出遺構、それ以外は層中・下面検出遺構)

いる。明確に構造を復元することはできなかったが、この位置が敷地境として機能し、礎石などはその区画施設であった可能性が高い。

SK201 調査区東北部で検出した穴蔵SK201は、東西2.82m、南北2.42mの方形を呈する(図9)。検出面からの深さは0.80mあった。4周には石材を3段に積上げ、4隅には長辺が0.50~0.70mの大型品を用い、各辺にはそれよりも小型の石材を使用していた。各辺では、下部ほど大型の石材を使用する傾向がある。また、石材には石臼などの転用品が多く含まれ、被熱痕を有するものがあつた。廃絶後に埋立てられ、その後にSK211が掘削されていた。

当遺構からは、瀬戸美濃焼10、肥前陶器11、肥前磁器12・13、焼塩壺14、金属製品15、土製品16、瓦質土器17、備前焼18、鉄製羽釜19が、廃絶後の埋立て土から出土した(図10)。

このうち瀬戸美濃焼志野向付10は、外面下半を露胎とし、4隅には鉄釉で文様を描く。一部で釉薬が荒れており、二次的に被熱したようである。肥前陶器皿11は、外面下半が露胎で、砂目跡を有する。外面に蝶文を染付する肥前磁器碗12は、内面に焼成時の灰が付着し、また外面底部には冷却時の割れがあるなど、粗製品である。壺13は外面に松竹梅文を染付している。板作りの焼塩壺14は外面の劣化が著しい。外面には押印があるが、「泉」以外は判読できない。土製品16は、男性を模した土人形である。

瓦質土器羽釜17は、外面の鐙部以下には顕著にススが付着する一方で、内面には使用痕が観察できない。2方向に耳を持ち、外面および内面口縁部には丁寧なヘラミガキを施している。堺播鉢18は外面の一部に塗り土を施し、底面には重焼きの痕跡が認められる。鉄製羽釜19の外面は、錆で著しく膨らんでいる。

これらSK201の埋立て土から出土した遺物は、11・13など17世紀に遡る遺物を含む一方で、14・18など18世紀前半以降の資料をも含んでいる。よって、廃絶時期を18世紀前半に求めることができる。

SK202～209 本層上面で検出したSK202～209をはじめとする土壌群は、基本的に鉄滓などの廃棄物として掘削されたものである。出土した遺物のうち、特徴的なものを図化した(図11)。

肥前陶器皿20の外面下半は露胎であり、内面には鉄釉で直線文を描く。内面底部には2箇所胎土目を有する。本来は3箇所あったであろう。碗23は薬灰釉を掛け、内面には焼成時の灰が付着している。高台はいわゆる兜巾に削出している。21は瀬戸美濃焼の灰釉丸皿で、口径8.0cmと小型である。全面に灰釉を施し、底面には輪トチンの痕跡がある。22は丹波焼の大平鉢であり、底面外周には重焼き痕がある。内面には陶片による重焼き痕を有し、焼成時の降灰が著しい。24は口縁部に顕著にススが付

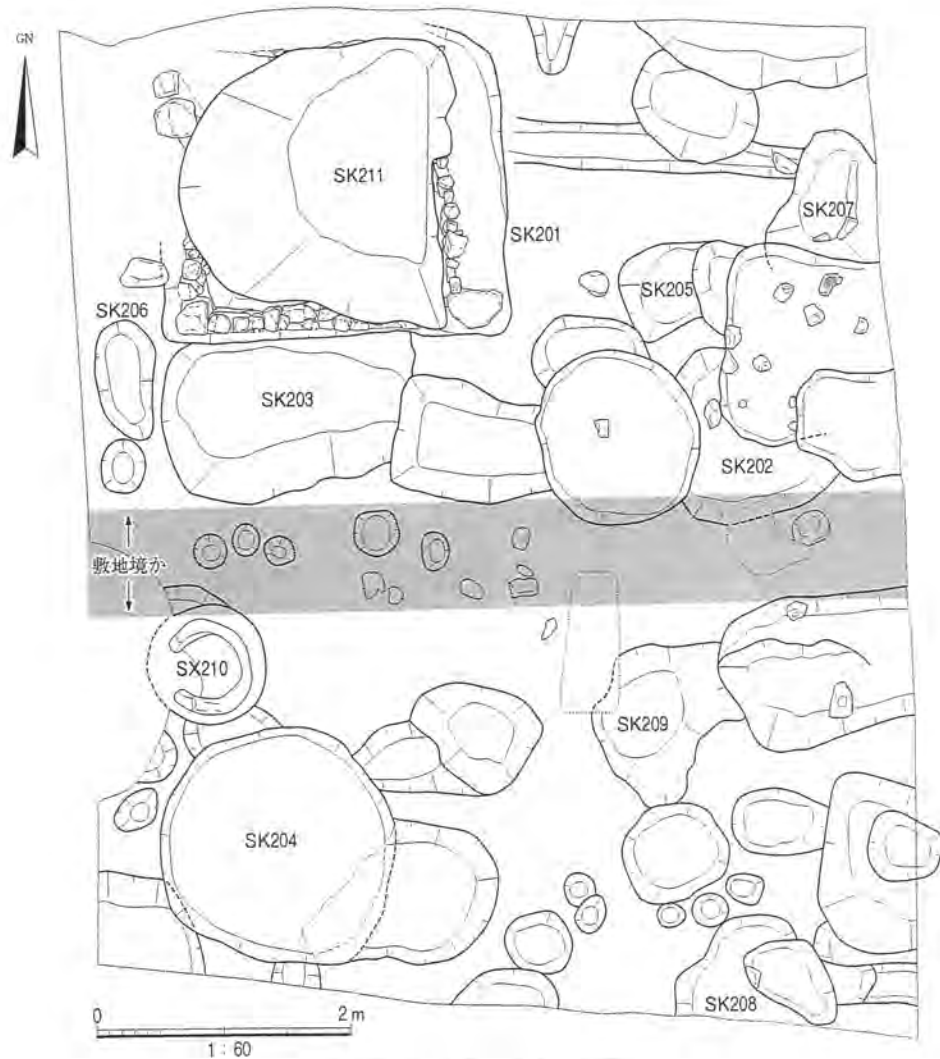


図8 第3層上面検出遺構

着する灯明皿であり、土師器皿25は回転ナデで調整し、底面には糸切り痕を有する。

肥前磁器では、色絵の碗28・29と、これとセットになる蓋26・27のほか、瓶30、盃台31、筒形碗32を図化した。このうち26～29は、黒線で輪郭を描いた後に赤・緑・黄・金色を使用して、梅・柴・ススキを描いている。いずれも丁寧な作られた精製品である。瓶30は高台部に砂が付着し、外面には花・鳥文を染付している。杯台31は口縁部に口鏝を施し、筒部には銅線が巻き付けられていた。筒形碗32は完形で出土した。外面は菊花氷裂文、内面の口縁付近は四方禪文、底部内面は手描きの五弁花で飾る。底部外面の銘は2重方形枠の「渦福」である。

33は関西系陶器の灰落としである。口縁部は使用による二次的な被熱痕を有する。外面上部には緑色を呈する鉛釉によって文様を描き、また外面底面には「T」、内面底部には「|」を、呈色剤を加えない鉛釉で描いている。円形を呈する金属製品34は、厚さ1.0mmと薄い造りである。中心部には径2.1mmの孔を穿ち、上面には打ち出しで植物を表現している。飾金具の一種かと思われる。

これらの遺物のうち、SK202・203・205から出土した20～24については、豊臣後期から徳川氏大坂城期の初期にその年代が求められる。他の遺構との切合い関係も整合的で、これらの遺構は第3層に伴う遺構である可能性が高い。その他の遺物については、17世紀後半代の30、17世紀末～18世紀中ごろの26～29、18世紀後半の32・33など、17～18世紀に位置づけられ、本来は第2層に伴う遺構である。

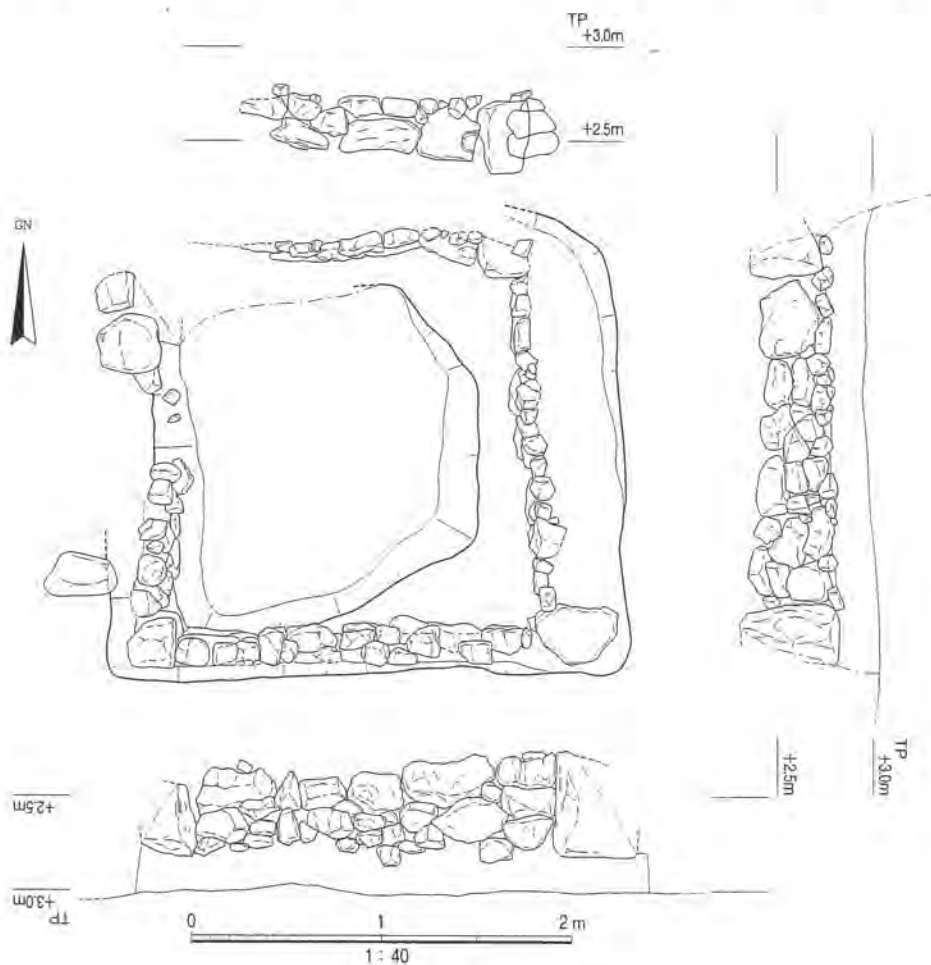


図9 穴蔵SK201実測図

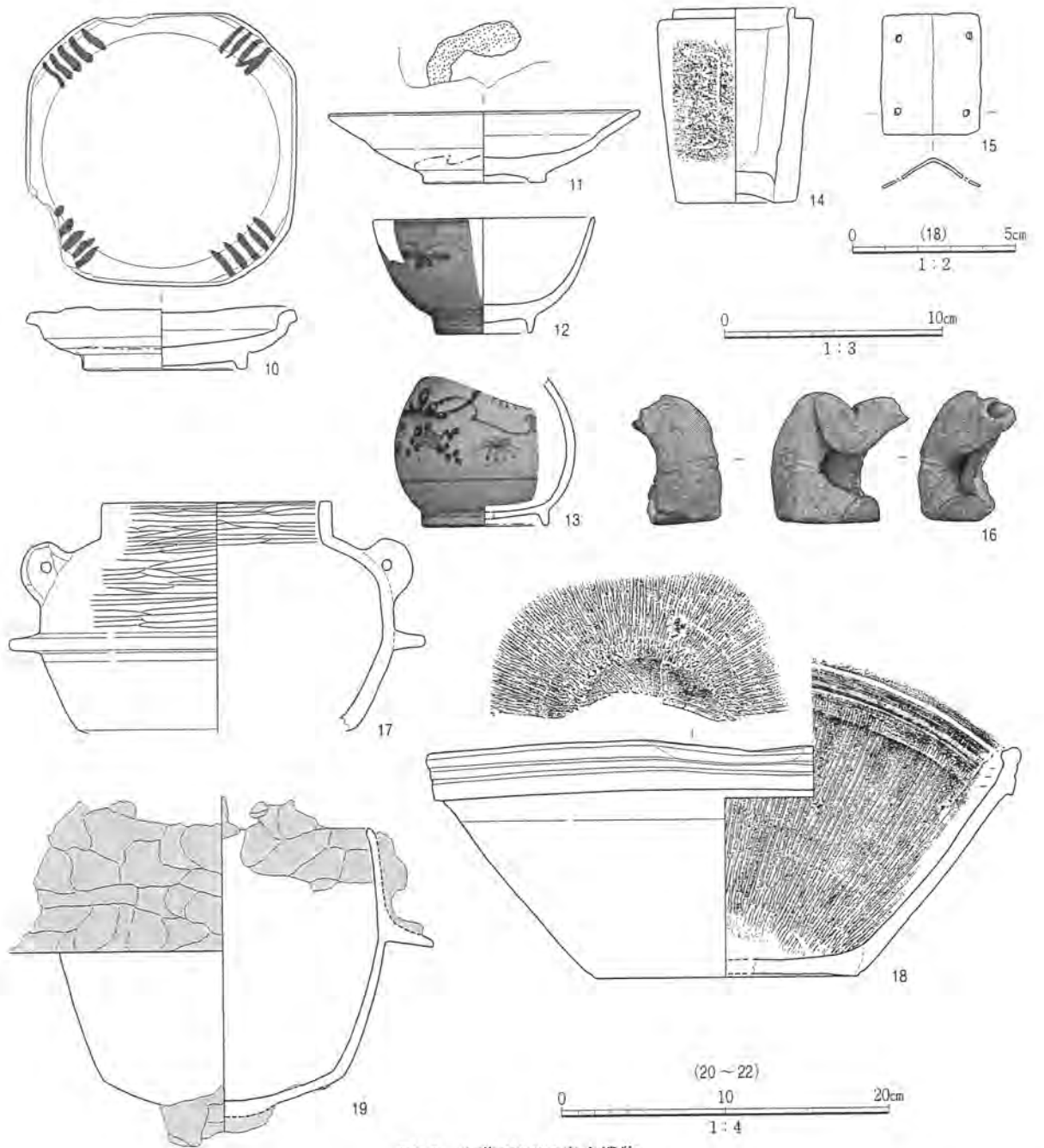


図10 穴蔵SK201出土遺物

SX210 調査区西端で検出したSX210は、直径0.93mの掘形の中に溶解炉を据えていた(図12)。ただし、炉本体が明瞭に被熱・使用の痕跡を有するのに対して、掘形の周囲に被熱の痕跡は認められなかった。福岡県北九州市室町遺跡では、本例と類似した状況で溶解炉を再使用した例が知られており[北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1990]、防水・耐火・強度補強を目的として炉底下に設置された地下設備であるとの考察が行われている。また時期は13~14世紀と遡るが、大阪府堺市日置荘遺跡でも類似した遺構が検出されている[大阪府文化財センター1995]。今回検出した遺構も、そうした防水など地盤改良を目的として設置された地下設備の一種である可能性が考えられる。SX210からは、肥前磁器碗36など17世紀代の陶磁器がわずかに出土している。

35は、SX210中に設置された溶解炉である。底を有し、出湯用の口を上辺に切っていることから、「ル」

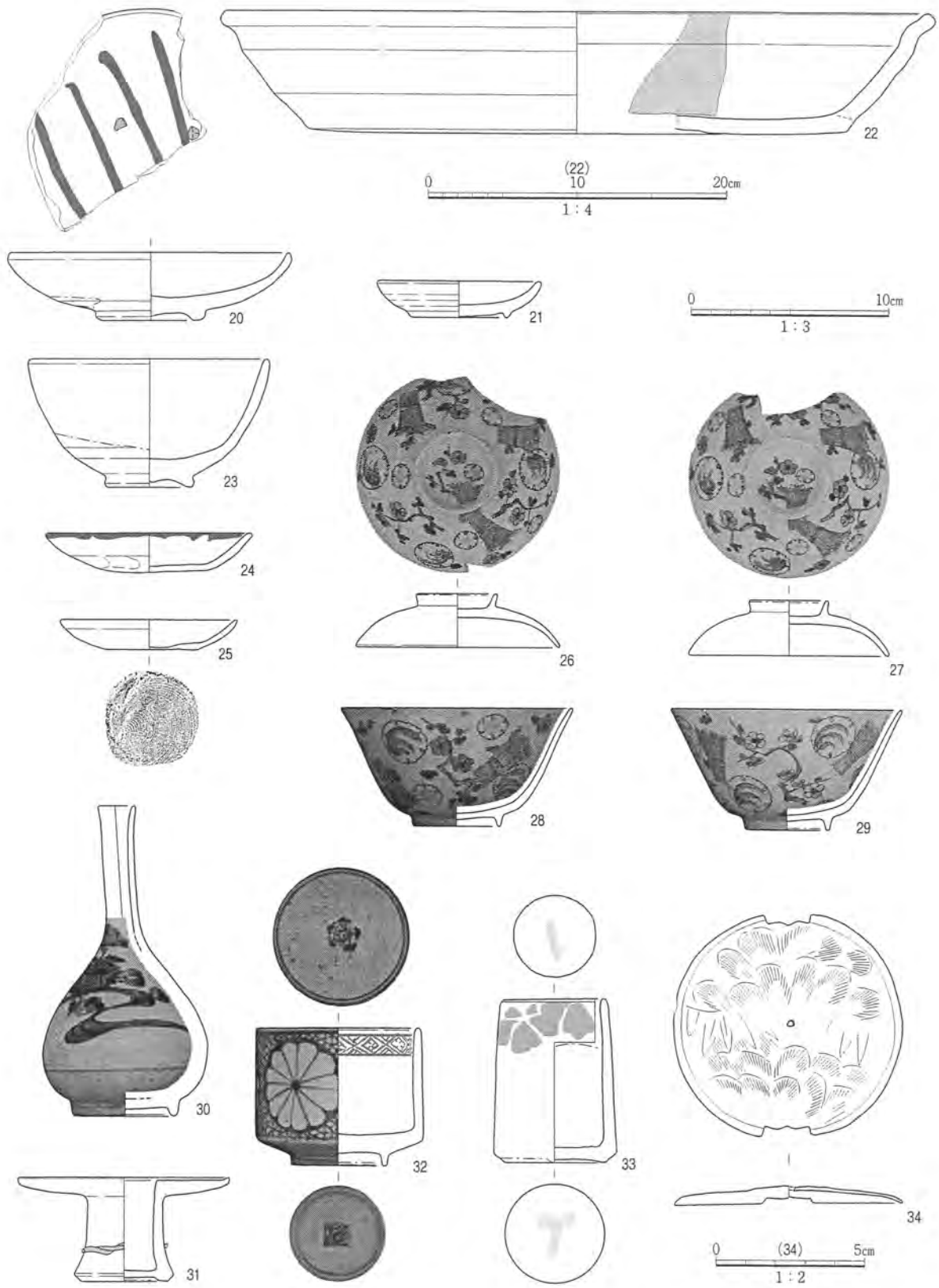


図11 SK202~208ほか出土遺物実測図

SK202(20・22)、SK203(21)、SK204(25・27~30・34)、SK205(23・24)、
SK206(26)、SK207(32)、SK208(33)、第2層(31)

と呼ばれるこしき炉の最下段部分であることがわかる。直径77.0cm、高さ50.2cmを測り、長石などを
含むが比較的精良な胎土を使用しており、スサを多量に混入している。外面には垂直方向に延びる織
維状の圧痕が認められ、成形後にワラなどを巻いて乾燥途中の変形や破損を防いだ可能性があるだろ
う。上面には、上段の炉を重ね合わせるための段差が造り出されている。内面は全面にわたってガラ
ス質が付着しており、上半では特に顕著である。

そのほか、第3層上面の遺構から出土した金属加工に係わる遺物を、図13に示す。

37は坩堝の蓋であり、38・39はこの蓋とセットになる坩堝と推測される。3点とも径0.7mmほどの
長石を含む砂質で粗い胎土を使用し、ワラと思われる植物繊維を多く混入している。また全面がガラ
ス質化し、内面には緑色を呈する金属分が点状に付着する。蓋37は、空気抜きの為と思われる孔を中
央に穿っている。坩堝の上半部38は、上面に蓋の一部が溶着している。また口縁部付近には、内・外
面の対応する位置に幅約8cmの圧痕がある。坩堝を炉から取り出す際、金鉗によってついたものであ
ろう。底部39は分厚い器壁を持ち、底面は他の部位に比べてガラス質化が顕著ではなかった。

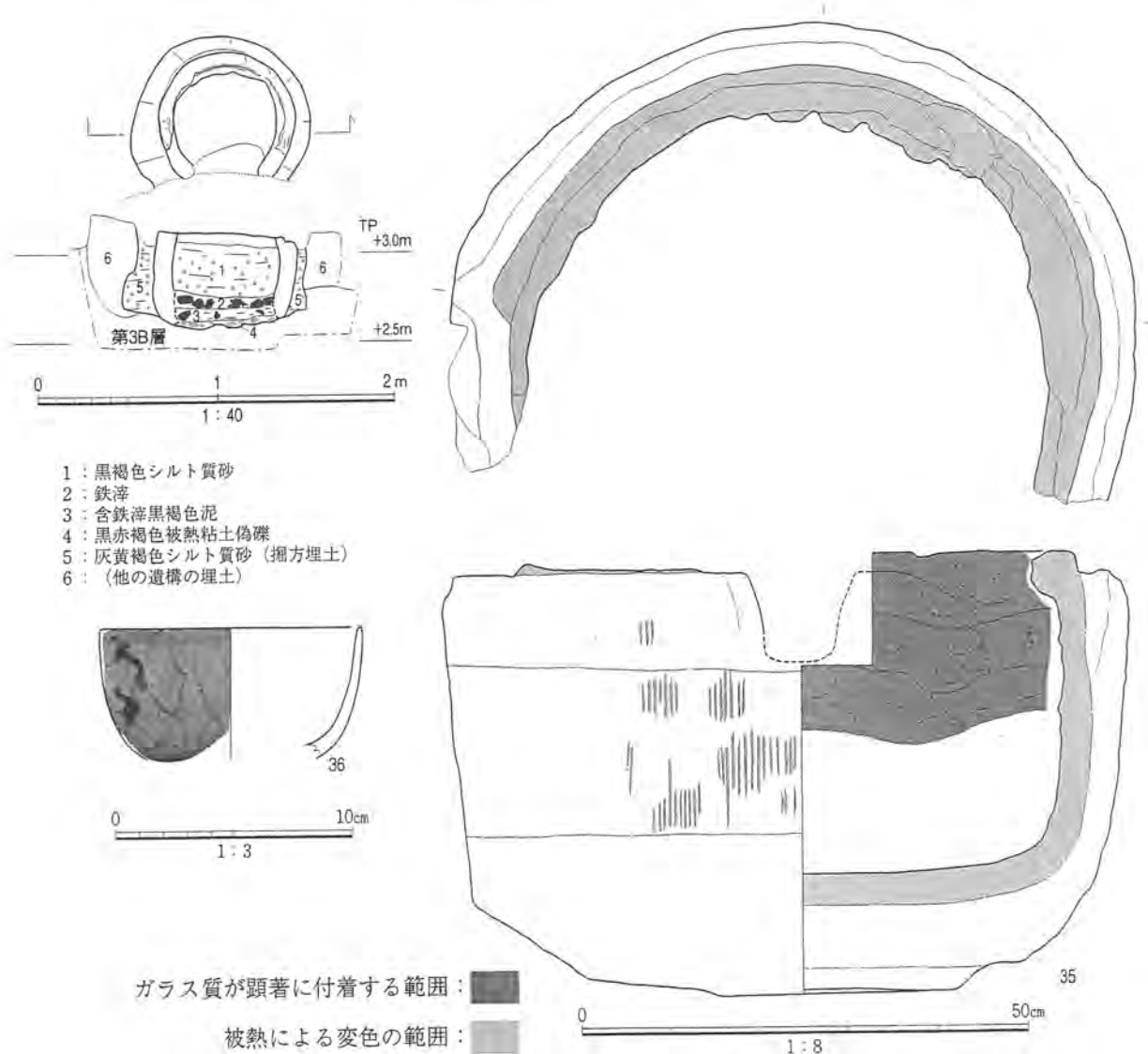


図12 SX210実測図および出土遺物

これら37~39に対して蛍光X線による分析を行った結果、銅・亜鉛と少量の鉛のほか、微量ながらヒ素・スズを検出した。これらの金属成分から、今回出土した坩堝および蓋は真鍮を溶解するために使用された可能性が高い。徳川氏大坂城期における真鍮の生産については、京都の左京三条四坊十町跡(現・中京区御池通富小路西入東八幡町)などでの例が知られている[京都市埋蔵文化財研究所2004]。同調査では、今回の出土例と形態は異なるものの、坩堝やその蓋が炉などの遺構を伴って検出されている。一方大坂では、これまで炉を伴った出土例はないが、大坂城跡の調査などで銅・亜鉛の付着した坩堝の出土例がある[大阪市文化財協会1999・2003]。ただ、これらの調査で出土した坩堝はそれぞれ形態が異なり、そうした差異が何に起因するものか、今後比較と検討を行ってゆく必要があるだろう。

40~42は鞆の羽口である。今回の調査で出土した羽口のうち、おおよその形状を把握できるものは48点あり、胎土・法量・成形方法から大まかにA~Cの3類に分類した。このうち後述するA類は37点、

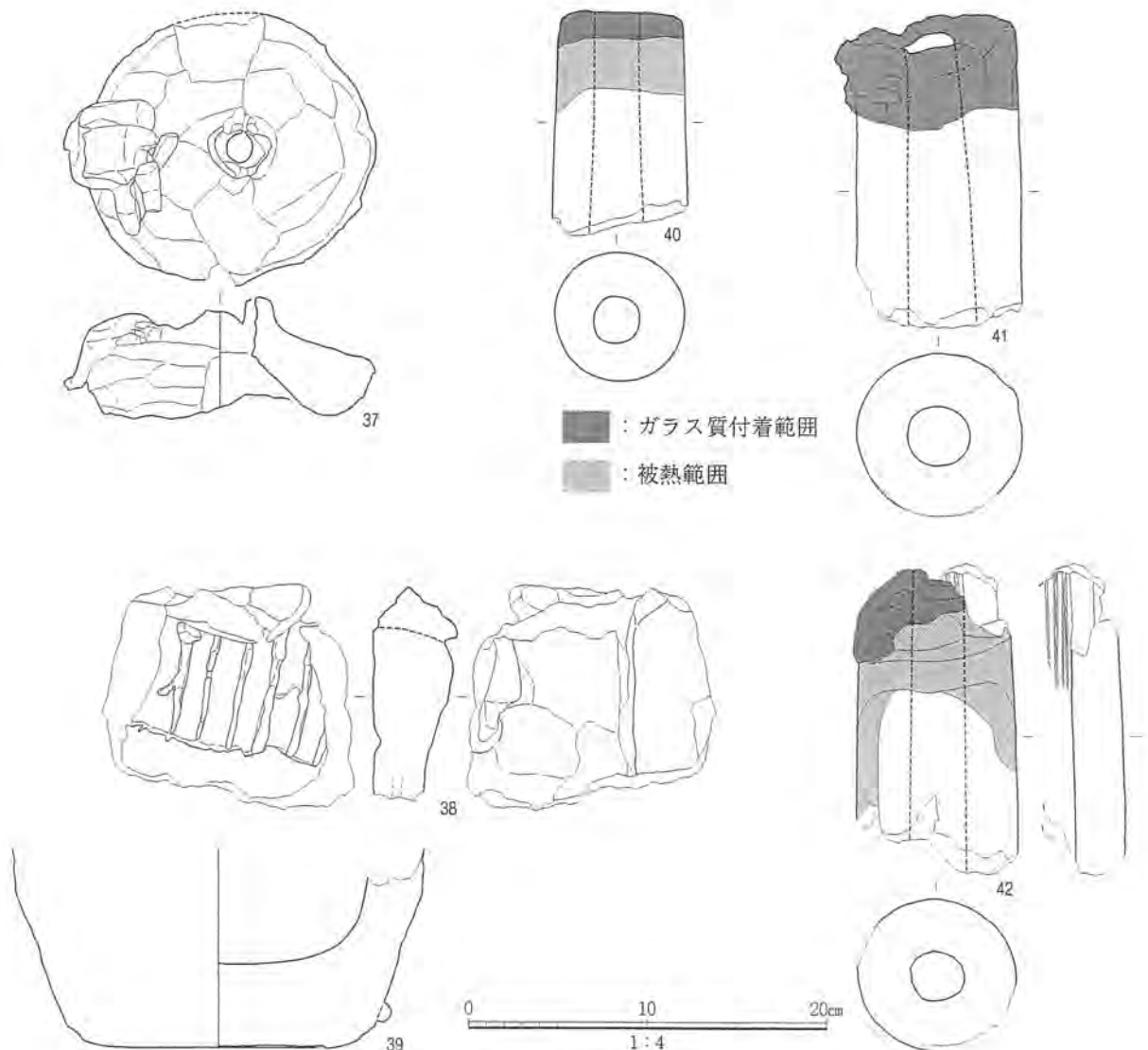


図13 金属加工関連遺物

SK203(42)、SK204(37~39)、SK208(40)、SK209(41)

B類は8点、C類は3点である。図13には、それぞれの最も残存状況の良い個体を図示した。まずA類の40は、径1mm以下の長石を多く含む粗い胎土を使用し、外径は6.9～7.6cmと比較的細い。孔径は2.5cmほどである。B類41も40と同様の粗い胎土を使用するが、外径が9.0～9.3cm、口径も2.8～3.8cmと、A類よりも一回り大きく作られている。一方、C類42は鉋物の混入が少ない胎土を使用している。C類に特徴的なのはその成形方法で、孔の壁面に先の細いヘラ状の工具を使用して削ったような痕跡を有する。また、外径は8.6cm～9.1cm、孔径は2.9cmである。このうちC類は豊臣後期～徳川氏大坂城期初期の遺物と相伴しており、該期に遡る可能性がある。

これらの金属加工関連遺物のうち、羽口の形態や鉄滓の状況から考えて、当調査区に鍛冶を行う工房が存在した可能性が高い。1696(元禄9)年刊行の『難波丸』には「鍛冶」を行う職人が「天満鳥井ノ前」に居たことが記され、また1679(延宝7)年刊行の『難波鶴』にも天神鳥居筋に鍛冶屋が居たことが記されるなど、当地周辺で鍛冶工房が営まれていたことは確実である。今回の調査地では炉など直接的に生産に係わる遺構は検出できなかったが、当地周辺に展開した鍛冶屋の一軒に当たると考えてよいだろう。一方、SX210に据えられた溶解炉35、真鍮の溶解を行ったと考えられる坩堝38・39、蓋37は、鍛冶作業に直接的には係わらない資料である。先にも触れた地盤改良などの目的で、近隣地より搬入されたものと考えておきたい。

〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果を時代別に要約すると、以下の通りである。

- ・ 古代：奈良時代後半を中心とする土器類のほか、瓦・埴が出土した。周辺に寺院あるいは官衙施設の存在が想定され、今後周辺地域の調査で関連する遺構・遺物の検出が期待される。
- ・ 豊臣後期～徳川氏大坂城期初期：この時期に整地が行われ、当地において再び積極的な開発が行われる。該期に遡る可能性の高い遺構からも羽口が出土しており、この時期から鍛冶作業が行われていた可能性がある。
- ・ 徳川氏大坂城期：該期の遺構から金属生産に係わる遺物が多量に出土し、当地で鍛冶作業が行われている。鍛冶作業には直接的には関係しないが、溶解炉や真鍮用の坩堝・蓋は、今後、徳川氏大坂城期における金属生産技術を考える上で重要な資料となるだろう。

註)

- (1) 金属加工関連遺物については文化財研究部保存科学担当係長 伊藤幸司が分析を行い、その観察・理解についても市川を助けた。なお蛍光X線分析に当っては、大阪歴史博物館に設置された微小部測定用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製Eagle II改良型)を使用した。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『大坂城跡』Ⅳ

2002、「TJ00-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.181-190

2003、「OS87-14次およびその周辺の調査」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.299-320

大阪府文化財センター1995、『日置荘遺跡』

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1990、『室町遺跡-小倉鋳物師に関する遺跡の調査-』（北九州市埋蔵文化財調査報告書 第95集）

京都市埋蔵文化財研究所2004、『平安京左京三条四坊十町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-10）

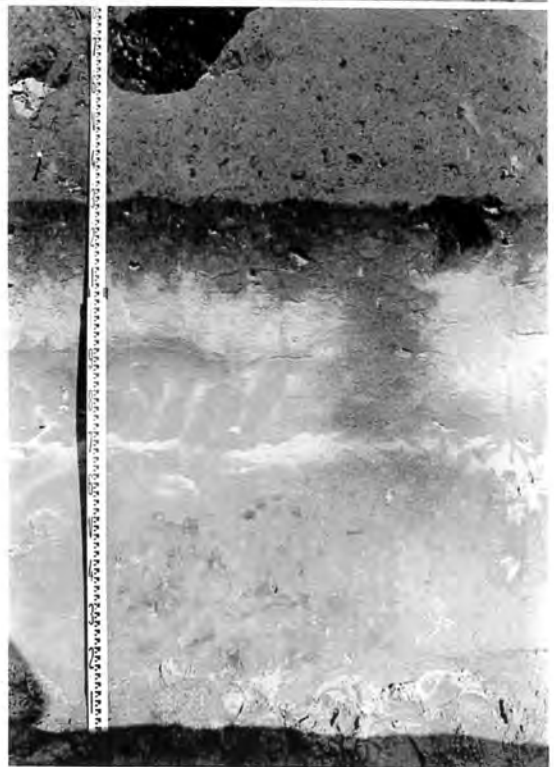
調査区全景
(南西から)



調査区東壁断面
(西から)



深掘り断面
(東から)



第3層上面の遺構
(北東から)



穴蔵SK201
(南西から)



SX210検出状況
(西から)



II 中 央 区

調査地は前期においても後期においても宮殿を画する回廊の南西角の外側に位置する場所に当り、古代の歴史的景観を考える上でも重要な地点である。

工事に先だって行われた大阪市教育委員会による試掘調査で、地山とみられる黄褐色の粘土層が地表下約0.4mの比較的高い位置に見つかったことから、本調査を行うことになった。調査は南北12m、東西3mの調査区を設定し、試掘結果に基づいて近世～現代の地層を可能な限り重機で除去した。その後、平成20年6月2日から

人力による調査を開始し、掘削と精査を行った。検出した遺構は、適宜、図面や写真などで記録した。当初の予想では本調査地が宮殿外側の空地地に当るのではないかとみられていたが、攪乱や近世の遺構・地層を除去したところで、古代に遡る可能性のある柱穴が4基並んで見つかった。平成20年6月7日に器材の撤収を含めたすべての作業を終了した。

なお、本報告で用いた方位は世界測地系による座標北で、標高はT.P.値を用い、本文および図中ではT.P.+○mと記す。



図2 調査区の位置

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

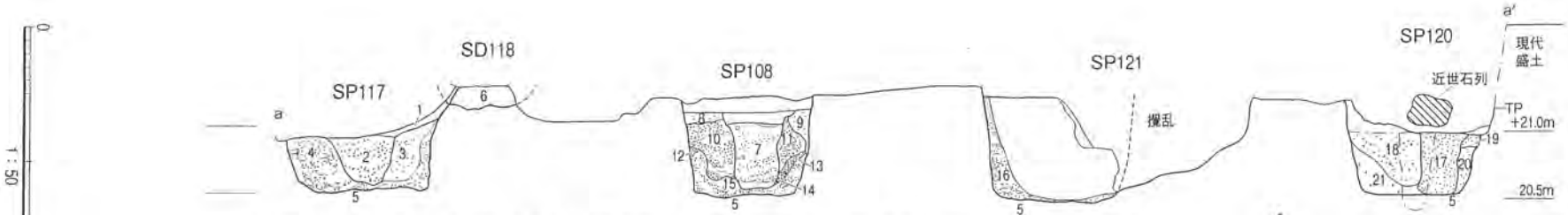
第1層：重機で除去した近世後半～現代の地層である。層厚は35cmである。

第2層：調査区北部と中央部で部分的に見られた灰褐～暗黄褐色の砂混り粘土質シルトの整地層で、炭や焼土が混る。最大層厚は6cmである。本層から18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土した。

第3層：黄灰色の砂混り粘土質シルト層で、出土遺物はない。本層以下が段丘構成層、いわゆる地山である。

地層の堆積状況	層名	岩相・時期など	備考
	第1層	現代盛土・攪乱	
柱穴掘形 柱穴 取穴 SD118 SK03 (19世紀前半) 石列	第2層	18世紀後半～19世紀前半 灰褐～暗黄褐色砂混り粘土質シルト	陶磁器・近世瓦など
SP120・121・117・108 SX05など (16世紀後半～末)	第3層	黄橙～明黄褐色粘土質中粒～細粒砂 (段丘構成層)	断面図層番号5

図3 地層と遺構の関係



- 1 : 黄褐色 (10YR5/8) 砂混りシルト質粘土 (酸化鉄を含む)
- 2 : 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土混り礫質粘土 (酸化鉄を含む)
- 3 : 黄褐色 (10YR5/6) 砂混りシルト質粘土
- 4 : 黄褐色 (10YR5/6) ~ やや黄色粘土混り礫質砂
- 5 : 黄橙色 (10YR5/8) ~ 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質中粒 ~ 細粒砂 (段丘構成層)
- 6 : 明褐色 (7.5YR5/6) 砂混りシルト質粘土 (酸化鉄を含む)
- 7 : 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土混り礫質砂
- 8 : 黄褐色 (10YR5/6) 砂混りシルト質粘土 ~ 粘土質シルト (酸化鉄を含む)
- 9 : 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂混りシルト質粘土 ~ 粘土質シルト (酸化鉄を含む)
- 10 : 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土混り礫質砂 (地山偽礫、酸化鉄を含む)
- 11 : 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂混り粘土質シルト (地山偽礫、酸化鉄を含む)
- 12 : 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土質砂
- 13 : 灰色 (7.5Y4/1) 粘土質細粒 ~ 中粒砂
- 14 : 灰色 (5Y4/1) 粘土質中粒砂
- 15 : 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土混り礫質砂
- 16 : 褐色 (10YR4/6) 砂・礫混り粘土質シルト
- 17 : 黄褐色 (10YR5/6) 砂混りシルト質粘土
- 18 : にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂・礫混りシルト質粘土 (酸化鉄を含む)
- 19 : にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂混りシルト質粘土 ~ 粘土質シルト (酸化鉄を含む)
- 20 : 褐色 (10YR4/6) 砂混りシルト質粘土
- 21 : 黄褐色 (10YR5/6) 砂・礫混りシルト質粘土

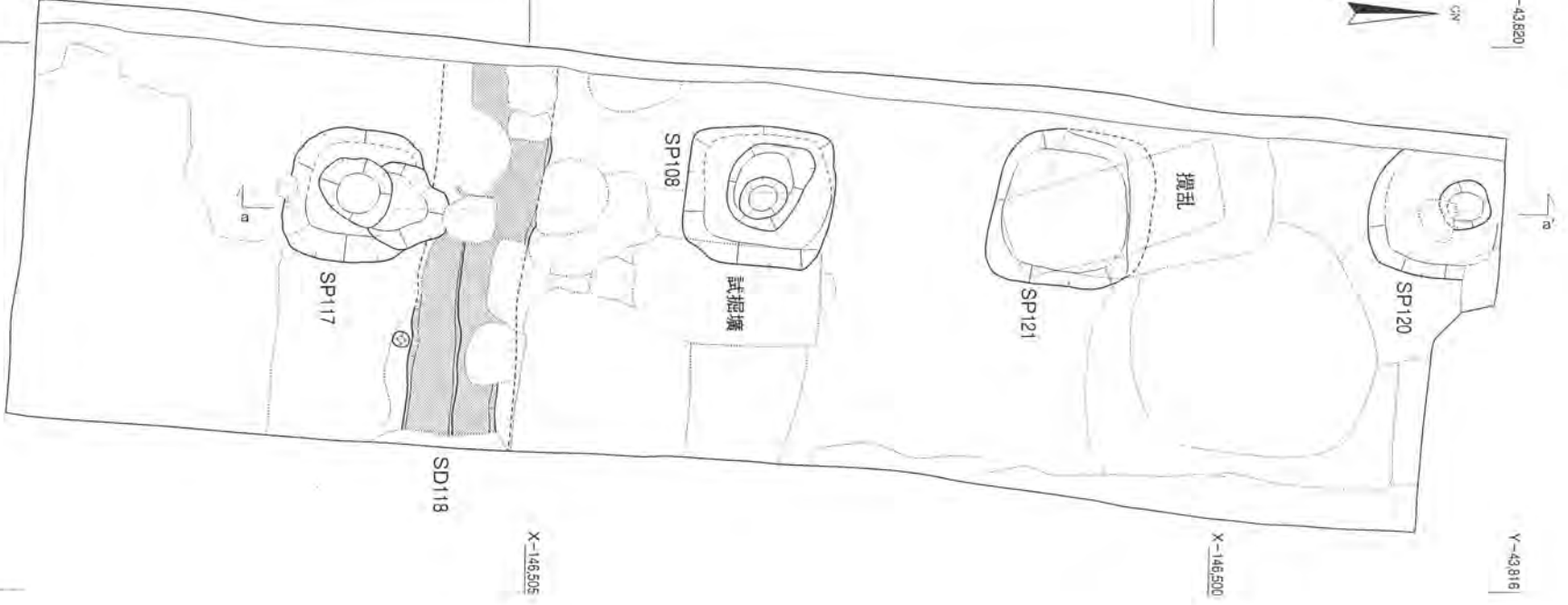


図4 古代の遺構平面・断面図

2. 遺構と遺物

i) 古代の遺構と遺物(図4・6、図版1～3)

古代の遺構は第3層上面で溝・柱穴を検出した。

溝：SD118はひどく攪乱されているが、上端を復元すると、幅が約0.8mになる溝で、ほぼ東西方向に設置されている。埋土は均質な明褐色砂混りシルト質粘土であるが、掘直されていたのか、北側と南側に最深部が2列あり、ともに0.17mの深さがある。図示した7世紀の須恵器杯2のほか、土師器や須恵器の破片が出土した。この中には古代の土師器把手の破片もある。SP117の柱抜取穴により一部が壊されていた。

柱穴：調査区を縦断するように、規模のよく似た隅丸方形の掘形をもつ柱穴4個が、南北一列に並んで見つかった(北からSP120・121・108・117)。これらの柱穴の掘形には黄褐色の粘土混り礫質砂が充填され、柱抜取穴にはやや粘性の強い土が入っていた。

各柱穴の規模は、SP120は東西0.80m以上、南北1.00m以上、深さが0.70mで、直径0.28mの柱当りがある。SP121は東西1.12m、南北1.10m以上、深さ0.85mで、攪乱により削りとられているため、柱の位置はわからない。SP108は東西1.02m、南北1.10m、深さ0.73mで、ほぼ中央に直径0.30mほどの柱当りがある。掘形から古墳時代後期の須恵器の高杯形器台の細片3が出土した。柱抜取穴から

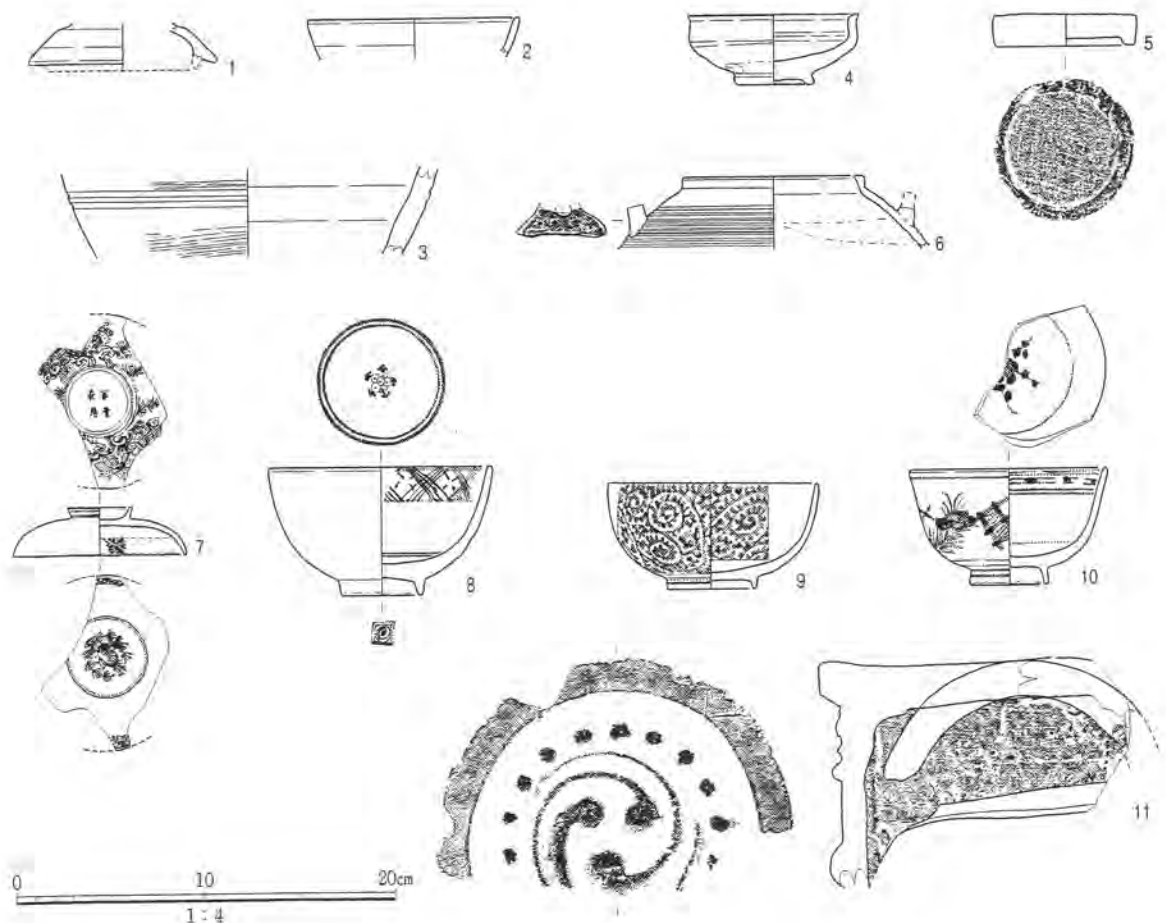


図5 出土遺物実測図

SP108(3)、SP117(1)、SD118(2)、SX05(6～11)、第2層(4・5)

土師器が出土したが、破片のため詳細な時期はわからない。SP117は東西0.98m、南北1.12m、深さ0.80mで、ほぼ中央に径0.50～0.60mの柱抜取穴があり、土師器の破片と7世紀代の須恵器杯蓋1が出土した。

規模・形状・配置からみて、これらの柱穴は一連のものとみられ、建物または堀の一部であると考えられる。北端のSP120と南端のSP117間の距離は、柱当りの中心で約8.10mあり、柱間の距離はややばらつきはあるが、平均2.70mである。これらの柱の中心をとる直線は北から東へ約0.5°振り、前期・後期の難波宮の中軸線の方角とほとんど変わらない。

ii) 近世の遺構と遺物(図5・6、図版3下段)

調査区の中で図6のトーンをかけた部分が第2層の分布していた範囲で、第2層の大半はすでに失われていた。このため見つかった遺構は、明らかに第2層の上面から掘りこまれたことがわかる土壌SK03を除き、第2層のどの位置から掘りこまれたものかはわからない。そこで、出土遺物や遺構上面の高さなどからある程度時期の推定ができるおもな遺構について述べる。

石列：調査区の北端で見つかった遺構で、幅0.35m以上で、深さ約0.30mの溝を東西方向に掘り、花崗岩の割石を上面が平坦に

なるように横一列に並べ、隙間に暗灰褐色砂混りシルト質粘土を充填したもので、調査区の中では石は5個見つかった。第2層上面のもっとも高いところよりはやや低いが、第2層の北端とはほとんど高さは変わらない。また、出土遺物もないため、はっきりとした時期はわからないが、第2層と同時期かそれ以前のものである可能性が高い。現在の道路とほぼ同じ方向に設置され、個々の石が北側に面をもつと考えられることから、近世の敷地境などの区画施設とみられる。

土壌：SK03は第2層上面から掘込まれた楕円形に近い平面形の土壌で、東西約1.50m、南北約2.00m、深さは0.45mである。埋土は暗灰褐色シルト質粘土で、砂・礫・炭・焼土が混る。瀬戸焼、備前焼、



図6 近世の平面・断面図

関西系陶器、肥前陶器・磁器や土師質の火鉢や焙烙など、19世紀前半までの遺物が出土したが、破片のため図化していない。

不明遺構：SX05は調査区の南端で見つかった掘込みで、何度も掘返されているため、平面の形状が不整形で、底も凸凹である。南側の調査区外へと続く。現状で東西2.50m以上、南北2.70m以上あり、最深部は南端で、0.55mあるが、調査区外はさらに深くなるようである。埋土は暗灰色の粘土が多く混る礫質砂で、炭や焼土が多く含まれる。18世紀後半～19世紀前半の遺物が多数出土したが、これらのうち、関西系陶器土瓶6、肥前磁器の蓋7と碗8～10、近世巴文軒丸瓦11を図示した。

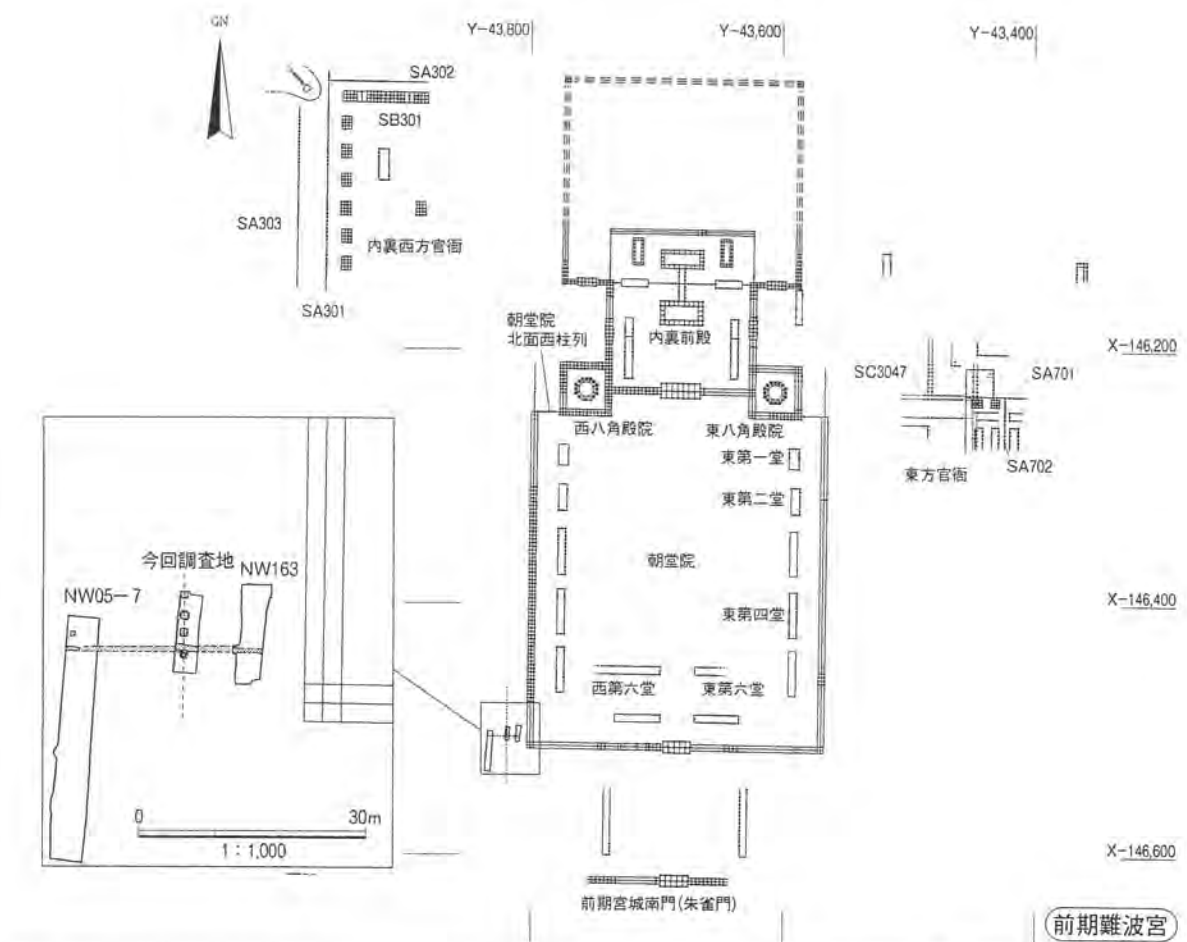
第2層の整地層から出土した肥前陶器向付4と焼塩壺の蓋5を図示した。これらは18世紀後半頃の遺物である。

3. 今回見つかった古代の遺構と前期難波宮の宮殿配置について

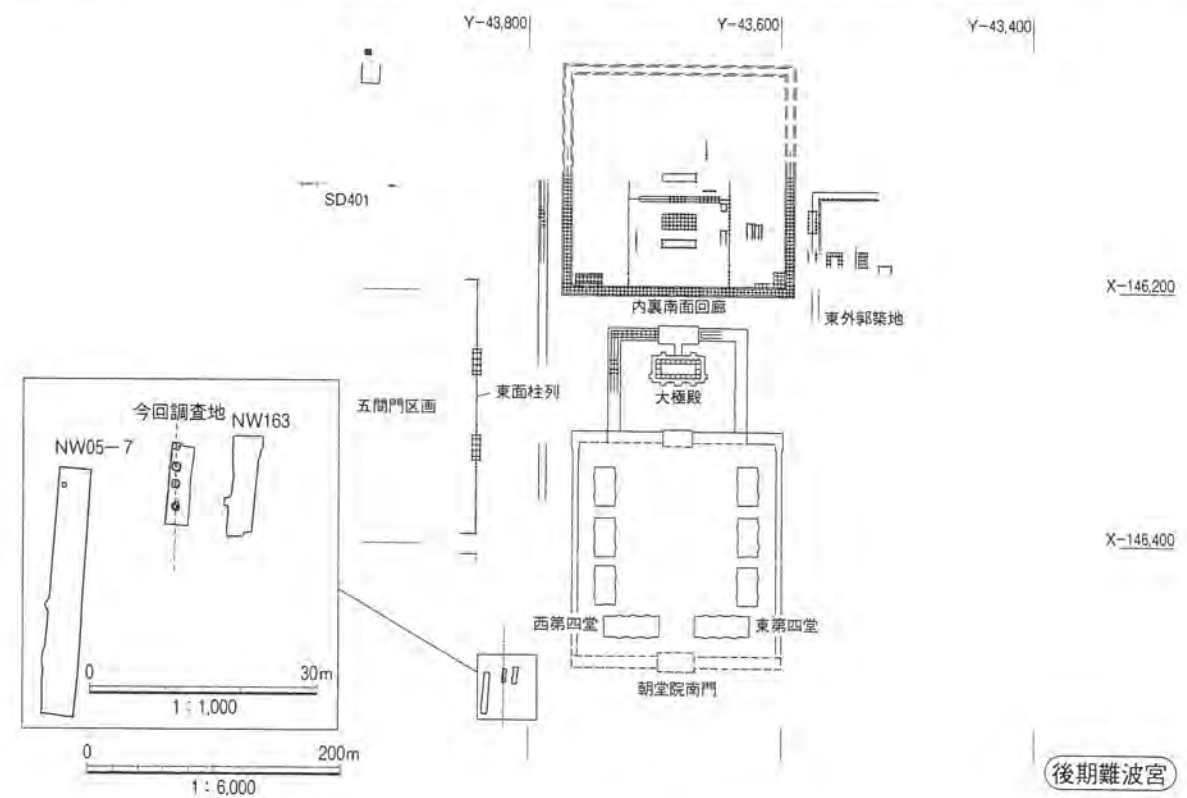
今回最も注目し値する遺構は、第3層上面で見つかった古代の南北方向の柱穴列と東西方向の溝であろう。これらはほぼ正方位に設置されており、7世紀代の遺物を含むことから、難波宮との関係を考える必要がある遺構である。図7に現在までに判明している前期と後期の難波宮の遺構配置図に今回の遺構の位置を入れたものを掲載した。

今回調査地に最も近い位置にある調査はNW163次調査とNW05-7次調査で、両調査でも東西方向の溝が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981、大阪市文化財協会2006]。これらの溝はほぼ一直線の位置にあり、今回のSD118はその間を埋める位置にある(図7)。各報告によると、埋土の状況もよく似ているので、同じ溝であると考えられる。NW163次調査では溝の埋土に焼土や炭が含まれることから、朱鳥元(686)年に焼失した前期難波宮と同時期の溝と推定していて、今回の溝SD118の出土遺物とも時期的に矛盾しない。この溝が前期難波宮の西回廊と直交方向のもので、前期難波宮の南回廊の中心から約7.5m北の位置にあることから、先の両調査でも推定されたとおり、この溝は前期の宮殿の規格に合わせて配置された可能性が高い。

南北方向の柱穴列はこの溝と交差する位置にあり、南端の柱穴SP117の柱抜取穴がこの溝が埋った後にその一部を壊している。SP117のみ他の構築物の可能性もあるが、4個の柱穴すべてが一連の遺構と考えるなら、建物と塀などの区画施設が考えられる。建物であれば溝SD118廃絶後のものである可能性が高くなるが、塀なら溝と同時併存の可能性も残る。隣接地が未調査であるため、この柱穴列が建物なのか、塀などの区画施設であるかなど、全貌は不明であるが、前期・後期の難波宮の中軸線(前期がN0° 39' 56" E、後期がN0° 32' 31" E)とほとんど変わらない方向に配置されていることや、柱穴列の軸が前期難波宮西回廊の中心から約18.0m、後期西回廊の中心から約54.0mの距離にあり、一尺を約30cmとするなら、距離においても方向においても、難波宮の規格と密接な関わりがある遺構と考えるのが妥当であろう。しかしながら、前期難波宮廃絶後から後期難波宮建設までの間の構築物である可能性も否定できない。



前期難波宮



後期難波宮

図7 前期・後期難波宮の宮殿配置図

〈まとめ〉

今回の調査地は両期の回廊の外側の位置にあって、これらに繋がる遺構が周辺で見つかっていないため、見つかった遺構が難波宮の中でどういった役割の建築物であったのかについては、今のところ手がかりはない。しかし、今回見つかった柱穴列と溝は、前期・後期の難波宮の構造を考える上で重要な位置を占めることは間違いなさそうである。今後の調査結果とも照合して、更なる検討が必要であろう。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1981、『昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査発掘調査報告書』、
pp.17～18

大阪市文化財協会2006、『株式会社アーバネックスによる建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW05-7)報告書』

調査区全景(北から)



地山上面検出の遺構(西から)

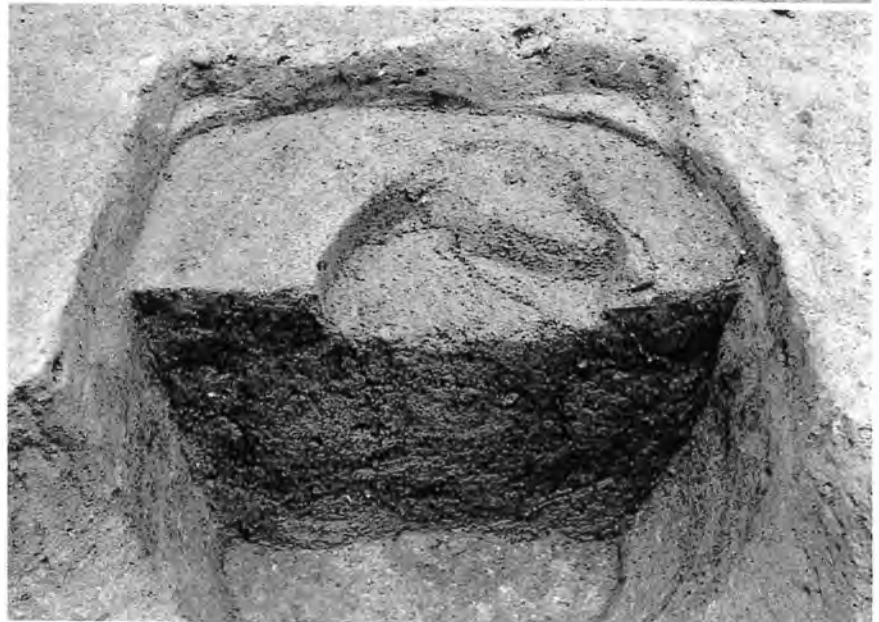
SP120(東から)



SP121(東から)



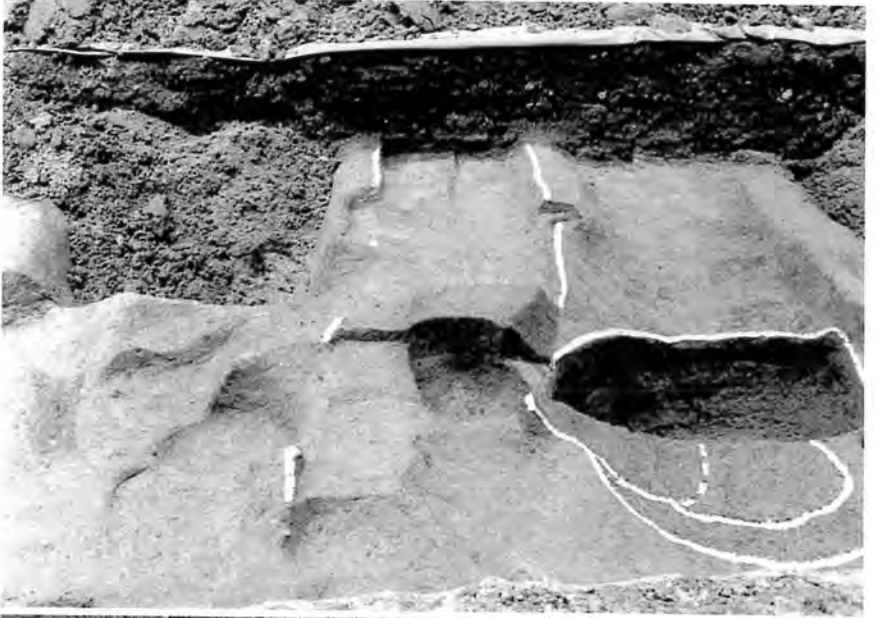
SP108(東から)



SP117(東から)



SD118(西から)



近世の石列(西から)



大坂城跡発掘調査(OS08-4)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区上本町西2丁目3-3・3-6
- ・調査面積 18m²
- ・調査期間 平成20年6月2日～4日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の稜線上に位置しており、周辺では、上町筋を隔てて東側でOS99-30次調査が、北西に近接して、OS00-54次調査などが行われている(図1)。このうち、前者では6世紀から7世紀中葉にかけての掘立柱建物1棟をはじめ、多数の柱穴が[大阪市文化財協会2002]、後者では18世紀後半から19世紀にかけての鋳造遺構、礎石建物、焙烙を投棄した土壌が検出されたほか、19世紀前半のイギリス磁器が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。

大阪市教育委員会が調査地の西部で実施した試掘調査でも、現地表面下約0.5mで当地域の地山層に至り、古代の柱穴が検出されたため、本調査となった。

調査は6月2日に調査区を設定して(図2)、19世紀以降の陶磁器・瓦・レンガを含む第1・2層を重機で掘削した後、6月3日から第3層を人力で掘削し、第4層の上面で遺構の調査を実施した。6月4日には第4層の上面で検出した古代の柱穴の写真を撮影し、実測図を作成した後、調査区を埋戻して、機材の撤収を含むすべての調査を終えた。以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東

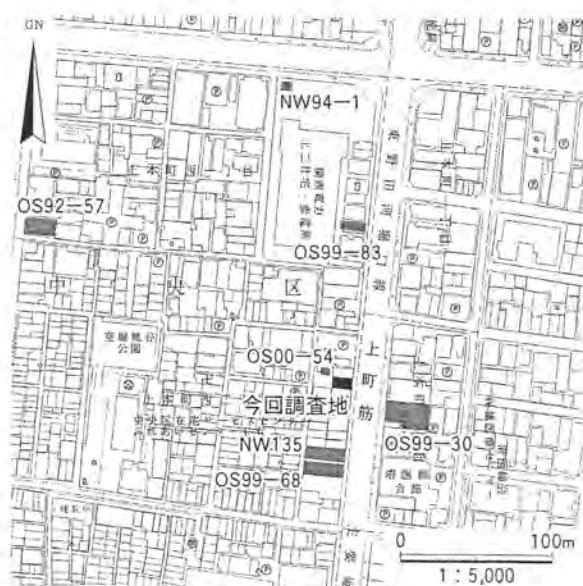


図1 調査地周辺図



図2 調査区位置図

京湾平均海面値)を用い、TP+〇mと表記した。示北記号は図1が座標北で、それ以外は磁北である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

調査地の現地表の標高はTP+20.90m前後あり、調査個所はほぼ水平な面をなしている。

第1層：黒褐色(10YR3/2)砂・礫混りシルト層で、層厚は30～46cmある。本層はレンガ・コンクリート片を多く含む近現代整地層である。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混りシルト層で、層厚は20～35cmある。19世紀以降の陶磁器・瓦のほか、レンガを含む近代の整地層である。

第3層：上部の黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混りシルト層、下部の第4層の偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂・中礫混りシルト層に区分しうる。層厚は上部が13cm前後、下部は30cm前後ある。下部から古代とみられる須恵器杯身底部片、土師器細片が出土した。本層は徳川期の整地層であり、調査区の西南部に位置する落込みSX09内を埋めている。

第4層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂・中礫混りシルト層からなる当地域の地山層で、中段段丘構成層に相当する。本層上面の標高はTP+20.60m前後で、調査個所の北西にあるOS00-54次調査地の地山層の標高と変わらない。

2. 遺構と遺物

a. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、第4層の上面で検出された柱穴SP02のみである。SP02の周辺に位置する直径0.10～0.20mの浅い小穴についても柱穴の可能性はあるが、柱痕跡が確認されなかったため確定しえなかった(図4)。

SP02 掘形の一边の長さが約0.70mで、深さは検出面から0.25mある。柱痕跡は直径約0.16mで、掘形の中央やや南寄りで確認した。掘形の埋土は、上部がにぶい褐色(7.5YR5/4)極細粒砂・礫混りシルト、下部は明褐色(7.5YR5/6)粗粒砂・粘土混りシルトで、ともに第4層の偽礫を多く含む(図5)。7世紀代とみられる土師器高杯1・甕2の細片が出土した(図6)。掘形の方角はN17°Wで、柱筋が予想される掘形の南および東側にサブトレンチを入れて調査したが組み合う柱穴は確認しえなかった。

b. 徳川期の遺構と遺物

当該期に属する遺構にはSK01、SP03・04、SX09などがあり、SX09以外は第4層の上面で検出されたが、遺構の形状や規模が判明したものは少ない。

SK01 調査区の西部に位置する土壌であるが、遺構の西側を近代の土壌SK07で攪乱されていた。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂・礫混りシルトで、15世紀代の瓦質土器、須恵器壺、平瓦な



図3 地層と遺構の関係図

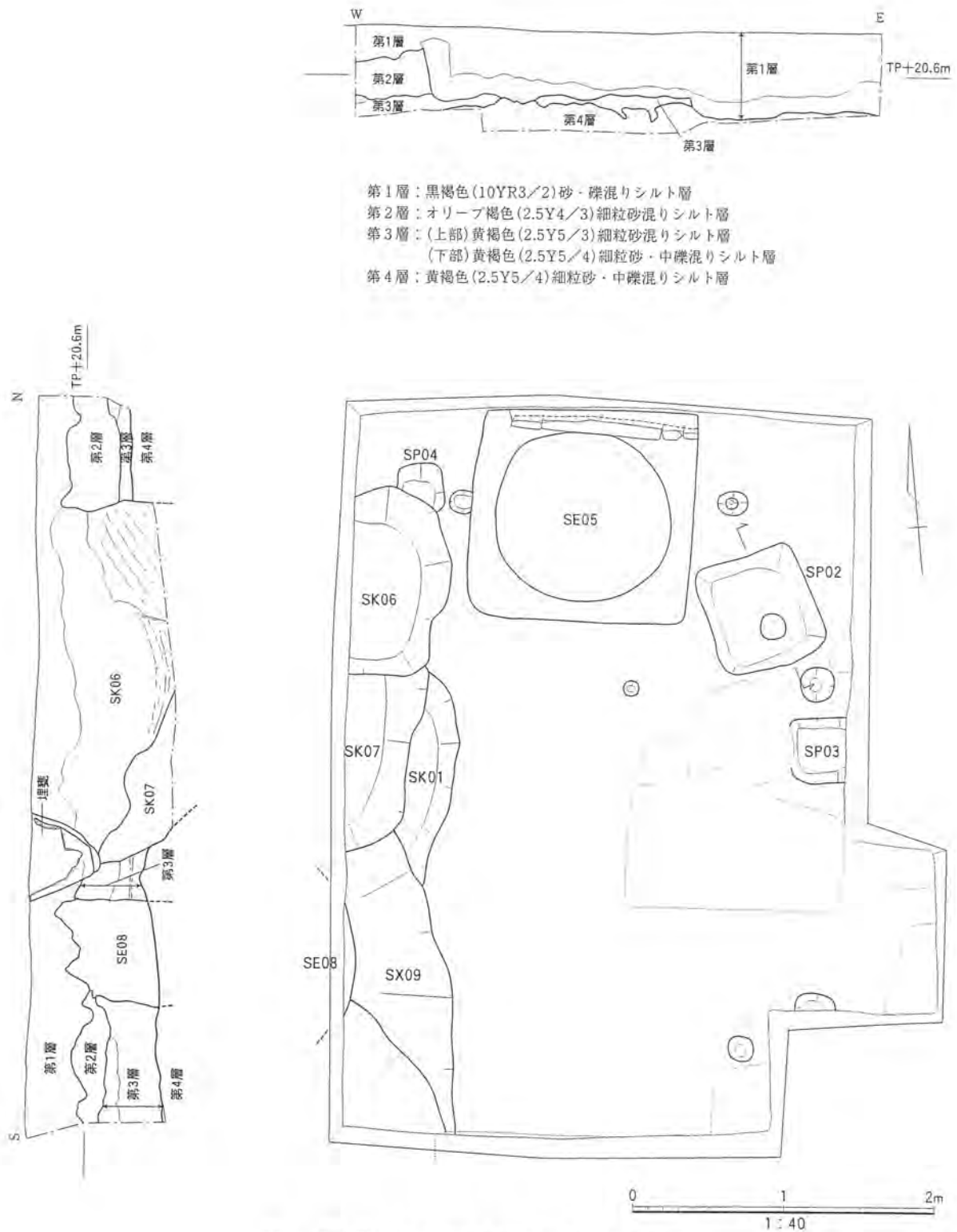


図4 第4層上面の遺構配置図および北・西壁断面図

どの細片が出土した。

SP03 調査区の東部に位置する南北0.40m、東北0.35m以上の方形の柱穴である。深さは検出面から0.16m前後あり、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混りシルトで、豊臣期の備前焼播鉢、平瓦の細片が出土した。

SP04 SE05の西側に位置する方形の柱穴で、東西0.26～南北0.30m、深さ0.25mある。掘形内に一辺約0.20mの方形の柱痕跡があった。埋土はオリーブ褐色(2.5Y)細粒砂混りシルトで、遺物は出土しなかった。

SE05 調査区の北部に位置する井戸である。掘形は一辺約1.40mの方形、井戸側は素掘で径約1.10mある。井戸側の上部には、板石を枅形に組んであった。

SX09 調査区の西南部、壁際に位置する東から西に向って深くなる落込み(第3層下面遺構)である。埋土は第4層の偽磔を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂・中磔混りシルトで、古代の須恵器杯身底部片、土師器細片が出土した。遺物の時期は古代まで遡るが、層相からみて徳川期の遺構であろう。

c. 近代の遺構

SK06 西壁際に位置する土壙であるが、形状や規模については遺構の大半が調査範囲外のため明らかでない。埋土は上部と下部に二分され、上部は灰を多く含む灰黄褐色(10YR5/2)シルトで、下部は第4層の偽磔を多く含む暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルトである。遺物は上部から近代の瓦・レンガなどが出土した。

SK07 西壁際に位置する第3層を切る土壙であるが、上部をSK06によって攪乱されており、形状や性格は明らかでない。埋土は第3層の偽磔を多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂混りシルトで、遺物は出土しなかった。

SE08 西壁際に位置する井戸とみられる遺構で、井戸側内は、第3層の偽磔を含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂・中磔混りシルトで埋戻されていた。

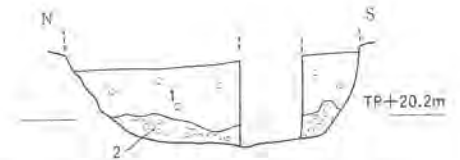
<まとめ>

本調査で検出した遺構は、古代の遺構である柱穴SP02以外、徳川期以降の遺構であった。古代の柱穴は、上町筋の東側地区から清水谷にかけての地域に分布している6世紀後半から7世紀中葉にかけての掘立柱建物群と同様なものが、上町筋の西側地域にも拡がっていることを示唆している。

近世以降は度重なる整地や開発によって攪乱されていたが、井戸や柱穴などの遺構は、当地が徳川期の町屋の一面に当たっていることを示している。今後周辺部で行われる調査成果を蓄積し、総合的に検討したい。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.53-57
 大阪市文化財協会2002、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.71-76



1: ぶい褐色(7.5YR5/4)極細粒砂・礫混りシルト
 2: 明褐色(7.5YR5/6)粗粒砂・粘土混りシルト

0 50cm
 1:20

図5 SP02断面図

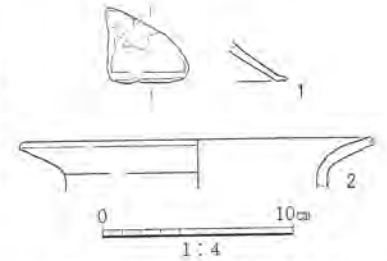


図6 SP02出土遺物実測図

西壁断面
(東から)



SP02の全景
(北から)



調査区全景
(東から)



Ⅲ 天 王 寺 区

- ・調査箇所 大阪市天王寺区清水谷町20-7
- ・調査面積 20㎡
- ・調査期間 平成20年7月29日～31日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地の稜線から東に向って緩やかに下がる斜面から平坦面に位置しており、調査地の北側でOS88-29・88-97・98-3・91-3次調査などが行われている(図1)。中でも調査地に隣接するOS91-3次調査では、地山面上で7世紀前葉から中葉にかけての掘立柱建物12棟をはじめ、柵3列、土壌などが検出されており、調査地域は古代の集落域であったことが判明している[大阪市文化財協会2002]。

大阪市教育委員会が調査地の東部で実施した試掘調査では現地表面下約1.2mで、当地域の地山層に至り、近世の遺構が検出されたため、本調査を実施することになった。

調査は7月29日に調査区を設定することから着手して(図2)、重機掘削に移ったが、その範囲は既に工事敷きまで掘削してあったため、残土の処理を行った。引き続き人力で地山面を清掃して、7月31日まで第6層の上面で遺構の確認作業および全景写真を撮影したほか、東・南壁の断面図を作成した。7月31日の午後には機材の撤収を含めてすべての調査を終えた。以下、本報告に掲載した図に示

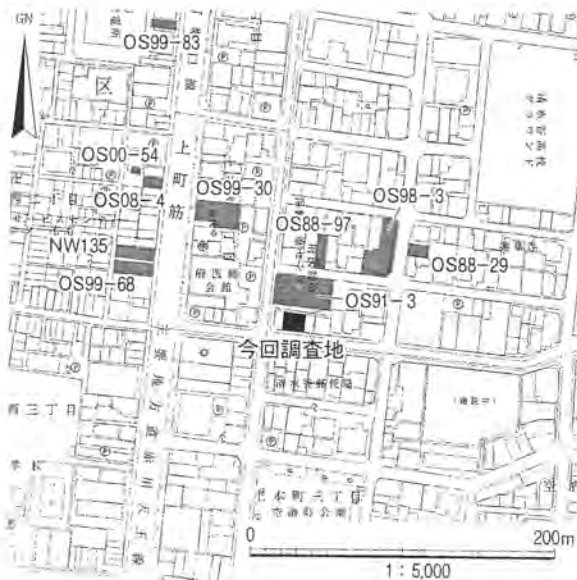


図1 調査地位置図

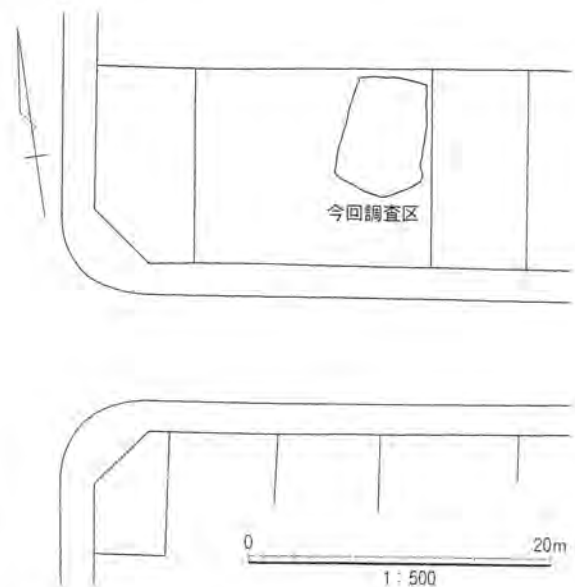


図2 調査区配置図

す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+〇mと表記した。示北記号は図1が座標北で、それ以外は磁北である。

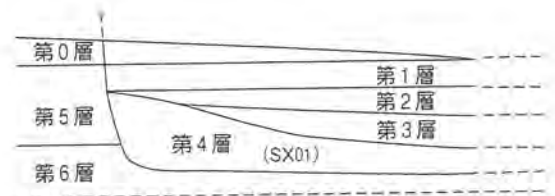


図3 地層と遺構の模式断面図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

調査地の現地表面の標高はTP+18.7m前後あり、調査個所の東から西に向って高くなっている。

第0層：旧建物基礎のコンクリート破砕片である。

第1層：灰黄褐色(10YR 4/2)シルト・細礫質細粒砂層で、層厚は40~90cmある。本層はレンガ・コンクリート片を多く含む現代の整地層である。

第2層：黒褐色(10YR 3/1)細粒砂~細粒砂質シルト層で、層厚は約45cmある。調査区の中央部で確認された落込み内を整地した地層であり、19世紀以降の陶磁器・瓦を含む。

第3層：調査区の北部で上層の暗褐色(10YR 3/3)細礫・シルト質細粒砂層と、下層の灰黄褐色(10YR 3/2)シルト質細粒砂~細礫層に二分された。層厚は前者が5.0~25cm、後者は10~15cmある。本層は水つきの地層であるが、下層を含めて攪拌されていることから作土とした。

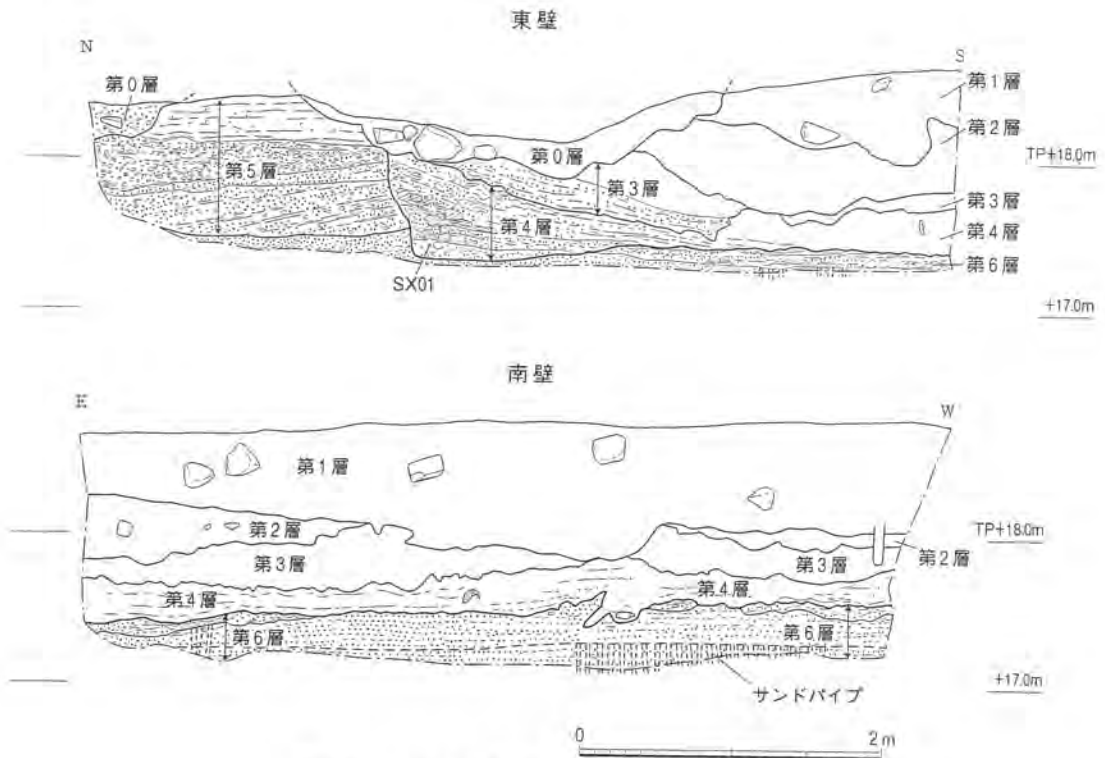
第4層：灰黄褐色(10YR 3/2)極細粒砂混り粘土質シルト層で、水つきである。本層の層厚は17~40cmあり、18世紀後半の肥前磁器や平瓦の細片が出土した。調査区南部の本層の基底面には踏込みが見られたので、淘汰の悪い作土かもしれない。なお、落込みSX01の北部には第5層の偽礫を多く含む灰黄褐色(10YR 5/2)細礫質中粒砂層が北から南に向って堆積していた。

第5層：明黄褐色(10YR 7/6)中礫質粘土質シルト層、浅い黄色(2.5Y 7/4)シルト・極細粒砂質中礫層、明黄褐色(7.5YR 5/8)シルト・中礫質細礫層で、層厚90cm前後の水成層である。当地域の地山層である。

第6層：酸化鉄を多く含む灰白色(10YR 7/1)細粒砂~シルト質細粒砂、にぶい黄橙(10YR 7/2)細礫質極細粒砂、浅い黄色(2.5Y 7/3)細粒~極細粒砂からなる水成層で、層厚は50cm以上あり、南壁断面では下層の上面および層中から多数のサンドパイプ(生痕化石)が確認された。本層は上層の第5層とともに調査地域の地山層で、中位段丘構成層に相当する。

2. 遺構と遺物

本調査で検出された遺構は、第4層の基底面で検出された落込みSX01のみである(図4)。遺構は調査区の北寄りから南側にかけて位置するが、ここは先述したように調査着手以前に掘削されていたため、遺構の調査はおもに断面観察にとどまった。遺構の幅は東西5.0m以上あり、深さは北壁断面では当地域の地山層である第5層の上面から0.7mあった。底はほぼ平坦な面をなしており、遺構の北側から南側に向って、第6層の偽礫を多く含む第4層の灰黄褐色(10YR 4/2)細礫質中粒~粗粒砂層および灰黄褐色(10YR 3/2)極細粒砂混り粘土質シルト層が堆積していた。本層は水つきの地層であり、層中から18世紀後半代の肥前磁器青磁染付蓋、平瓦の細片が出土したほか、基底面には一部で踏込み



- 1 : 50
- 第0層：旧建物基礎のコンクリート破砕片
 - 第1層：灰黄褐色(10YR 4/2)シルト・細礫質細粒砂層
 - 第2層：黒褐色(10YR 3/1)細粒砂～細粒砂質シルト層
 - 第3層：暗褐色(10YR 3/3)細礫・シルト質細粒砂層(上層)
灰黄褐色(10YR 3/2)シルト質細粒砂～細礫層(下層)
 - 第4層：灰黄褐色(10YR 3/2)極細粒砂混り粘土質シルト層
 - 第5層：明黄褐色(10YR 7/6)中礫質粘土質シルト層
浅い黄色(2.5Y 7/4)シルト・極細粒砂質中礫層
明黄褐色(7.5YR 5/8)シルト・中礫質細礫層
 - 第6層：浅い黄色(2.5Y 7/3)細粒～極細粒砂層

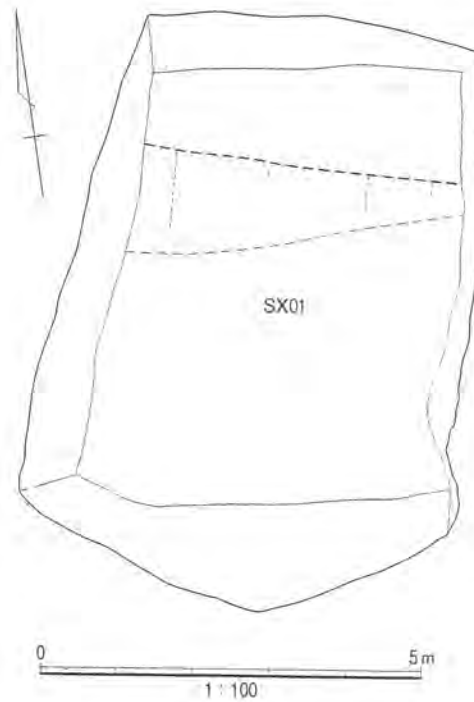


図4 SX01平面図および東壁・南壁断面図

が見られた。

〈まとめ〉

本調査で検出した遺構は、近世の落込みSX01のみであった。落込みの性格は調査範囲も狭小であったことから明確にできなかったが、埋土の状況や遺構の底面のようすを考慮すると耕作にかかわる掘込みの可能性が高い。ところで、本調査では調査地の北側で確認されたような古代の掘立柱建物はまったく見られなかったが、これは、調査地の古代の遺構面が後世に削平されたことによるものと考えられた。ただし、調査地の東部では地山層が現地表面の直下で確認されたことから、今後も調査地の周辺で起こる工事に際しては注意が必要であろう。

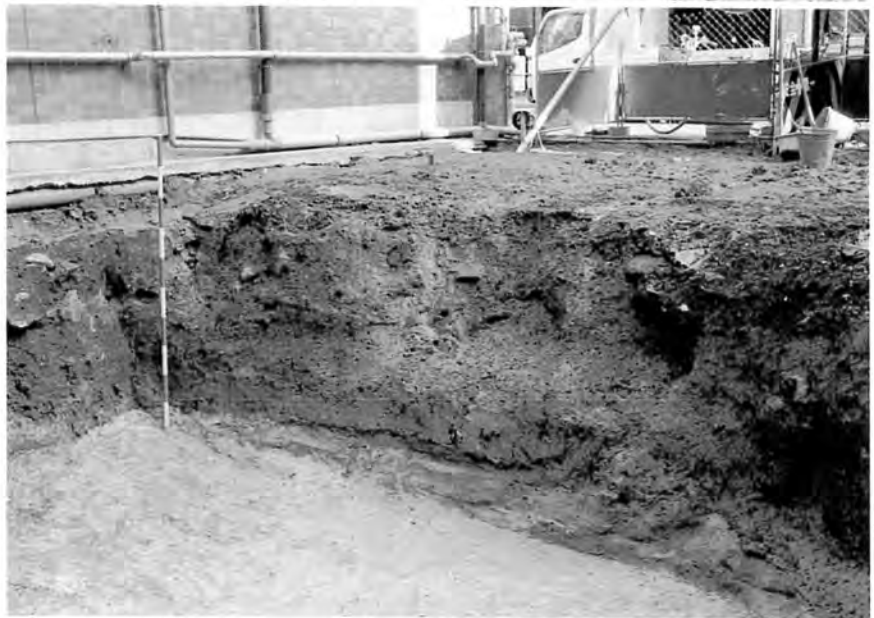
参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』Ⅵ、pp.220-222

東壁断面
落込み(SX01)
埋土の状況
(西から)



南壁断面
(北から)



調査区全景
(南から)



天王寺区伶人町における建設工事に伴う伶人町遺跡発掘調査(RJ08-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区伶人町16-1・16-3・19
- ・調査面積 20㎡
- ・調査期間 平成20年8月20日～平成20年8月22日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

〈調査に至る経緯と経過〉

伶人町遺跡は四天王寺の西側に位置する。周辺での調査状況を概観すると、谷町筋を挟んで東側に位置する四天王寺内では1950年代から、四天王寺旧境内遺跡においては1980年代後半から、多くの調査が行われてきた。伶人町遺跡の調査が開始するのは1996年を待たねばならないが、その後10年以上にわたって調査成果が蓄積される中で、奈良時代に遡る遺構が複数の調査地で検出されたり、あるいは四天王寺周辺に巡らされた中世後期の溝が伶人町遺跡でも検出されるなど、四天王寺およびその周辺地域の発展過程を把握する上で当地における調査の重要性が増している。このうち中世後期の溝については、北側の調査区で検出された南北方向に延びる溝の延長線上に今回の調査区が位置しており(図9)、その有無が注目される場所であった。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内で試掘調査が行われた結果、現地表下約1.3mで段丘構成層が、またその上面では遺構が確認されたため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査は2008年8月20日から開始した。現代盛土層の除去、および後述する井戸下半部の掘削に重機を使用した以外は、すべて人力によって掘削を行った。その間、遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業は、8月22日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と記す。示北記号は座標北である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第0層：現代の整地層で、層厚は最大で180cmある。

第1層：明黄褐色を呈する段丘構成層である。第0層によって本層以上の地層は失われていたため、後述する各遺構はすべて本層上面で検出した。

2. 遺構と遺物(図5～8)

土壌SK01～05のほかに、溝SD06、柱穴SP07・08、井戸SE09を検出した。

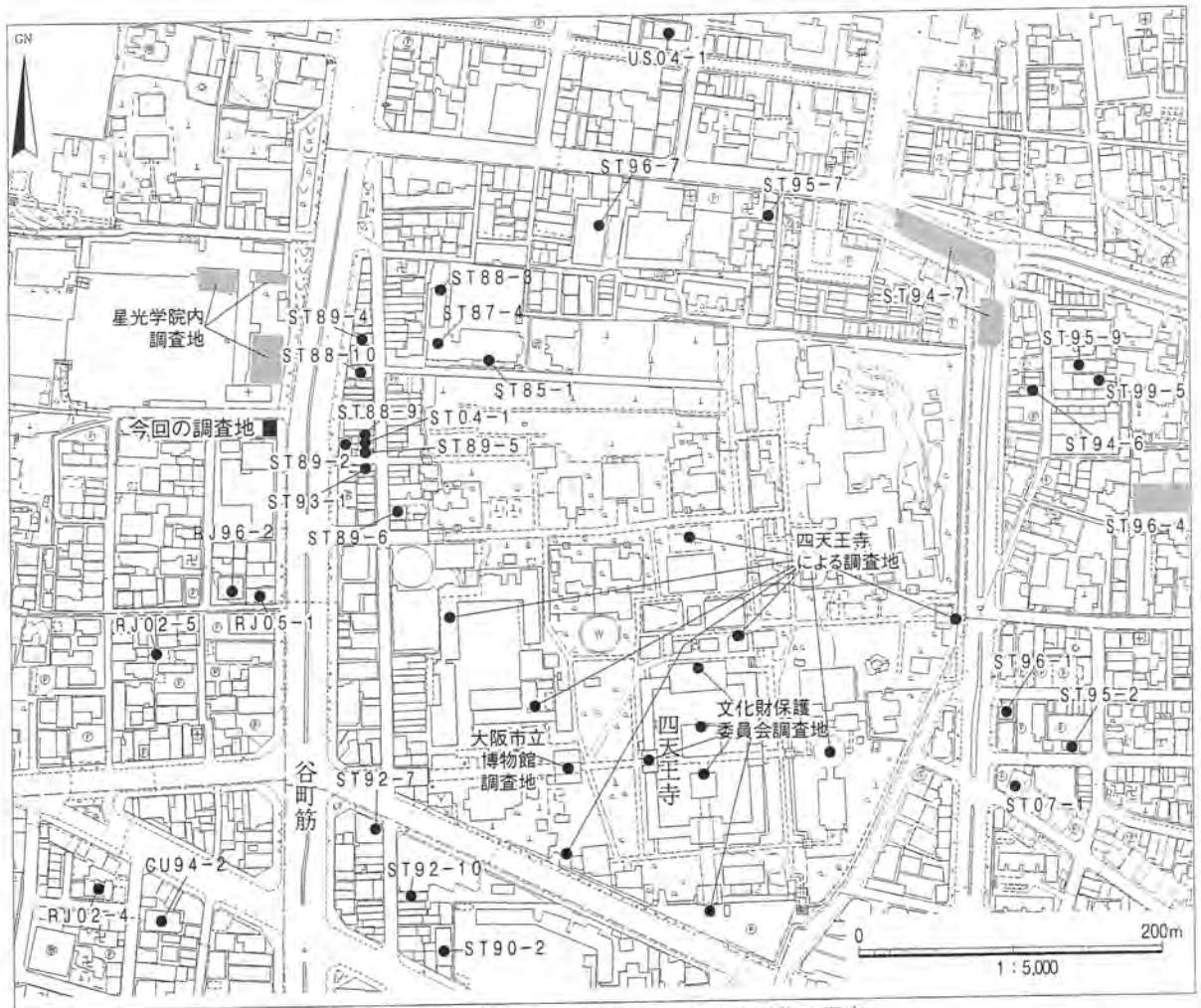


図1 調査地の位置および周辺における既往の調査

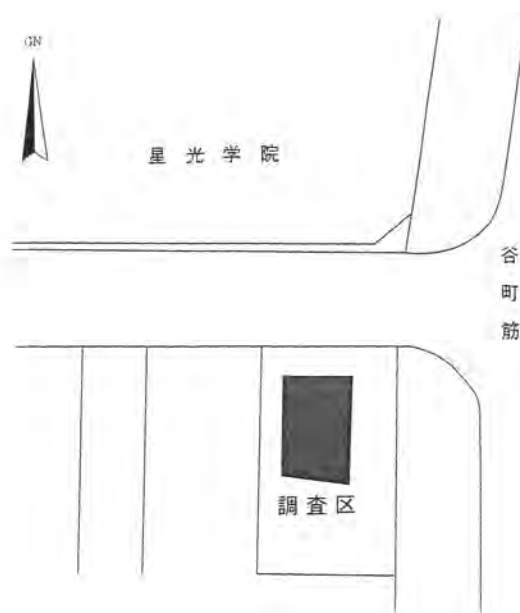


図2 調査区の配置

SK01は、調査区東北部で検出した土壌である。東西0.88m以上、南北0.66mであり、検出面からの深さは0.18mを測る。本遺構からは土師器1をはじめとする古代の土器しか出土しておらず、該期の遺構である可能性が高い。土師器皿1は、口縁端部がやや内側に肥厚し、内面に放射状暗文を施す。奈良時代後半に位置づけられる資料である。

二段に落ち込むSK02は、南北1.60m以上、東西2.00mを測り、検出面から0.42mの深さがあった。遺構下部には砂質シルトが堆積し、その段階でSD06が掘削されている。その後、滞水性のシルトが堆積し、最終的には第1層の偽礫を含むシルト質砂で埋戻されていた。なお土壌の上端付近には杭が巡らされており、同様の杭をSK03でも検出した。SK02からは土師器



図3 地層と遺構の関係

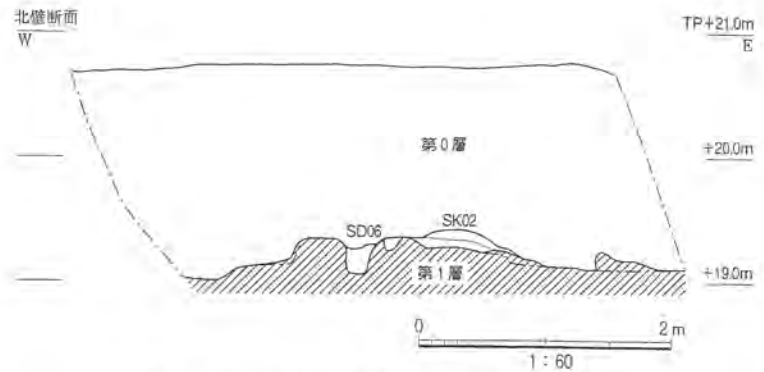


図4 調査区断面(北壁断面の位置は図6参照)

須恵器のほか、瓦器の細片が出土している。中世前期の遺構である可能性が高い。

柱穴、あるいはその可能性がある遺構は11基を検出したが、確実に組み合わせるものはなかった。抜取穴を有するSP07、柱穴内上部の人為的な埋土を除去した段階で柱痕跡を確認したSP08などがある。このうちSP07からは、内面のみまばらにヘラミガキを施した瓦器椀2が出土した。13世紀後半に位置づけられる資料である。他の柱穴からも、土師器・須恵器・瓦器の細片が出土している。

SE09は、調査区東部で検出した井戸である。直径0.84m、検出面からの深さは2.36mであった。安全を確保するため、遺構下半の掘削は重機によって行った。遺構の基盤層である第1層は、上部がシルト質細粒～中粒砂(図6-A層)、下部は粗粒砂(同B層)であり、A・B層の境界であるTP+18.2m付近で井戸壁面が崩落し、遺構下部の断面はフラスコ状を呈している。壁面の崩落後は人為的に埋立てられていた(同1～4層)。また、遺構上半では壁面にへばりつくようにしてシルト層(同5層)を確認した。井戸枠の痕跡であろう。本遺構からは、下部(6・7層)から瓦質土器播鉢9、木製の下駄14、平瓦15～17が、上部(1～4層)からは壺の口縁部3、東播系須恵器鉢4、瓦質土器播鉢5・三足釜6・羽釜7・8、甕10～12、砥石13などが出土している。

このうち下部から出土した遺物についてみると、差歯式の下駄14は下端部が切断されており、何らかの形で再利用された可能性がある。中世の平瓦15は凹面に糸切り痕をわずかに残し、また二次的に被熱した痕跡が観察できる。16・17は凹

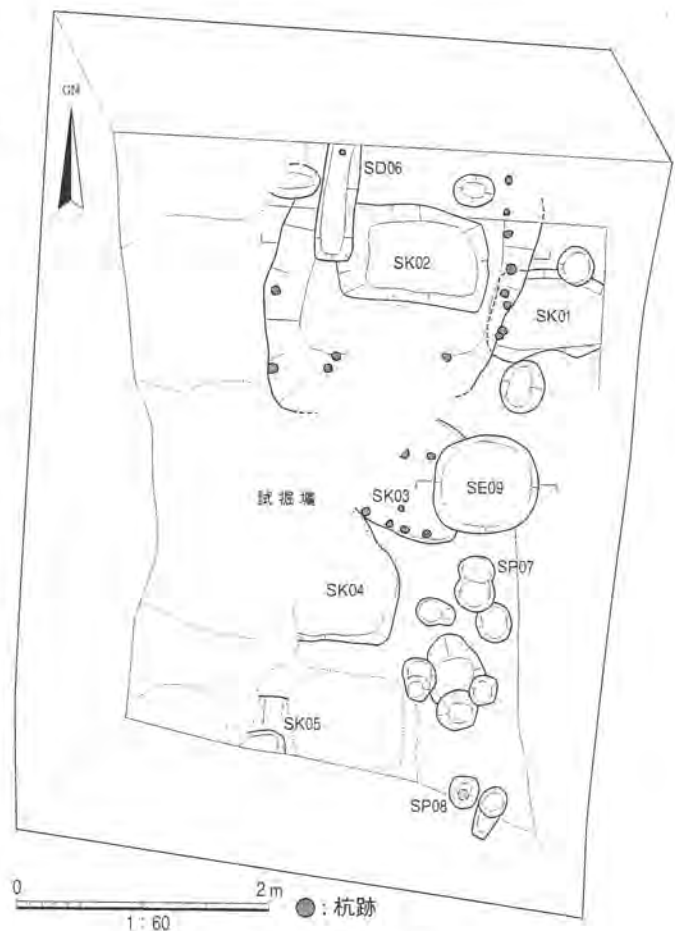


図5 遺構平面図

面に布目、凸面に縄目タタキの痕跡を有する古代の平瓦である。16は須恵器質に、17は土師器質に焼成されている。

上部から出土した遺物のうち、灰釉を施す中世陶器3は渥美窯の製品と思われる。瓦質土器羽釜7は京都型のものと思われるが、三足釜の釜部となる可能性もある。口縁部は内傾して四角く収め、体部内面には細かいハケメが残る。一方8は在地型で、頸部はやや内傾し、口縁部は丸く収める。頸部外面の段成形は緩く、凹線状になっている。瓦質土器甕10~12はいずれも外面にタタキ整形を施すが、口縁端部の形態では面を持つもの10・11と、丸く収めるもの12とがある。砥石13は被熱し、破面を含む各面が黒く変色している。

これらSE07から出土した遺物群は、古代に遡る平瓦16・17や中世前期の可能性のある3も含むが、その下限をおおむね15世紀代に求めることができる。

〈まとめ〉

今回の調査では、わずかな面積ではあったが、比較的密に遺構が分布する状況を確認することができた。遺構の時期は古代から中世後期にわたっており、付近での調査成果[大阪市文化財協会2006、西近畿文化財調査研究所2006]を追認することとなった。

なお先述のように、四天王寺周辺にはこれを取り囲むように巡らされた多くの溝が存在しており、それらの年代のほとんどが中世後期に位置づけられている。同遺構は今回の調査地北側でも検出されており、クランクしながらおよそ南北に延びているが(図9)、今回の調査ではこの溝の延長は確認できなかった。ただこうした溝群については、地形に合わせて複数の区画を形成していた可能性も、近年の調査成果に基づいて指摘されている[大阪市文化財協会2008]。この溝の存在が端的に示すように、四天王寺およびその周辺の歴史を把握する上で当遺跡の成果は欠くことができないのであり、今後とも継続的な調査によって資料を蓄積していく必要がある。

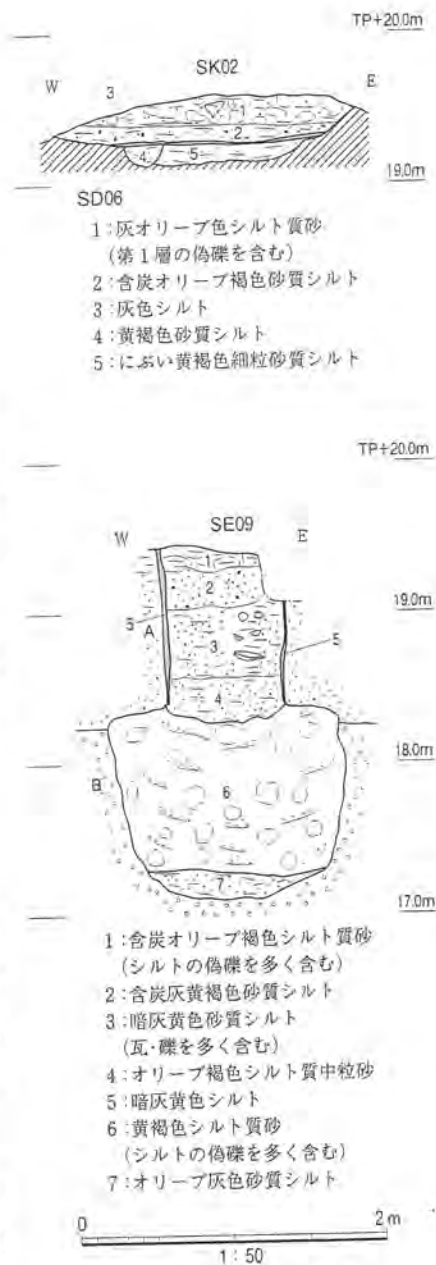


図6 各遺構断面

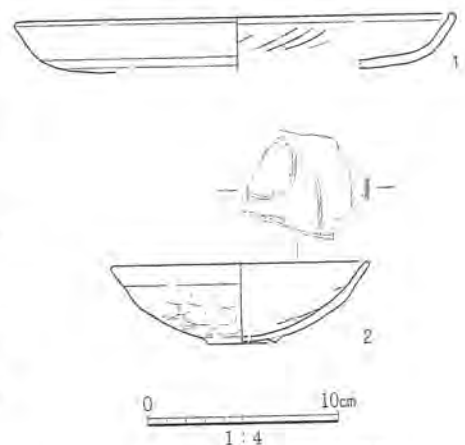


図7 SK01・SP07出土遺物
SK01(1)・SP07(2)

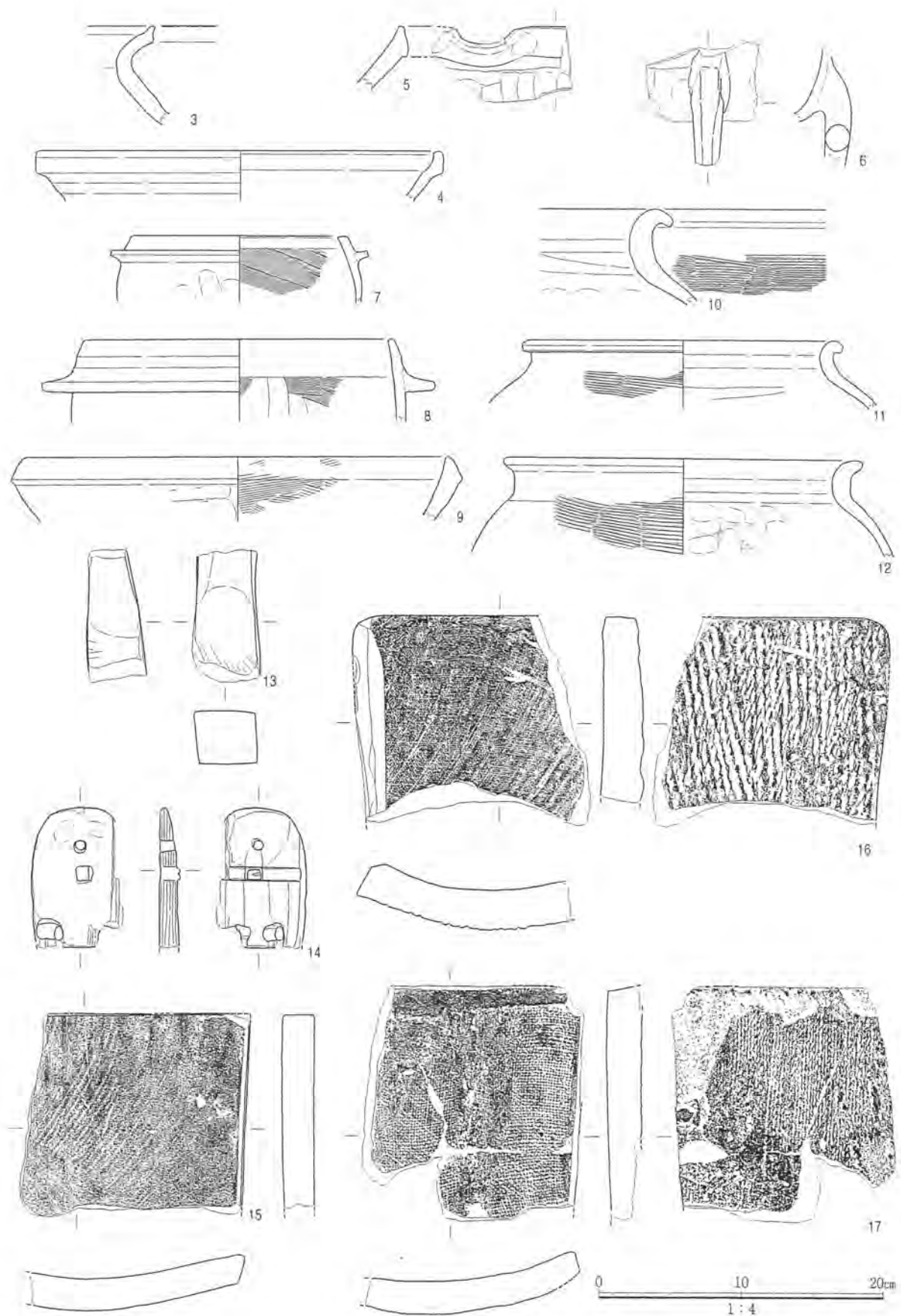


图8 SE09出土遺物
下部(9·14~17)、上部(3~8·10~13)

引用・参考文献

大阪市文化財協会2006、『株式会社リンクシステムによる建設工事に伴う伶人町遺跡発掘調査(RJ05-1)報告書』

大阪市文化財協会2008、『勝山2丁目における四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST07-1)報告書』

西近畿文化財調査研究所2006、『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』

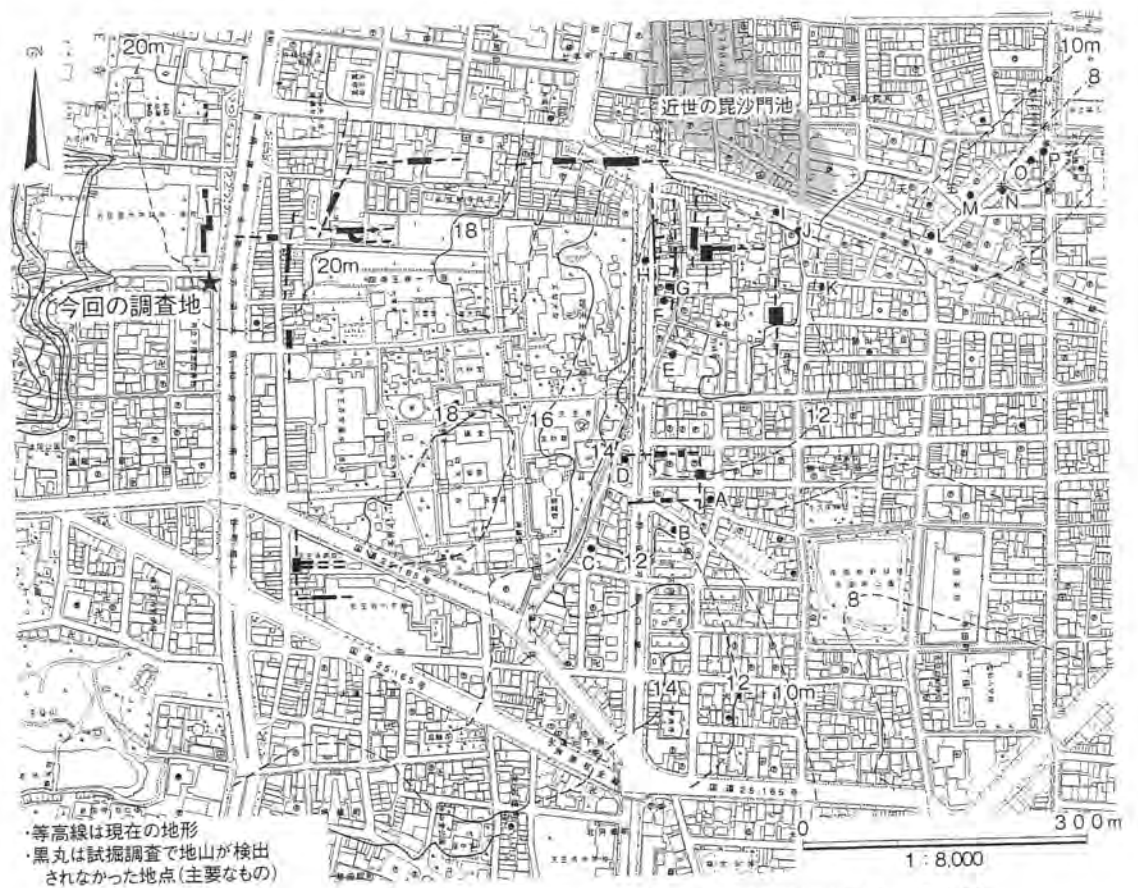


図9 四天王寺周辺の地形と「区画溝」〔大阪市文化財協会2008〕所収図を一部改変

調査区遠景
(西南から)



調査区全景
(南から)



SK02検出状況
(南から)



- ・調査箇所 大阪市天王寺区細工谷一丁目91-4
- ・調査面積 40㎡
- ・調査期間 平成20年6月9日～6月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

大阪市天王寺区に所在する細工谷遺跡は古代～中世の集落遺跡で、西側は上町台地の最高所を南北に貫く難波京朱雀大路跡に接している(図1)。もともとこの両遺跡の周辺は、西側が大阪湾へと続く傾斜地で、東側は現在では市街地化が進んで小さな谷は大半が埋積しているが、東もしくは北東側に開口する大きな開析谷に数多くの支谷が入る複雑な地形で、谷の痕跡を留めている場所が所々に見受けられる。こういった地形の中で本調査地は上町台地の最高所近くに当たり、細工谷遺跡の西半部および難波京朱雀大路跡の推定範囲内に位置している。現地表の標高は約14mである。

今のところ難波京朱雀大路の痕跡が確認できた調査例はないが、大和川以南の堺市と松原市の境界に位置する大和川今池遺跡では、朱雀大路の延長上にある難波大道跡が両脇に側溝をもつ幅17mの道路として確認されている[大阪府文化財センター2008]。

また、細工谷遺跡については、1996・97年の発掘調査(SD96-1・97-1次調査)で、国内で初めて和同開珎の枝銭が出土し、あわせて「百済尼寺」の存在を示す墨書土器・木簡や富本銭などが出土したことから、全国的に細工谷遺跡の存在が広く知られるところとなった[大阪市文化財協会1999]。

これまで周辺で行われた調査にはSD96-1・97-1・01-3・01-4・02-1・05-1・06-1・06-2・06-3次調査などがある(図2、SD05-1・06-1の位置は図10に記載)。

SD96-1・97-1次調査は本調査地北側の道路を約150mにわたって調査したもので、本調査地同様に台地縁部で細工谷の谷頭に当たるため、標高は11～15mと高い。この調査では、飛鳥～平安時代の建物・井戸・溝・流路などが見付き、このうちの井戸から「百済尼寺」の存在を示唆する文字資料が出土した。また、流路から和同開珎の枝銭が出土



図1 細工谷遺跡位置図

したことは、前述したとおりである[大阪市文化財協会1999]。同様の標高の高い場所での調査には、2001年度に行ったSD01-3・01-4次調査や、2006年度のSD06-2・06-3次調査などがあるが、すでに地山が大きく削られていたため、いずれの調査もほとんど遺構が残っていなかった。しかし、少ないながらもSD01-3・01-4次調査では平安時代後期の溝が検出され、また、SD06-2・06-3次調査では五合谷という大きな谷とその支谷、およびこれにとりつく古墳時代～古代に設営された溝(導水路)が見つかり、多数の遺物が出土した。また、支谷は古墳時代～古代に埋立てられて居住地や祭祀の場として利用されたことが明らかとなった[大阪市文化財協会2007b]。

また、本調査地の東約200mのSD02-1次調査では、古代に遡る可能性のある井戸1基が検出されたにすぎないが、はるか12万年前の大阪湾(上町海)で堆積した海成粘土層とその上に堆積した海成の砂層(Ma12)が標高8～9mといった高い位置で見つかり、上町台地形成の重要な手がかりを得た[大阪市文化財協会2003]。

一方、現地表が標高8mほどのやや低い場所に位置するSD05-1・06-1次調査(図10)では、弥生～奈良時代の多くの遺物とともに、7世紀後半～8世紀の溝や掘立柱建物群が見つかった。ここは図10の南東隅を南西-北東方向に走る細工谷に流れこむの支谷に当たる場所であるが、7世紀後半から8世紀にわたって整地を重ねながら掘立柱建物群が建てられていた状況が確認され、木製導水管(暗渠)の設置された溝も見つかった。このことから一帯が飛鳥～奈良時代に大きく開発されたことが明らかとなった[大阪市文化財協会2007a]。

このように、本調査地の周辺は古墳時代から古代にかけて開発が進んだ歴史上重要な地域で、既知の埋蔵文化財包蔵地内である。そこで大阪市教育委員会によって試掘調査が実施された。調査地西半は溜池に利用されていたため、東半部で地層の確認を行ったところ、地表下約0.7m以下に中世以前の谷を埋戻したとみられる地層が見つかり、また、約2.5m以下に地山とみられる粘土層が見つかった。このため、古代や中世、あるいはそれ以前の遺構・遺物の有無や、原始から中世にいたる土地利用の変遷を解明するための基礎資料を得る目的で、本調査を実施することとなった。

調査は2008年6月9日から着手した。上記の試掘調査の結果に基づき、図3のように調査地東部に

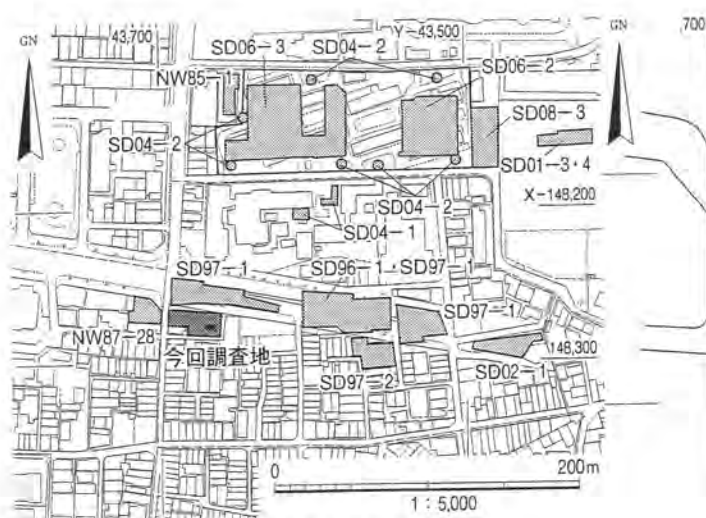


図2 周辺の調査と今回の調査地

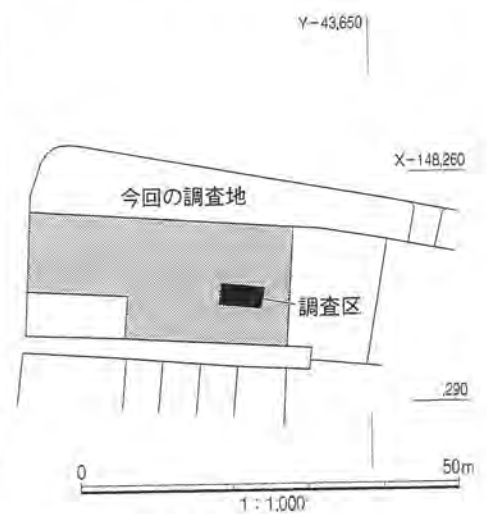


図3 調査区配置図

東西 8 m×南北 5 mの調査区を設定した。現代盛土は重機で除去し、その後は人力によって地層ごとに平面の調査と地層の掘削を行い、遺構と遺物の検出に努めた。地層の断面および検出した遺構は、適宜、写真撮影・実測などの必要な作業を行い、6月12日に器材の撤収を含めたすべての現場作業を終了し、調査を完了した。

なお、本報告で使用した示北記号は世界測地系による座標北である。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本報告ではTP+〇mと記す。

〈調査の結果〉

地層の堆積状況	層名	断面図の層番号	時期・遺構・遺物等
	第0層	1	現代盛土
	第1層	2	近世盛土 埋壙(SX04~07)、石列 丹波焼、近世瓦、焼締陶器
	第2層	4 5 6	段丘構成層 (Ma12) 巢穴の生痕化石
	第3層	7	段丘構成層 (Ma12) 断層、炭化物
	第4層	8 9 10	段丘構成層 (Ma12)

図4 地層と遺構の関係

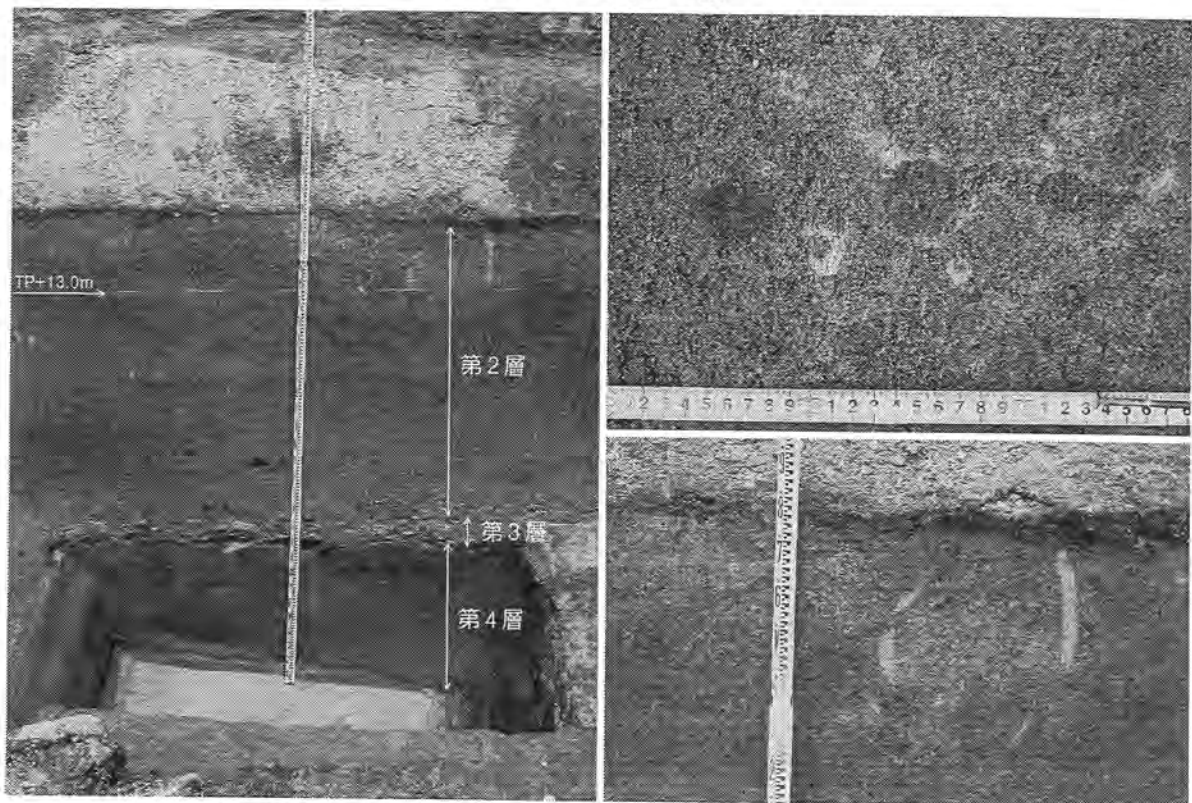


写真1 第2層の巢穴の生痕化石(右上:平面、右下:北壁断面)

1. 層序(図4・5)

本調査の基本層序は以下のとおりである。

第0層：表土から約70cmほどの厚さの現代の盛土層と攪乱層である。重機により除去した。

第1層：暗青灰色礫質中粒～細粒砂層で、近世の人工的な盛土層である。本層は大半が後世に削り取られてしまったため、東壁際のみで観察することができた。東壁で層厚は最大18cmある。調査区南端では、本層が盛られた後に溝を掘って東西方向の石列が設置されていた。下位にある第2層の上面で見つかった埋甕も本層上面に設置された可能性が高い。

第2層：層厚170cmにおよぶ厚い地層で、主体は緑灰色のシルト質粘土であるが、これに多くの細粒～粗粒砂が混る。本層の上端から30～40cmほどの間は、酸化鉄が析出してやや黄味がかかった色合を呈していた。本層中には直径が1～4cmほどの生痕化石が多く見つかった(写真1)。これは海浜に棲息する生物の巣穴化石で、チューブ状の灰白色粘土の中に灰色や明黄褐色の砂が詰まった状態で観察された。本層中に生痕化石が多く見られたことに加え、本層を構成する泥や砂・礫が非常に分級が悪い状態で堆積することから、干潟の堆積層であったことがわかる。本層以下は大阪湾の海底で約12万年前に堆積したMa12と呼ばれる地層で、上町台地の段丘構成層である。本層上面で近世の埋甕4基が見つかった。

第3層：緑灰色の粗粒砂混り粘土質シルト～シルト質粘土で、ごく少量、小枝などの炭化物が混る。層厚は6～18cmである。上端は酸化鉄が多く析出し、板状に広がっていた。下端ではマンガンの沈着が見られた。地層のずれが観察された。

第4層：灰色の砂混りシルト質粘土層で、層厚は90cm以上ある。観察することのできた本層の下端から20cmほどの間は酸化鉄が析出して明黄褐色を呈していた。

2. 遺構と遺物(図6～9)

断面では顕著ではないが、第3層上面は東西方向からの力を受けていて、地層がずれて盛り上がっている部分が調査区中央部で観察された。地層のずれが見られた部分の比高は2cmほどである。

第2層上面で埋甕4基SX04～07を検出した。検出面で上端の直径が0.25～0.45m、深さ0.10～0.25mの土壌に、いずれも丹波焼の大甕を据えて隙間に灰色礫質砂を充填していた。体部以上がすでに失われているため、詳細な時期はわからないが、近世のものである。SX04に据えられた甕1と、SX05の甕2を図示した。底部外面に「山笠」の下に「二」あるいは「今」とみられる墨書がある。これらの埋甕は第2層上面で検出してはいるが、本来は肩部より上が地面より上にあっただけで、第1層またはすでに失われた地層からの掘り込みであると考えられる。

第1層上面の遺構は南壁にかかる東西方向の石列がある。それぞれの石は花崗岩で、割るときの矢穴が残っていた。個々の石は平面で見ると南側を長辺とする二等辺三角形をしており、長辺は0.35～0.40m、奥行きは0.20～0.30m、厚さは0.25mで、深さ0.35mの溝に南側に面を揃えて上端が平坦になるように配置されていた。埋甕と同時期かそれよりも後の遺構である。

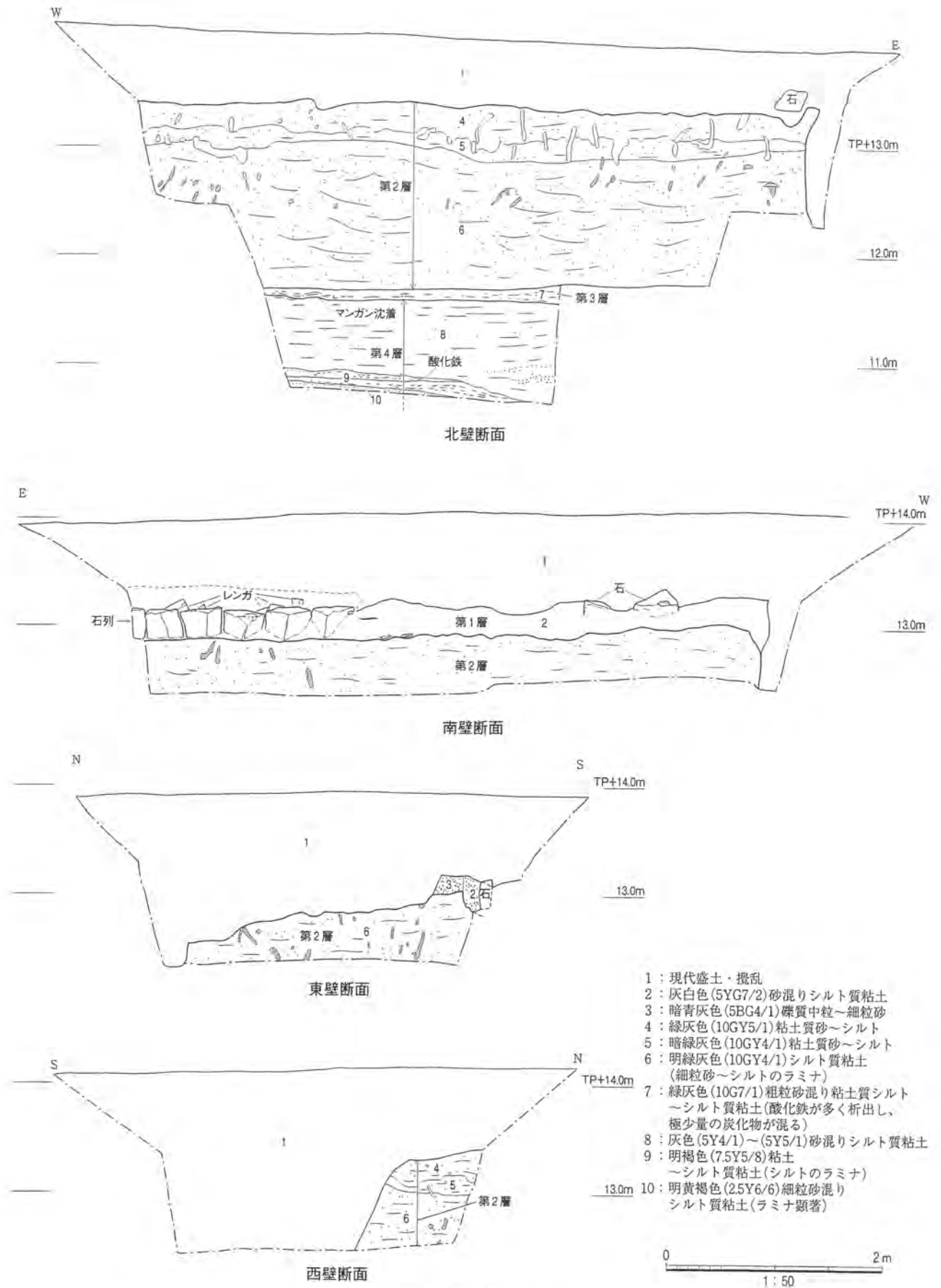


図5 断面実測図

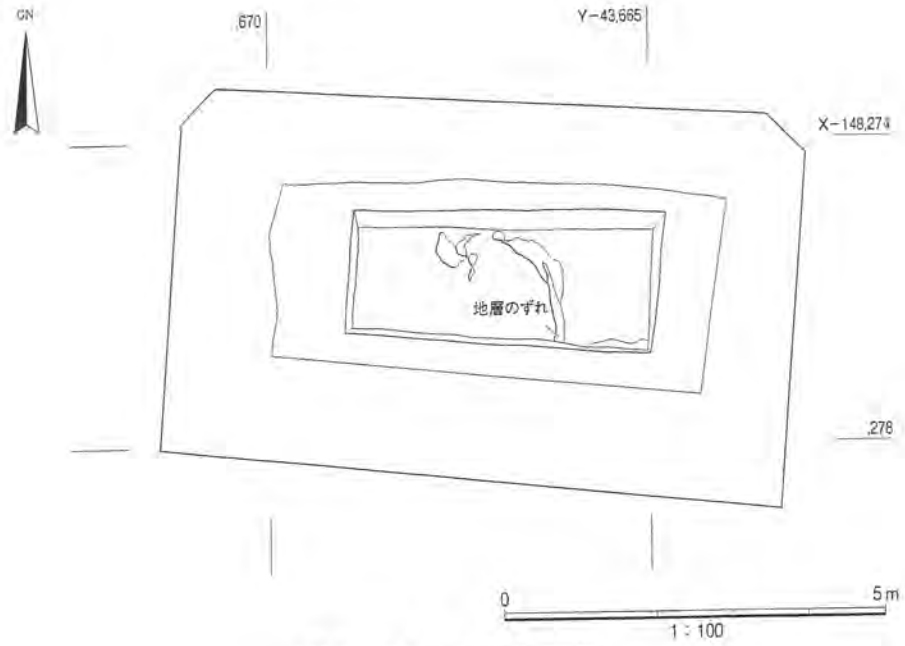


図6 第3層上面遺構平面図

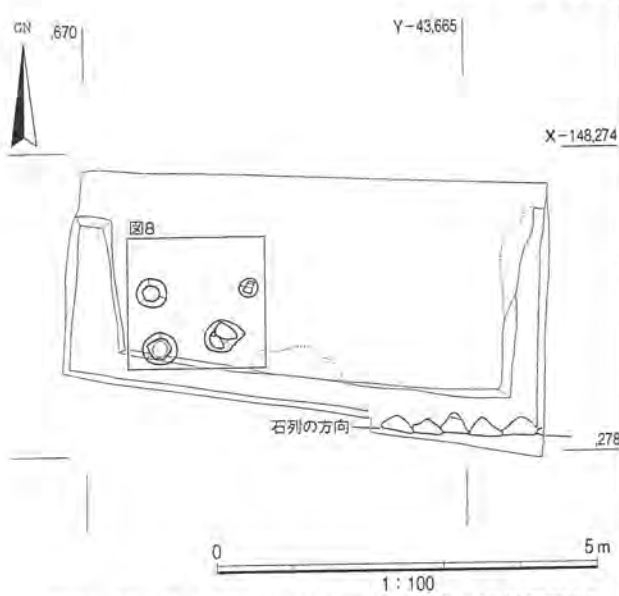


図7 第1層上面および第2層上面検出の遺構平面図

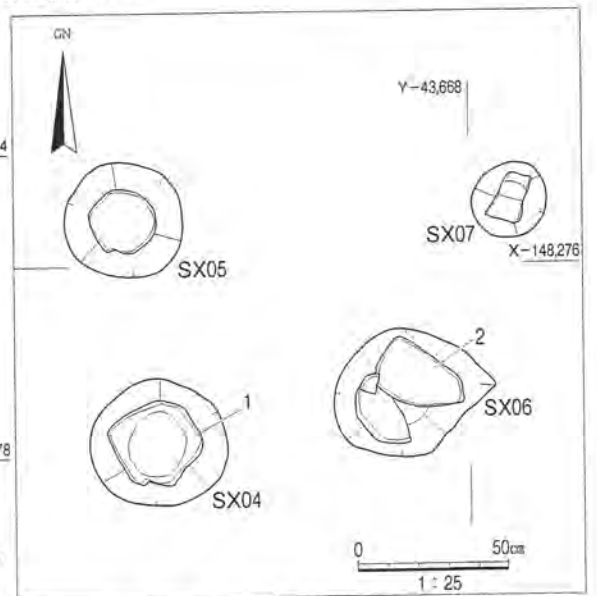


図8 埋甕遺構検出状況図

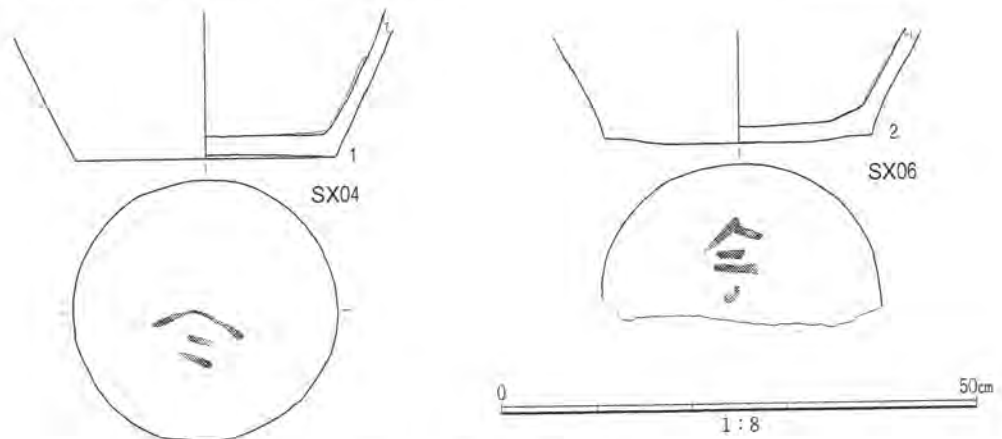


図9 埋甕遺構出土遺物実測図

3. 各層の遺物

第2層以下は段丘構成層、いわゆる地山で、遺物は出土していない。したがって遺物を確認できたのは第1層のみである。第1層からは近世の焼締陶器や瓦などの破片がごく少量出土した。

4. 周辺の調査成果との関係

本調査の第2層以下の海成層(Ma12)は12万年ほど前に海拔0m以下で堆積したもので、第2層の上端の標高でみると、現在、この海成層は13m以上も海水面より上にあることになる。この現象は地殻変動による相対的な隆起現象によるもので、最終間氷期から最終氷期にかけての上町台地が形成された時の状況を示すものである。しかし、わずかに上端から30cmほどの間で多少黄味がかってはいるものの、本層は離水後の風化も土壌化も見られず、堆積構造が変化したような様相はない。

明治19年の『大阪実測図』ではまだ細工谷辺りの谷がよく残っており、字名や現在とほとんど形状の変わらない地形に沿った道路をもとに、今回の調査地と周辺の調査地の位置を推定すると、図10のようになる。これら周辺の調査で見つかっている段丘構成層(地山)を見ると、ほとんどが風化を受けて土壌化した均質なシルト質粘土層で、今回とはやや異なった様相を示す。わずかにSD02-1次調査とUH08-4次調査では今回の海成層(Ma12)に似た地層が見つかっていて、これらの調査での当該地層上端の標高は、SD02-1次調査が9.6m、UH08-4次調査が16.0mで、それぞれ直近の調査地と比べて高い位置にある。

古代や中世の遺構が見つかっているのは、本調査地や上記の2調査地のような地点よりも、むしろ段丘構成層である海成層(Ma12)上端の標高が低く、上端が風化・土壌化して均質なシルト質粘土になっているところで、こういった地点では現地表も相対的に低い。本調査地など、風化・土壌化していない堆積したままの状態の海成層(Ma12)のみが見つかった地点でも、本来は上部に風化・土壌化した部分があったはずで、近世までの間に削られ続けたのであろう。つまり、古代の地形は今以上に起伏が激しかったものと思われる。

〈まとめ〉

今回の調査では、近世の石列と埋甕を検出した。これらの遺構は、近世大坂城下町の中でも、まだよくわかっていない南側の城下町の町割りを知る上で、手がかりとなるものである。

残念ながら今回の調査範囲では古代や中世の遺構・遺物は見つからなかったが、これは



図10 調査地周辺図(明治19年作成『大阪実測図』に加筆)

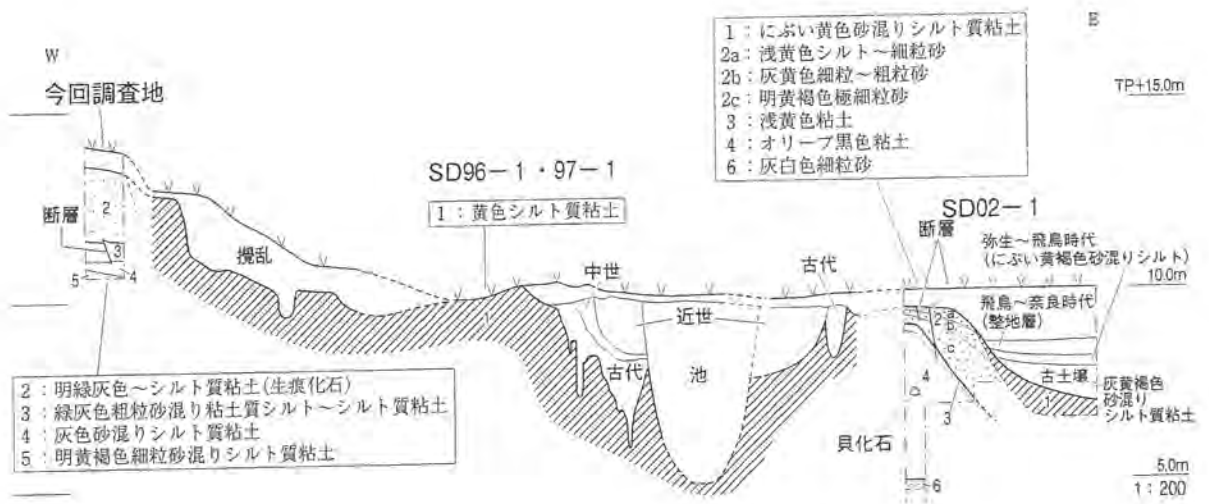


図11 段丘構成層のつながり〔大阪市文化財協会1999〕図7に加筆

高台の最高所という立地の良さがゆえに現在に至るまで幾度となく削られ続けたためと考えられる。すでに失われてしまっているこれらの遺跡を復元し、歴史的景観を考えるには、当時の地形を復元することが不可欠である。今回の調査において最大の成果はこの点で非常に大きな手掛かりを与えるものである。

今後とも周辺地における綿密な調査を行い、情報を集積していくことが重要であろう。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ

2003、『都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD02-1)完了報告書』

2007a、『平成17年・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』

2007b、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪府文化財センター2008、『都市計画道路大和川線建設に伴う大和川今池遺跡発掘調査現地説明会資料 難波大道の調査』

第3層上面(南から)



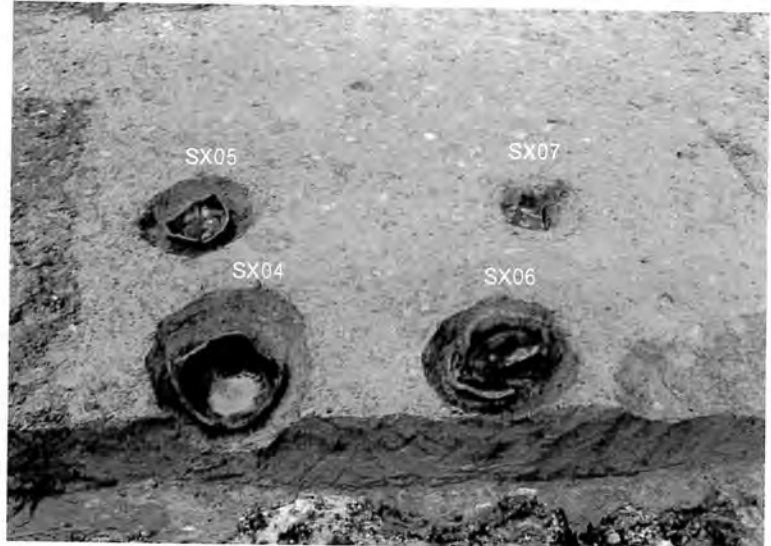
調査地全景
(第2層上面、北から)



北壁断面(南から)



第2層上面検出の埋甕
(南から)



南壁断面(北から)



近世の石列
(第1層上面、東から)



上本町遺跡発掘調査(UH08-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区四天王寺1丁目13-7
- ・調査面積 25㎡
- ・調査期間 平成20年5月27日～28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、弥生時代～近世の集落遺跡である上本町遺跡の西南端に位置し、南側は四天王寺旧境内遺跡、西側は伶人町遺跡と隣接している(図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地表下約0.8mで古代に遡る可能性がある遺物包含層および遺構が確認された。今回、こうした地層・遺構の状況を明らかにし、この地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に調査を実施した。

事業者が敷地全体を現地表下約0.8mまで掘削した後、平成20年5月27日より調査を開始した。敷地中央に南北約2.7m、東西約8.0mの調査区を設け(図2)、現代の攪乱を除去した地山上で遺構検出作業を行った。試掘調査で確認されたような古い時代の地層・遺構の分布は、調査区東端にのみ限定され、翌28日には写真撮影・実測図作成等の記録作業を終え、調査を終了した。

なお、本報告で使用した指北方位・座標は、大阪市道路現況平面図から援用した座標北・世界測地系を用いた。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図ではTP+○mと表示した。



図1 調査地位置図

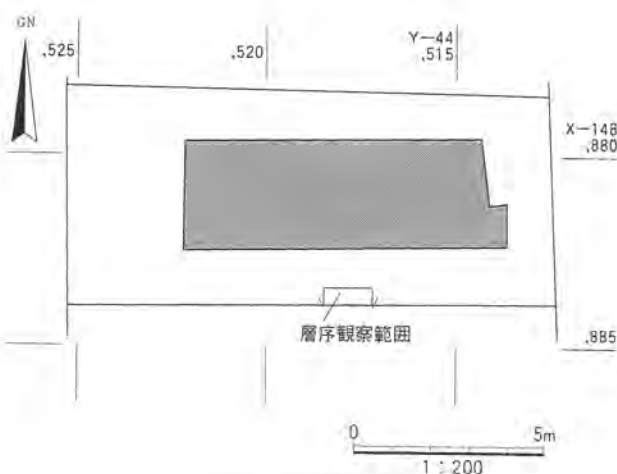


図2 調査区位置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

敷地内中央に設定した調査区では、現代の攪乱を除去した直下で地山が露出したが、調査区外の敷地南辺では、現代の攪乱をまぬがれて60cmほどの地層が遺存しており、これを第1～3層に区分した。また、現代の攪乱を第0層、地山を第4層とした。以下、各層の層相を記述する。

第0層：コンクリート片などを含む現代の整地層である。

第1層：灰黄褐色(10YR4/2)わずかに礫質・シルト質細粒砂からなる。焼土・炭粒を含む近代以降の作土層である。層厚は20cmある。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)わずかに礫質・細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は20cmある。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/3)偽礫を多く含むわずかに礫質・シルト質細粒砂からなる整地層で、上位層と比べて硬くしまる。中世の瓦器・瓦片を含む。層厚は20cmある。

第4層：段丘構成層の地山で、上部の10cmほどは明黄褐色(10YR5/8)粘土、以下は灰色(7.5Y5/1)細粒砂～礫からなる。

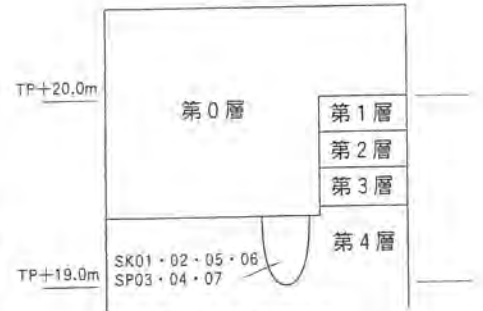


図3 層序模式図

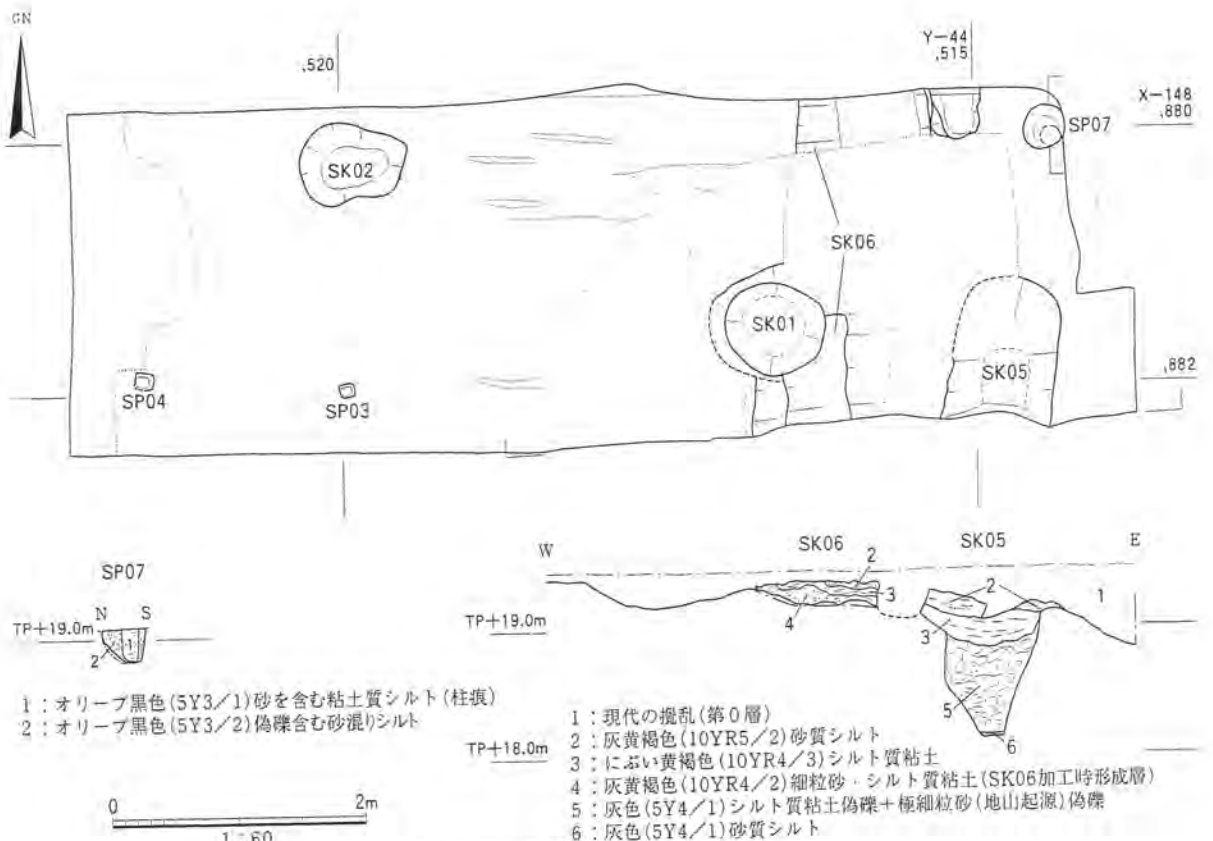


図4 検出遺構平面図および遺構断面図

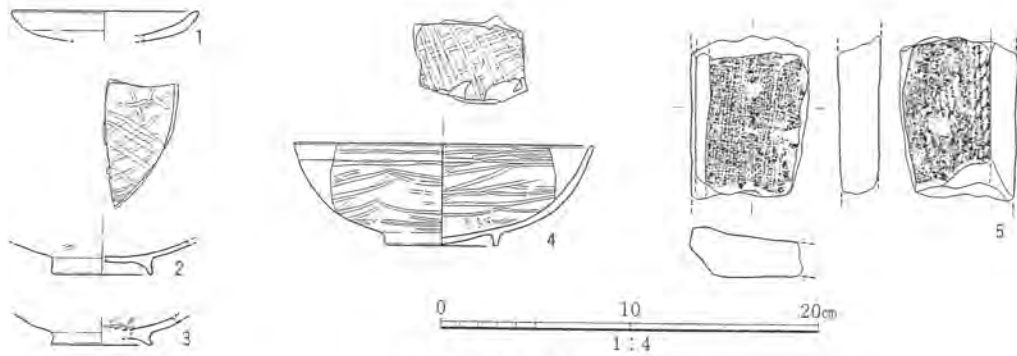


図5 出土遺物実測図
SK05(4・5)、SK06(1～3)

2. 遺構(図4)

地山である第4層上位の第0層基底面で、土壌(SK01・02・05・06)、柱穴(SP03・04・07)を検出した。以下、古い時代の遺構から記述する。

SK05：調査区南東端で検出した土壌で、試掘調査で確認した遺構に相当する。規模は東西0.8m、南北1.1m以上あり、調査区外南側へ延びている。遺構の南西部は現代の攪乱によって削平されているが、平面形は細長い隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは1.0mと急角度で掘込まれており、底は南側へ向って深くなる。埋土下半は第4層の地山と灰色シルト質粘土の偽礫からなり(図4-5層)、上半に均質な灰黄褐色シルト質粘土(3層)と灰黄褐色砂質シルト(2層)が堆積している。基底にわずかに泥質な地層(6層)が認められ、本層が土壌機能時に堆積したものと考えられる。

埋土中の5層から瓦器4、4層から瓦5が出土したほか(図5)、4層からはウマの上顎白歯が1点出土した。4は外面にヘラミガキ、内面に格子暗文を施す瓦器椀で、高台は細く突出する。12世紀後半代のものと考えられる。5は焼成不良の平瓦で、凹面に布目圧痕、凸面に粗い縄目タタキ痕がある。

SK06：調査区東部で検出した落込み状の浅い土壌である。西辺はほぼ南北方向で東側は現代の攪乱により削平され不明である。埋土はSK05の上半と共通しており、本来一連の遺構であった可能性もある。下半には掘削時に生じた偽礫を多く含んでおり、下面で鋤痕を多く検出した。

埋土中から土師器皿1、瓦器椀2・3が出土した(図5)。SK05と同時期のものであろう。

SP07：調査区北東端で検出した柱穴である。平面は直径0.35mの円形で、検出面からの深さは0.25mあり、直径0.15mの柱痕跡を確認した。遺物は出土していないが、埋土の特徴がSK05・06と共通することから、これらと同時期と考えられる。

SK01：調査区東部で検出した直径0.7mの円形土壌で、瓦・陶器(大甕)・ガラス片などが出土した。時期は近代とみられ、遺構は完掘していない。

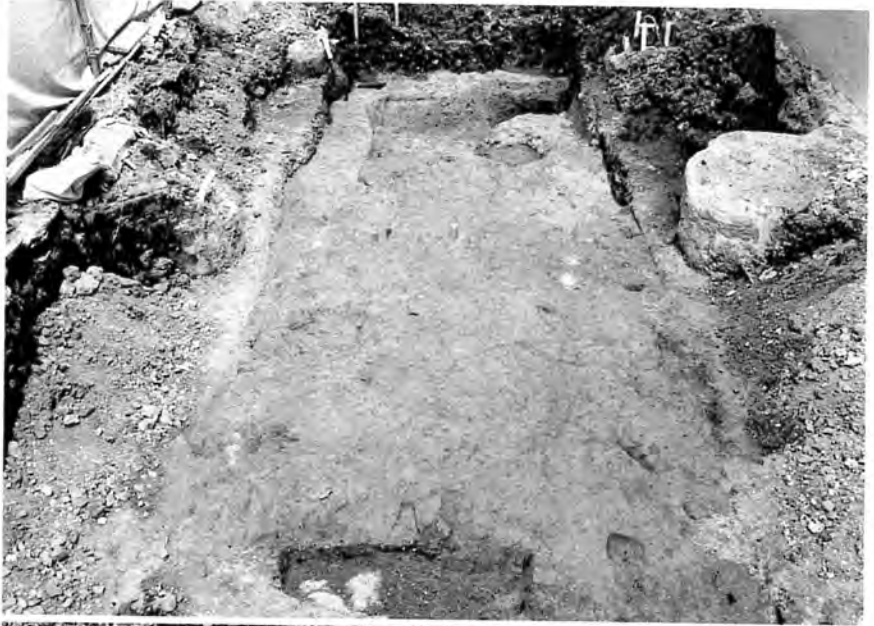
SK02：調査区西部で検出した土壌で、東西0.8m、南北0.6m、検出面からの深さが0.2mある。遺物は出土していないが、埋土の特徴が第1層と類似することから、時期は近代以降の可能性はある。

SP03・04：調査区南西部で検出した柱穴で、1.6m離れて東西に並ぶ。一辺約0.1mの方形で、深さは0.1m未満あった。遺物は出土していないが、埋土の特徴が第1層と類似することから、時期は近代以降の可能性はある。

〈まとめ〉

今回の調査の結果、調査区東部で12世紀後半頃の土壙2基、およびほぼ同時期と考えられる柱穴1基を確認した。SK06は西辺が南北方向に直線的であり、南北地割に規制された溝の可能性もあるが、調査範囲が狭く、詳細を明らかにすることができなかった。今後の周辺調査の進展に期待したい。

調査区全景
(西から)



調査区東部遺構完掘状況
(西から)



SK05・06断面
(北から)



- ・調査箇所 大阪市天王寺区上之宮町26-23
- ・調査面積 16㎡
- ・調査期間 平成20年7月30日～8月1日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町遺跡は大阪市内を南北に縦断する上町台地の尾根部から西側斜面の高所に位置し、本調査地の現地表の標高は約18.0mである。台地の最北端にある飛鳥・奈良時代の難波宮から尾根上をまっすぐ南に延びる朱雀大路は、本調査地の東約350mのところを通ると推定されていて、この朱雀大路を挟んで東側が細工谷遺跡、西側が上本町遺跡である(図10)。本調査地付近は難波宮大極殿から約2km南で、難波京の中心部分と推定される場所である。

現在までの調査で、細工谷遺跡では、飛鳥・奈良時代の井戸や柱穴、木製暗渠などの遺構や、和同開珎の枝銭や「百済尼寺」を推定させる奈良時代の墨書土器をはじめ、多数の遺物が見つかるとともに、古代以前の入組んだ谷のようすが次第に明らかになり、上町台地形成時のようすを探る手がかりが得られている(SD96-1・97-1・02-1・05-1・06-1・06-2・06-3次調査地など、図1)[大阪市文化財協会1999・2003・2007a・2007b]。

一方、上本町遺跡では、まだ細工谷遺跡ほど調査数は多くないが、本調査地の西約350mのUS06-1次調査地、その北側のUS04-2次と南側のUH07-1・07-2次調査地、また本調査地の南西約500mのNW81-4次調査地などでも古代の遺構や遺物が見つかった(図2)[大阪市文化財協会

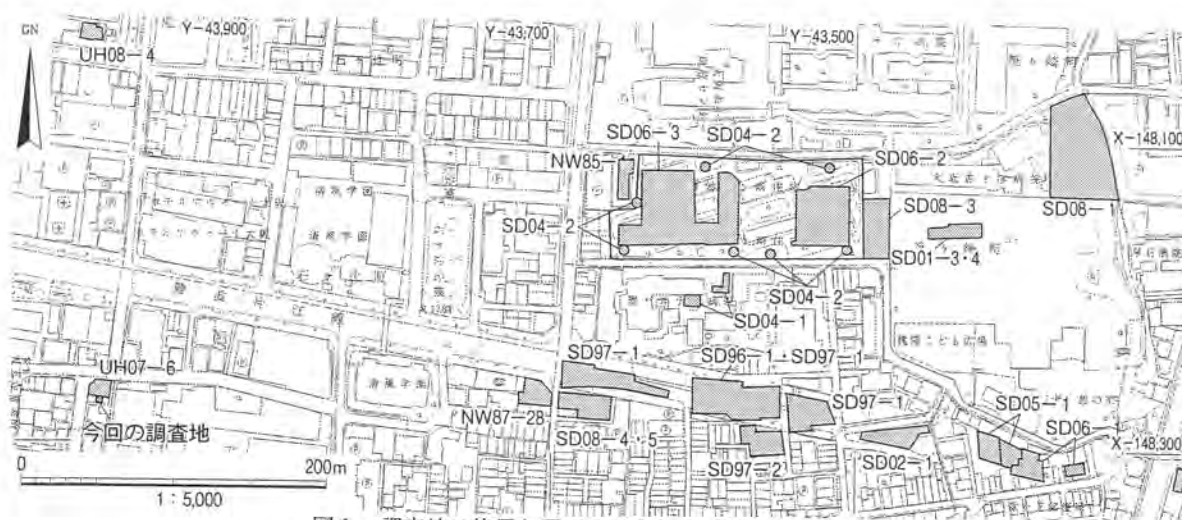


図1 調査地の位置と周辺の調査(1)(調査地より東側)

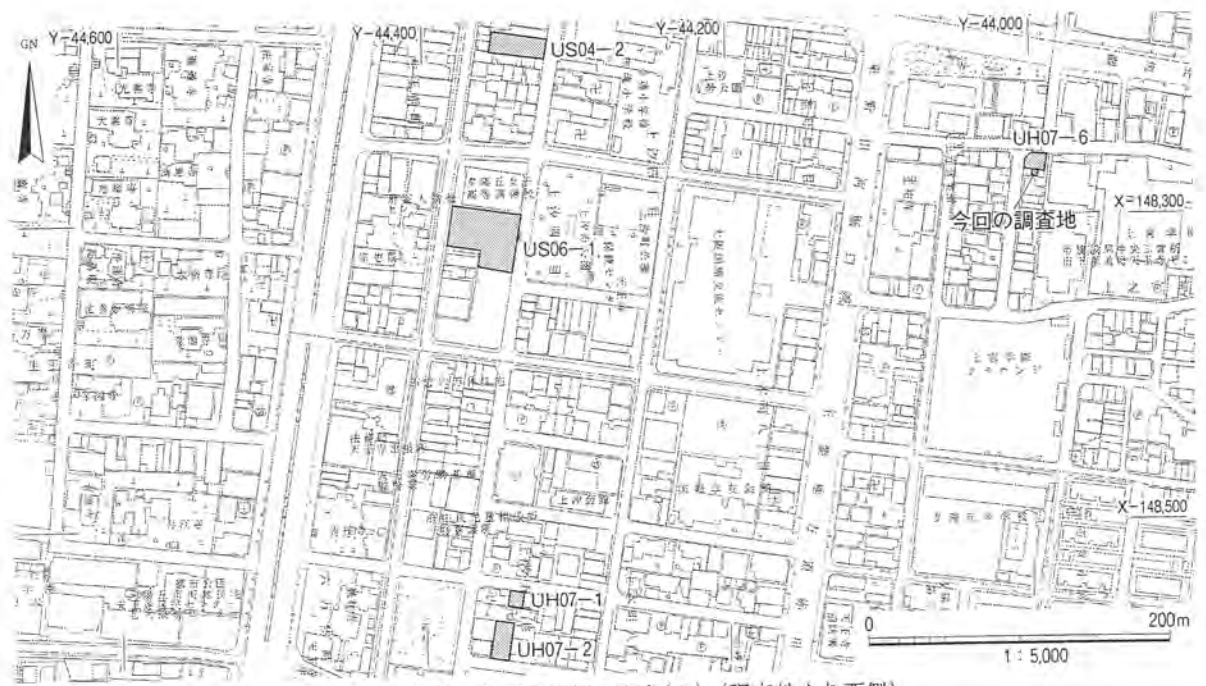


図2 調査地の位置と周辺の調査(2) (調査地より西側)

2006・2007c・d、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983・2005a・b]。

建設工事に先立って大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約0.4mで土器を含む地層が、また約1.9m下で地山とみられる黄色礫質砂層が見つかった。北隣のUH07-6次調査地では地表下約0.6mで地山の礫質砂層と、その直上に土師器・須恵器などが含まれる近世以前の作土が見つかっており[大阪市文化財協会2008]、本調査地周辺には古代の地層や遺構が残っている可能性があるかと推定された。そこで、古代の地層や遺構・遺物の有無、土地利用の変遷を探ることを目的として本調査を行うことになった。

調査地中央に東西4m、南北4mの調査区を設定して平成20年7月30日から調査を開始した(図3)。現代の地層を重機で除去した後、人力で掘下げて地山までの間の地層観察と遺構・遺物の検出を行い、適宜図面・写真などの記録をとった。平成20年8月1日に調査区を埋戻し、同日、器材の撤収を含め、現場におけるすべての調査を完了した。なお、本調査で用いた方位は世界測地系による座標北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・図中ではTP+〇mと記す。

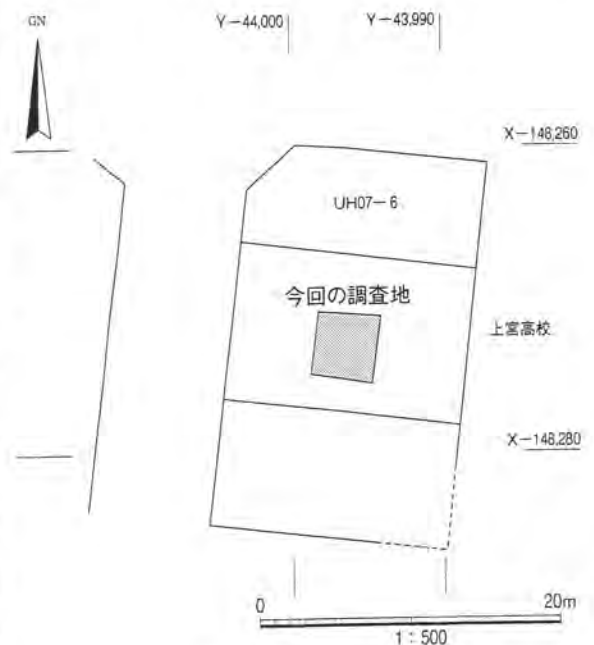
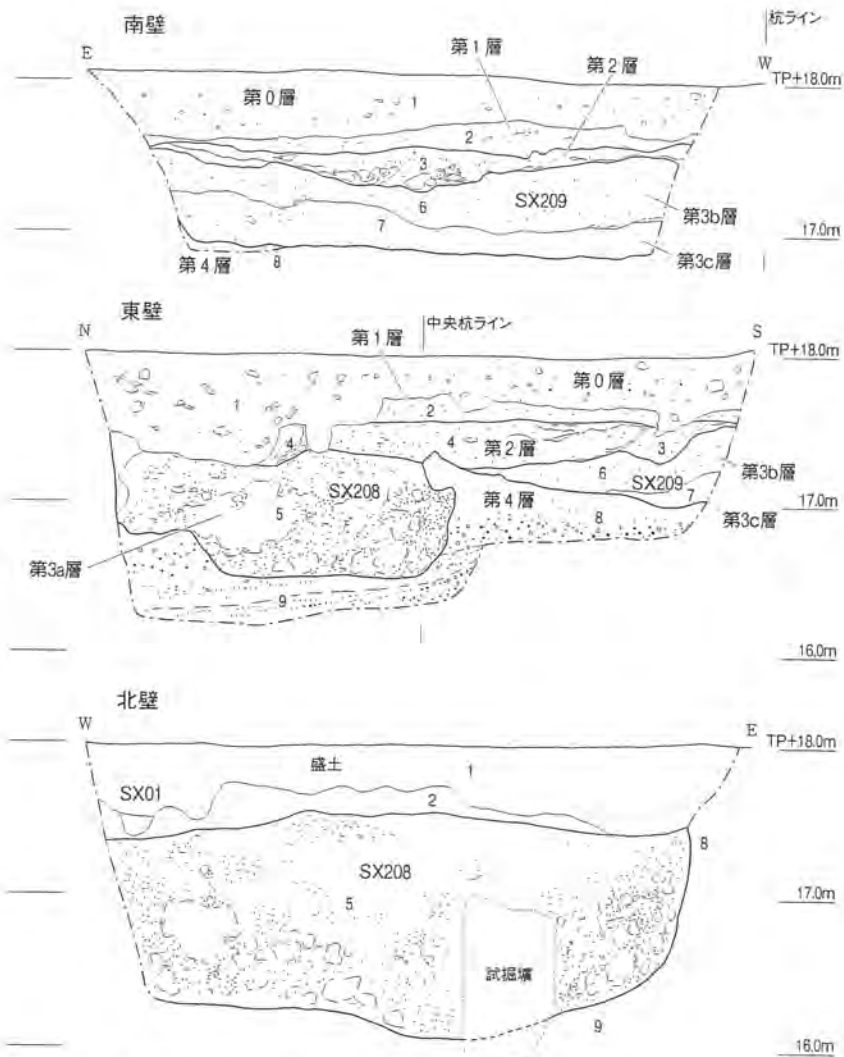


図3 調査区の位置

地層の堆積状況	断面図の層番号	層名	岩相・時期など	遺物
	1	第0層	表土(現代)	
SK01~03, SP05・07	2	第1層	整地層(近代)	
	3 4	第2層	整地層(江戸時代後半)	
SK101~104・106, SP105, SX208, SX209	5 6 7	第3層	人為的な搬入土層(江戸時代前半)	瀬戸焼天目碗、肥前陶器、肥前磁器、瓦器、近世瓦など
	8	第4層	段丘構成層(地山)	
	9			

図4 地層と遺構の関係



- 1 : 黒褐色(2.5Y3/2)砂・礫・石(現代盛土:第0層)
- 2 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂混り礫質シルト(第1層)
- 3 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂・礫混り粘土質シルト(酸化鉄、マンガンを含む)(第2層)
- 4 : にぶい黄褐色(10YR5/3)砂・礫混り粘土質シルト(酸化鉄を含む)(第2層)
- 5 : 黄褐色(2.5Y5/3)砂・礫混り粘土質シルト(SX208)
- 6 : 黄褐色(2.5Y5/3)礫混りシルト質砂(マンガンを含む)(SX209)
- 7 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂・礫混り粘土質シルト(炭、焼土を含む)(SX209)
- 8 : にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土・シルト混り礫質砂(地山:第4層)
- 9 : にぶい黄色(2.5Y6/4)礫質粗粒~細粒砂(地山:第4層)

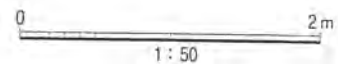


図5 古代の遺構断面図

〈調査の結果〉

1. 層序(図4・5、図版下段)

第0層：重機で除去した現代の表土層で、黒褐色の砂・礫・石が主体の地層である。層厚は25～65cmである。

第1層：最大層厚25cmの暗オリーブ褐色の砂混り礫質シルト層で、近代の整地層である。

第2層：にぶい黄褐～オリーブ褐色の砂・礫混り粘土質シルト層で、近世後半の整地層である。最大層厚は28cmで、南から北へと整地を進めていったことが断面の観察から読み取れる。本層の上面で土壌や小穴を検出した。

第3層：調査区の中ではSX208・209の埋土として存在する江戸時代前半の人為的な搬入土層である。SX208は黄褐色の砂・礫混り粘土質シルト(第3a層)、SX209は上部がマンガンを含む黄褐色の礫混りシルト質砂(第3b層)、下部が炭・焼土を含む暗灰黄色の砂・礫混り粘土質シルト(第3c層)で埋まっていた。最大層厚は第3a層が130cm、第3b層が25cm、第3c層が15cmである。次項でも述べるが、SX208・209は土取穴の可能性があり、これらを埋めた後、上面に土壌や小穴が掘られていた。

第4層：にぶい黄色の礫質砂層で、上方へ細粒となり、シルトや粘土が混る。本層からの出土遺物はなく、段丘構成層(いわゆる地山)と考えられる。層厚は110cm以上ある。

2. 遺構と遺物(図6～8、図版上段・中段)

a. 第4層上面の遺構と遺物

SX208は東西3.20m以上、南北1.60m以上の掘込みまたは土壌で、東側・北側・西側の調査区外に延びる。確認できた範囲で深さは1.38mある。第3a層(黄褐色の砂・礫混り粘土質シルト)で人為的に埋められており、瀬戸美濃焼、肥前陶器、肥前磁器、瓦器や近世瓦といった豊臣前期から江戸時代前半までの近世の遺物とともに、古代の土師器や須恵器が出土した。いずれも破片であるが、図8に瀬戸美濃焼天目碗8、土師器羽釜5、須恵器底部2を示した。

北隣のUH07-6次調査の土取穴SK02は東西3.00m、深さ0.90mの規模の土壌で、本調査地のSX208も同様に土取穴の可能性はある。しかし、この土取穴SK02は本調査の第2層上面のSK01と同じ幕末～明治時代の遺物を含み、SX208より新しい。SX208の全貌は明らかではないものの、隣地のSK02との同時併存はないと考えられる。

SX209は北にあるSX208によって壊され、大きく形が損なわれているが、東西3.00m以上、南北2.00m以上の、調査区東側・南側・西側へと延びる掘込みまたは土壌の底付近で、調査区内での深さは0.45mある。第3c層、第3b層の順に土を投入して埋められていた。SX208のような土取穴か整地層ではないかと考えられる。近世の肥前磁器・土師器・焼壁、中世の瓦器、古代の土師器・須恵器などの破片が出土した。肥前磁器染付碗9と土師器焙烙6、瓦器7、土師器の甕頸部3・4を図示した。これらは江戸時代前半までの遺物である。

b. 第3層上面の遺構と遺物

SK101は東西0.20m以上、南北0.45m、深さ0.25mの土壌で、調査区の西側へと延びる。埋土は灰

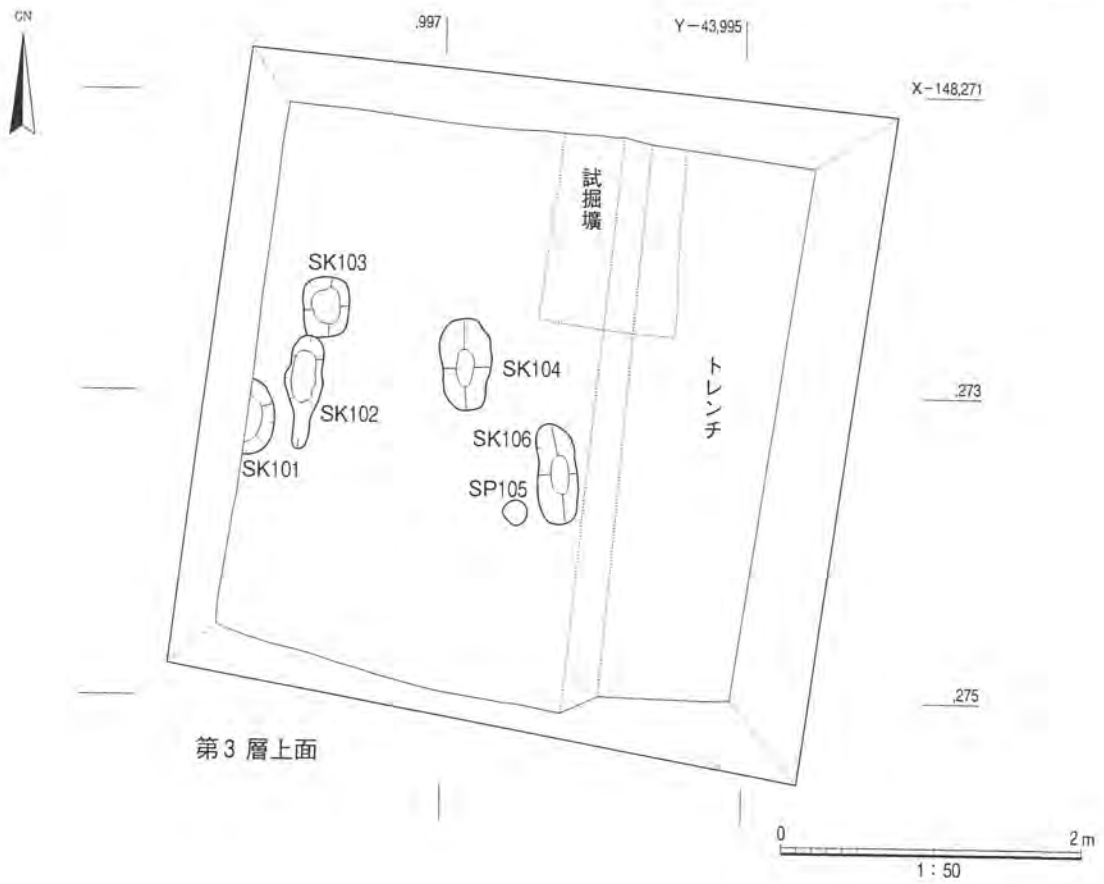
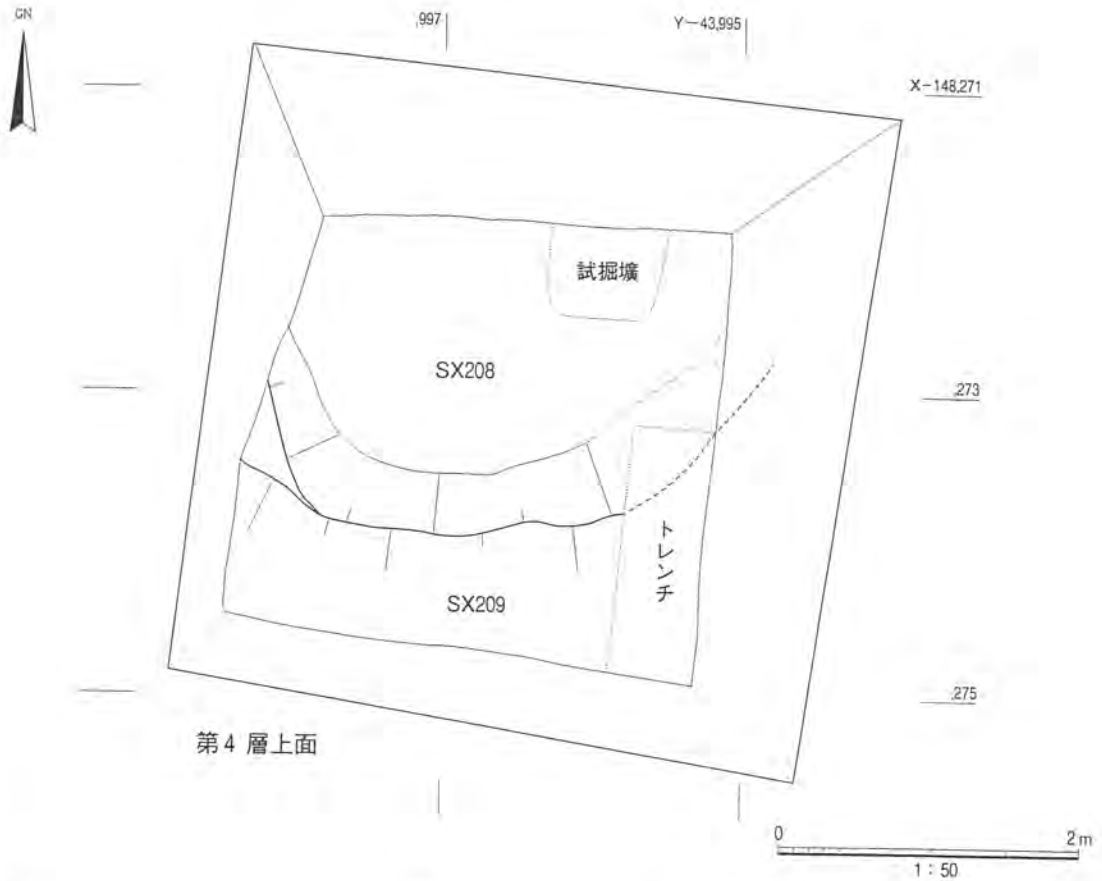


図6 遺構平面図(上：第4層上面、下：第3層上面)

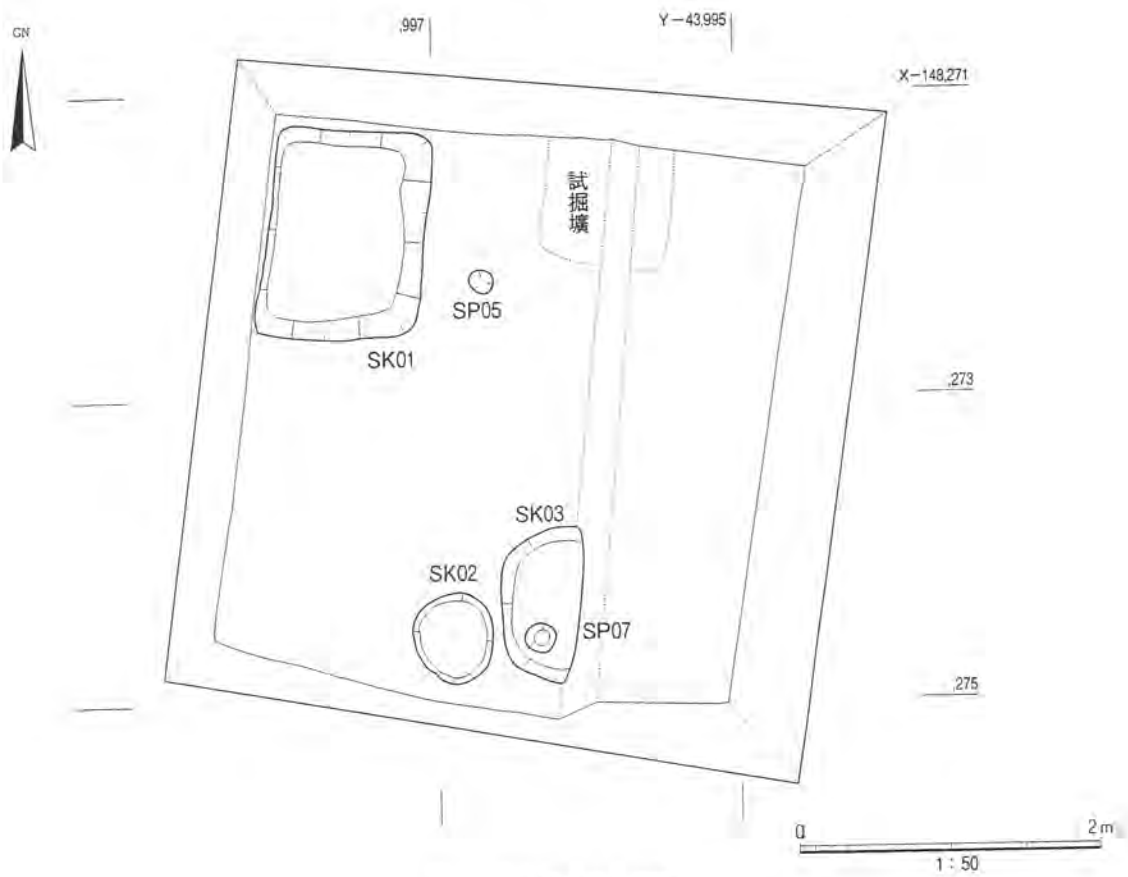


図7 第2層上面の遺構

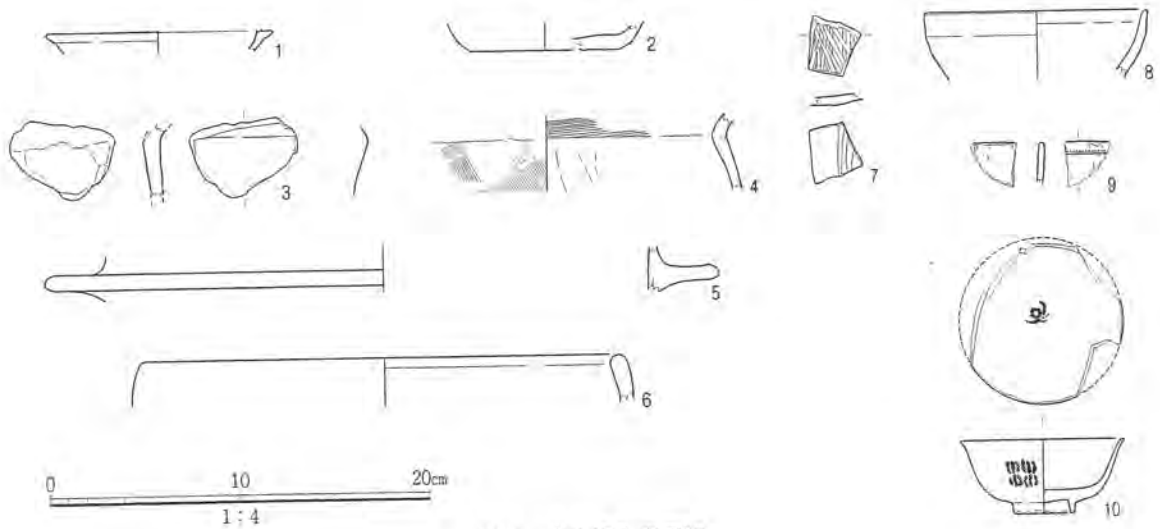


図8 出土遺物実測図

SX208(2・5・8)、SX209(3・4・6・7・9)、SX106(1)、SK01(10)

色砂質シルトである。丹波焼の破片が出土した。

SK102は東西幅の最大が0.23m、南北が0.65m、最深部が0.42mの細長い土壌である。埋土はSK101とよく似た灰色砂質シルトである。古代の土師器・近世の瓦・肥前陶器・土師器火鉢が出土した。いずれも破片のため図化できなかった。

SK103もSK101とよく似た灰色砂質シルトが埋土の土壌である。東西0.28m、南北0.35m、深さ0.16mで、平面形は隅丸長方形である。古代の土師器・須恵器が近世の土師器火消壺や京信楽系陶器碗と

ともに出土した。

SK104は東西0.35m、南北0.55m、深さ0.08mほどの平面形が楕円形の土壙で、炭・焼土を含む灰色砂質シルトで埋まっていた。土師器の口縁部の破片が出土した。

SK106は東西0.25m、南北0.60m、深さ0.30mほどの平面形が楕円形の土壙である。埋土はSK104とよく似た炭・焼土を含む灰色砂質シルトで、7世紀頃の須恵器杯身1と土師器の破片が出土したが、近世の遺構である。

SP105は直径約0.15mの小穴で、深さは0.08mである。埋土はSK104・106とよく似た炭・焼土を含む灰色砂質シルトである。出土遺物はない。

これらの遺構の性格は不明だが、位置が近くて埋土の似たSK101～103と、SK104～106はそれぞれ一つのまとまりとして捉えることができるのかもしれない。

c. 第2層上面の遺構と遺物

SK01は東西1.10m、南北1.35m、深さ0.35mの平面長方形の土壙で、埋土は灰褐色炭・砂混り礫質粘土ある。近世の土師器火鉢や備前焼・丹波焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器など多数の遺物が出土した。瀬戸美濃焼磁器の碗10は幕末～明治時代のもので、この土壙の年代を示す遺物である。

SK02は東西0.55m、南北0.60m、深さ0.10mほどの平面が円形に近い土壙で、埋土は暗灰褐色砂混り礫質シルトである。須恵器の破片が1点出土した。

SK03は東西0.50m以上、南北1.00mほどの土壙で、深さは0.20mほどである。埋土はSK02とよく似た暗灰褐色礫混り砂質シルトである。出土遺物はない。

SP05は直径約0.15m、深さ0.24mほどの小穴で、埋土は灰色シルト質砂である。須恵器の破片が出土した。

SP07は直径約0.20m、深さ0.10mほどの小穴で、埋土は暗灰黄色砂である。出土遺物はない。

3. 遺構と遺物の検討

朱雀大路を境に左京(東側)が細工谷遺跡、右京(西側)が本調査地を含む上本町遺跡が位置している(図10)、朱雀大路はSD08-4・5次調査地付近を南北に通ると推定されている(図9)。朱雀大路のすぐ東側にある細工谷遺跡付近は谷がいくつも入組んだ起伏のある地形であるのに対し、朱雀大路から西側は約1km離れた下寺遺跡付近に海蝕崖の名残があり、ここで急激に傾斜して低くなっている。この間にある上本町遺跡周辺は比較的起伏が緩やかで、細工谷遺跡では谷を埋立てて建物用地を確保しているのに比べると、もともと居住に適した場所であったことは容易に推測できる。

こういったことを考えあわせると、今回検出した遺構はすべて近世のもので、古代に遡る遺構は見つからなかったが、北隣のUH07-6次調査と同様に、これら近世～近代の遺構や整地層の中に土師器や須恵器が混ることは注目に値する。標高が高いがゆえに削られ失われてしまったものも多いと考えられるが、古代の遺構は本調査地やその周辺に存在した可能性はかなり高いものと推定される。

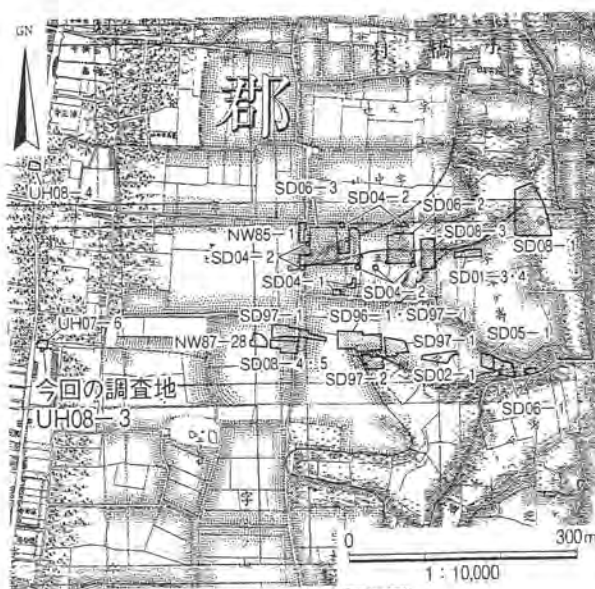


図9 調査地周辺図



図10 遺跡位置図

〈まとめ〉

今回の調査では、江戸時代前半から明治時代までの遺構や遺物を検出し、この間の土地利用の手がかりを得た。また、これらの遺構や地層の中に古代の難波京の時代の遺物が含まれることから、周辺に難波京にかかわる遺構の存在を推定することができた。

今後の調査成果とあわせてさらなる検討を加えてゆきたい。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査概報」：『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-62
- 2005a、「上本町南遺跡(US04-1次)発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191-201
- 2005b、「上本町南遺跡(US04-2次)発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203-210
- 大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I
- 2003、『都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD02-1)完了報告書』
- 2006、『昭和住宅株式会社による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書』
- 2007a、『平成17年・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』
- 2007b、『細工谷遺跡発掘調査報告』II
- 2007c、『上本町遺跡発掘調査(UH07-1)報告書』
- 2007d、『カナセ興産株式会社による建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH07-2)報告書』
- 2008、『上本町遺跡発掘調査(UH07-6)報告書』

調査地全景(東から)



第2面の遺構
(北から)



東壁地層断面
(西から)



上本町遺跡発掘調査(UH08-6)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区上本町2丁目1-23
- ・調査面積 約16㎡
- ・調査期間 平成20年9月11日～9月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋覚

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上本町遺跡の北部に位置し、周辺で行われた多くの発掘調査では古代の建物跡などが確認されていることから、ここでも同様の遺構が存在することが予想された(図1)。

事前の試掘調査では現地表下0.9mで瓦器片を含む暗黄色粘土質シルト層があり、その直下に黄色砂の地山層が確認されている。この地山層上面では土師器・須恵器の細片が出土する古代の柱穴と思われる遺構も確認された。このため、古代の柱穴が確認された試掘地点周辺の4m×4mの範囲を発掘調査することになった(図2)。

調査は9月10日に事業者により中世包含層の深度まで掘削が行われた後、11日から人力による掘削を行い、順次、掘削・記録作業を行って翌12日には作業を完了した。

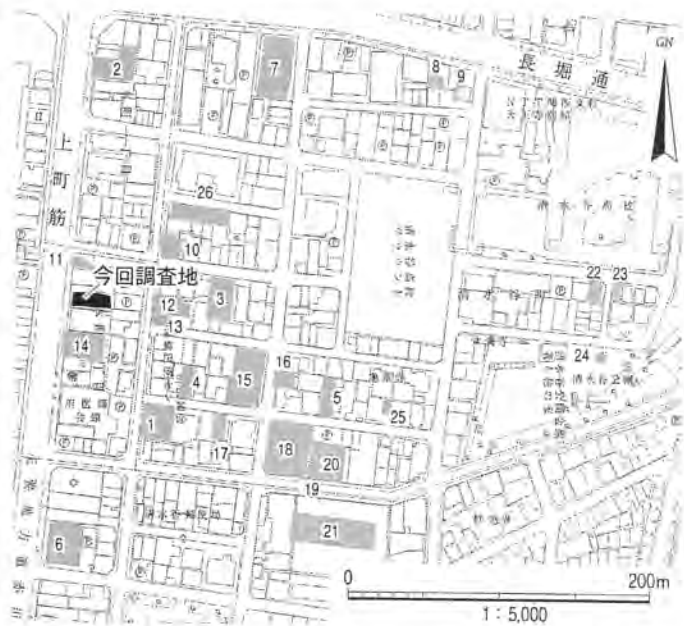
以下にその結果を報告する。なお、図2・4の北方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記している。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

調査地点で確認された地層を以下に記述する。

第1層：黒褐色(7.5YR3/2)シルト～細粒砂層で、近現代の整地層および攪乱の埋土である。層厚は20～40cmであるが、攪乱部分は100cm以上ある。



1 : OS91-3	2 : NW82-33・45	3 : OS87-135	4 : OS88-97
5 : OS92-7	6 : OS93-3	7 : OS96-22	8 : NS90-14
9 : NS95-11	10 : OS95-12	11 : OS00-25	12 : OS97-12
13 : OS95-1	14 : OS99-30	15 : OS98-3	16 : OS88-29
17 : OS96-28	18 : OS99-82	19 : OS87-124	20 : OS95-56
21 : OS99-16	22 : NW87-18	23 : OS98-19	24 : NS00-19
25 : NW06-1	26 : OS07-1		

図1 今回の調査地と周辺の調査地

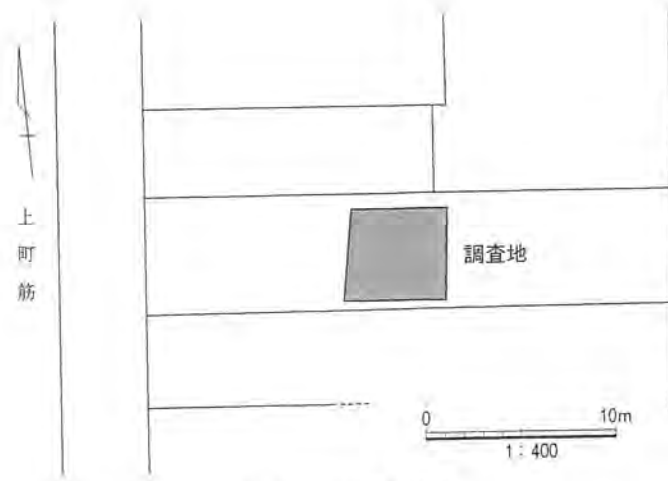


図2 調査地位置図

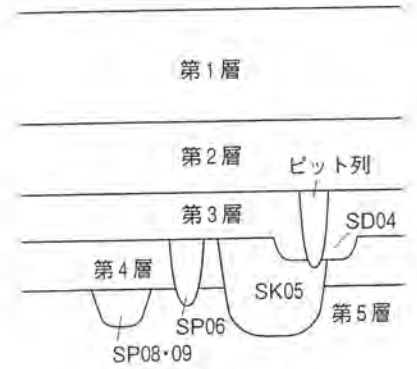
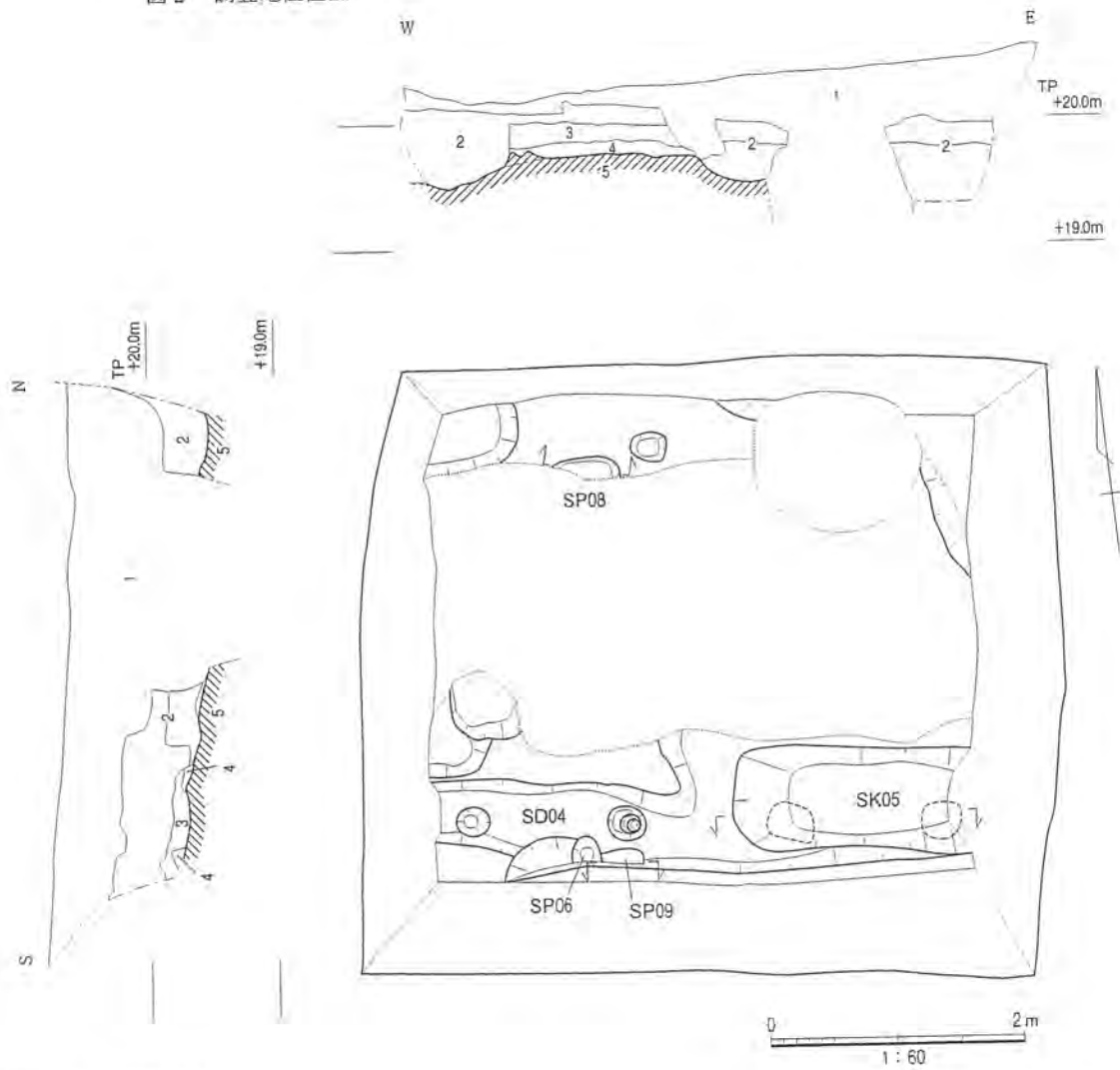


図3 地層模式図



- a: 黒褐色 (2.5Y3/2) 中粒砂質シルト
- b: 黒色 (2.5Y2/1) 砂質シルト
- c: におい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト
- d: 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 中粒～粗粒砂混り粘土質シルト
- e: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒～中粒砂
- f: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルト
- g: 褐色 (7.5YR4/3) 中粒砂～細礫混りシルト
- h: 明褐色 (7.5YR5/6) 細礫混り粘土
- i: 褐色 (10YR4/4) 細礫混り粘土質シルト
- j: 黄褐色中粒～粗粒砂質シルト

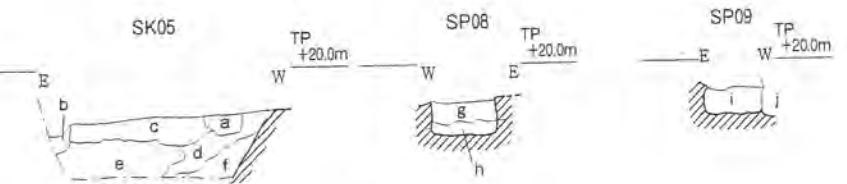


図4 第5層上面平面図および西・北壁断面図

第2層：黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層で層厚は15cmであるが、一部本層を埋土とする土壌があり、層厚は60cmとなる。徳川期の整地層である。

第3層：暗褐色(10YR3/3)中粒砂質シルト層で、層厚は20cmの整地層である。出土遺物はなかった。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂混り粘土質シルト層で、層厚10cmである。本層からは少量だが土師器小皿、肥前陶器などが出土しており、本層上面から掘られたSK05の出土遺物からみても豊臣期の整地層とみられる。

第5層：黄褐色(10YR5/6)細礫混り粘土質シルトの地山層である。

2. 遺構と遺物(図4・5)

次に、検出されたおもな遺構と遺物について記述する。

第5層(地山)上面では柱穴SP08・09が検出された。試掘で確認されていたのがSP08で、その約3m南にSP09が検出された。いずれも掘形の一部が残るのみで、平面形は一辺の長さが0.6mの隅丸方形に復元できる。深さはSP08が0.25m、SP09は0.20mであった。SP08から土師器高杯、須恵器杯の細片が、SP09から須恵器脚台部4が出土しており、古代の柱穴と考えられる。

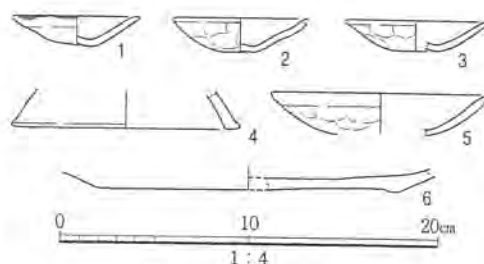


図5 出土遺物実測図

SK05(1・2・5・6)、SP06(3)、SP09(4)

SP08・09は規模と埋土、掘形の方位がほぼ等しいことから、同じ建物の柱穴である可能性が高い。

第4層上面でSK05・SP06、第3層下面で溝SD04を検出した。

土壌SK05は南北の幅0.8m、東西1.8m以上で、深さは0.5m以上であった。埋土は図4に示したとおりである。完形品2点を含む土師器皿1・2・5、瀬戸美濃焼志野大皿片6が出土した。

SP06は直径0.25m、深さ0.30mのピットで、SK05から出土したのと同じ土師器小皿3が出土した。

溝SD04は幅0.5~1.0m、深さ0.1mの浅い溝である。埋土は第3層で若干の焼土を含む。後述する第3層上面のピット列はSD04の中軸線上に並ぶことから、溝SD04の位置は敷地境であった可能性がある。

南部の第3層上面で直径0.3m前後、深さ0.3mほどのピットが、東西方向に延びる溝SD04の中軸線上に1.2m間隔で4基検出された。出土遺物はなかった。

(まとめ)

今回の調査地は、大半が攪乱と近世の遺構で壊されていたものの、周辺の発掘調査と同様に2基の古代の柱穴を検出することができた。これらは同一の建物を構成する柱穴の可能性が高く、既知の建物群との関係が注目される。また、南端の東西溝SD04の位置は近世の敷地境であった可能性がある。小面積で短期間の調査であったが、以上のような成果を得ることができた。

第5層上面全景(西から)



SP08・09(南から)



SP08断面



- ・調査箇所 大阪市天王寺区小宮町5
- ・調査面積 11㎡
- ・調査期間 平成21年2月18日～2月20日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町遺跡は上町台地の脊梁部から東斜面にかけて立地する。細工谷遺跡の南西に当り、東は難波京朱雀大路跡、南は四天王寺および四天王寺旧境内遺跡に隣接する。調査地南東の街区では1992年度に大阪市教育委員会による試掘調査で奈良時代の井戸が発見され、重圈文軒丸瓦などが出土している。また、北西約200mの地点で行われたUM95-2次調査では、奈良時代の井戸状遺構や小柱穴などが発見されている(図1)。

本調査地は市営小宮町住宅の建替計画地内に当り、2006年度に試掘調査(US06-3次)が行われた。

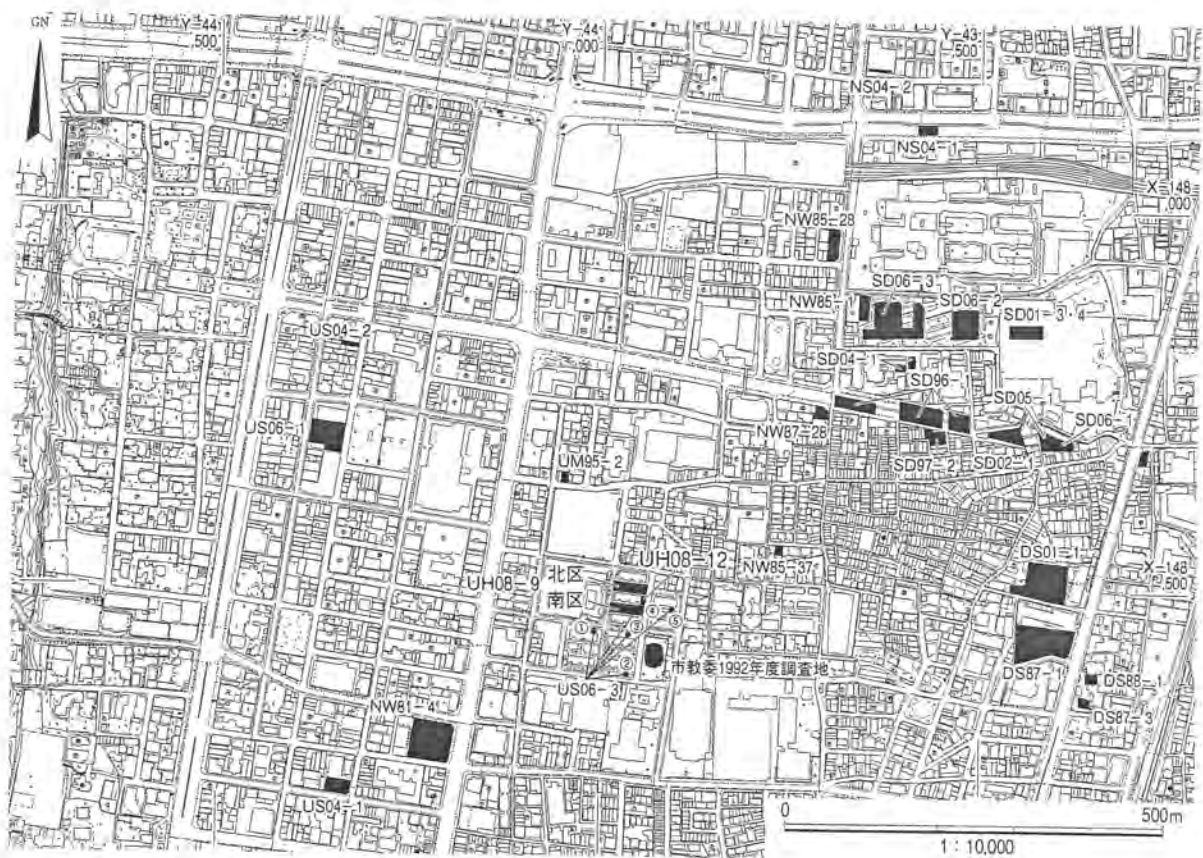


図1 調査地位置図

この調査では奈良時代の遺物を含む井戸状の遺構が報告されており、今回の調査はこの遺構を再発掘し、周辺にも同時期の遺構があるかどうかを確認するために行った。

調査は、US06-3次試掘調査の④トレンチの位置に当る敷地東辺に南北5.0m、東西2.2mの調査区を設けて行った(図2)。近代の作土層である第3層までを重機で掘削し、それ以下は人力によった。ただし、④トレンチ内の埋戻し土をほぼ除去した時点で調査区壁面が崩落し始め、敷地外にまで影響が及ぶ可能性があったので即時調査を中止し、埋戻した。本報告書で用いた座標値は国土平面直角座標第Ⅵ系により、指北記号は座標北を示す。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

現代の整地層の下で4層を確認した。層序はUH08-9次調査のそれに対応し、年代観も同調査の成果が適用できる。

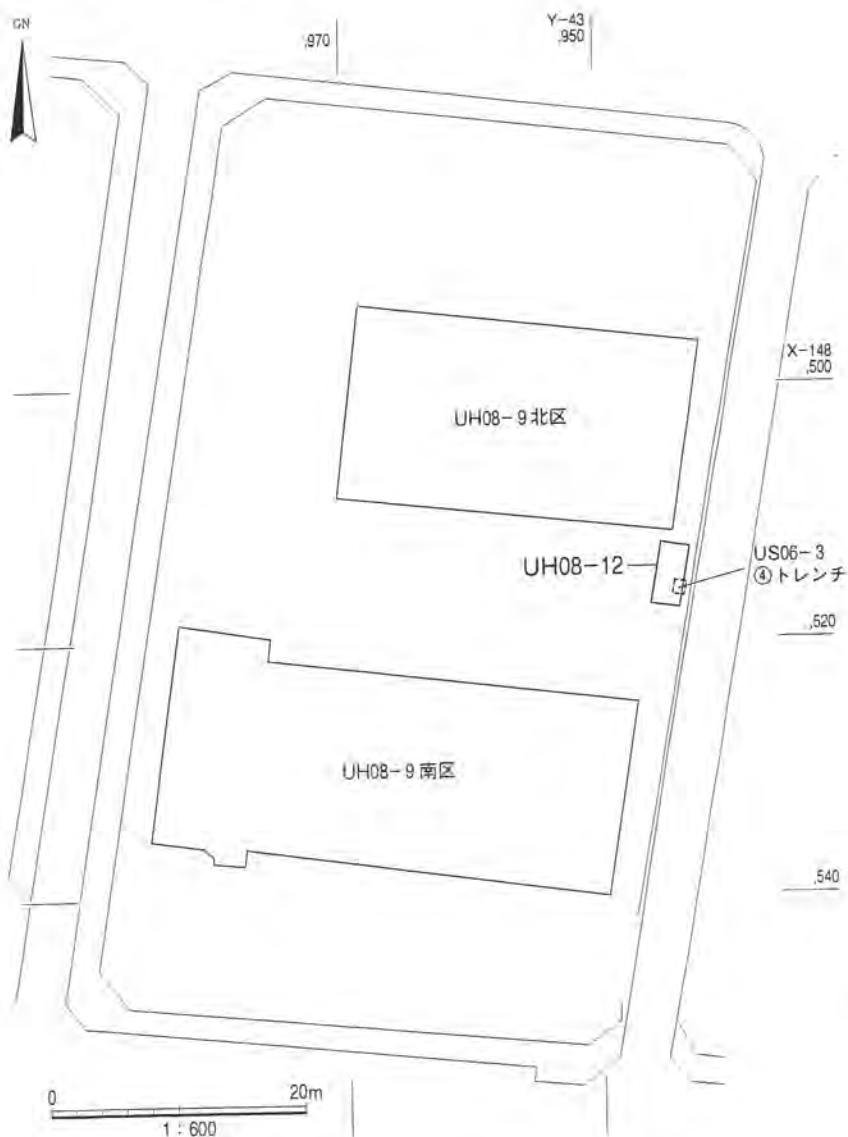


図2 調査区配置図

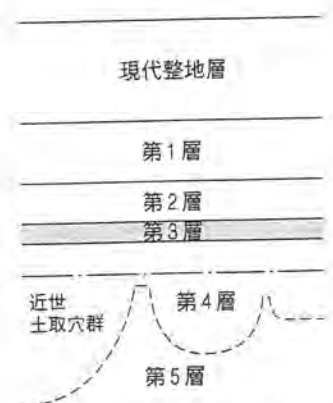


図3 地層と遺構の関係図

第1層：灰色砂質シルト～中粒砂からなる整地層で、層厚は30cmである。近代の遺物と、大量の炭・焼土を含み、第二次大戦戦災後の整地層であろう。

第2層：灰白色シルト質中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は30cmである。近代の地層である。

第3層：灰色シルト質細粒～中粒砂からなる作土層で、層厚は約10cmである。近代の地層である。

第4層：暗灰黄色極細粒砂や黒灰色シルトなどからなる客土層で、層厚は40cmまでを確認した。

UH08-9次調査の成果から判断して、近世後半の土取穴を埋積した整地層である。

以下の地層は確認できなかったが、前回の試掘およびUH08-9次調査を参考にすると、下位には地山の灰白色極細粒～中粒砂(UH08-9次の第5層)からなるMa12海成堆積層がある。

2. 遺構と遺物

US06-3次調査④トレンチの井戸 前回の試掘調査では第3層直下で地山が検出され、その上面で黒灰色シルトを埋土とする直径1m以上の円形の落込みを検出したとされている。落込みからは奈良時代の遺物が多量に出土し、同時代の井戸と考えられていた。しかし、今回の調査で旧④トレンチの北・西・南壁で地層断面を観察したところ、黒灰色シルトは確認できたものの地山は発見できなかった。黒灰色シルトは暗灰黄色極細粒砂などの偽礫とともに客土層を形成しており、こうした状況はUH08-9次調査で多数検出された近世後半の土取穴の埋土(第4層)に共通していた。遺物は土師器・須恵器・肥前系磁器の破片が出土したが時期を決定できるものはなかった。UH08-9次調査では第4層内に古代の包含層を掘削して客土したとみられる部分があり、そのような箇所では飛鳥・奈良時代の遺物が多く出土する。今回の調査では、旧④トレンチ内を完全に清掃することはできなかったものの、前回の試掘で、このような近世の土取穴埋土の古代の包含層に由来する偽礫を発掘して古代の遺構とみた可能性が高いと考えられた。

〈まとめ〉

今回の調査では、US06-3次試掘調査で奈良時代の井戸とされた箇所を再発掘したが、同様な遺構を確認することはできなかった。ただし、本調査地の周辺では奈良時代の遺物が多量に出土しており、後世に破壊を被っているものの同時期の遺構が分布していたものと考えられる。

第4層は近世後半の土取穴の埋土とみられた。これにより、UH08-9次調査北・南区の間に当る本調査地点にも土取穴が広がっていたことになり、広範囲に土取りが行われたとみることができる。土取りは壁土の採取を目的としたものと考えられるが、近世大坂の手工業生産の一面を窺わせる遺構であり、その一例を加えることができた意義は大きい。

IV 住 吉 区

帝塚山古墳群発掘調査(TZ08-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区帝塚山西1丁目28-6
- ・調査面積 21m²
- ・調査期間 平成20年9月10日～12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地南部の西縁にある、帝塚山古墳群内に位置している(図1)。調査地の南西側には、前方後円墳の帝塚山古墳がある。これまで周辺では、TZ80-1・86-2・95-2・05-1次調査が実施されており、帝塚山古墳の墳丘際で行われたTZ80-1・86-2・95-2次調査では、周溝の可能性のある落込みが検出され、帝塚山古墳に伴うとみられる埴輪も出土している。またTZ05-1次調査では、近世の土取穴内から奈良～平安時代の須恵器や統一新羅時代の陶質土器が出土しており、古代には周辺に集落が広がっていたことも予想される。

平成20年9月8日に、大阪市教育委員会が敷地内で試掘調査を行ったところ、現地表下55～100cmで古代とみられる土師器・須恵器を含む包含層が確認された。この結果を受け、同年9月10日から発掘調査を実施した。

調査区は、敷地内の中央に南北7m、東西3mの範囲に設定した(図2)。重機により、現地表下50cmまでの地層を除去し、以下を人力によって掘下げた。本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。指北記号は図1が座標北、それ以外が磁北である。



図1 調査地周辺図



図2 調査区位置図

第0層	現代
第1a層	近代～近世
第1b層	近世
第2層	中世
第3層	古代
第4層	古代
第5層	

図3 遺構と地層の関係

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

調査地の層序を、以下の第0～5層に区分した。

第0層：現代の盛土層である。

第1層：近世以降の作土層で、にぶい黄褐色細粒～中粒砂からなる第1a層、黄褐色シルト質細粒～中粒砂からなる第1b層に区分できる。層厚は20cmで、第1b層からは近世の肥前磁器が出土した。

第2層：第1b層の下位に部分的に遺存するにぶい黄褐色極細粒砂層、および中世の遺物を含む土取穴の埋土である。

第3層：調査区西南部に分布し、暗褐色シルトからなる暗色帯構成層である。層厚は最大で30cmあり、調査区北半では中世

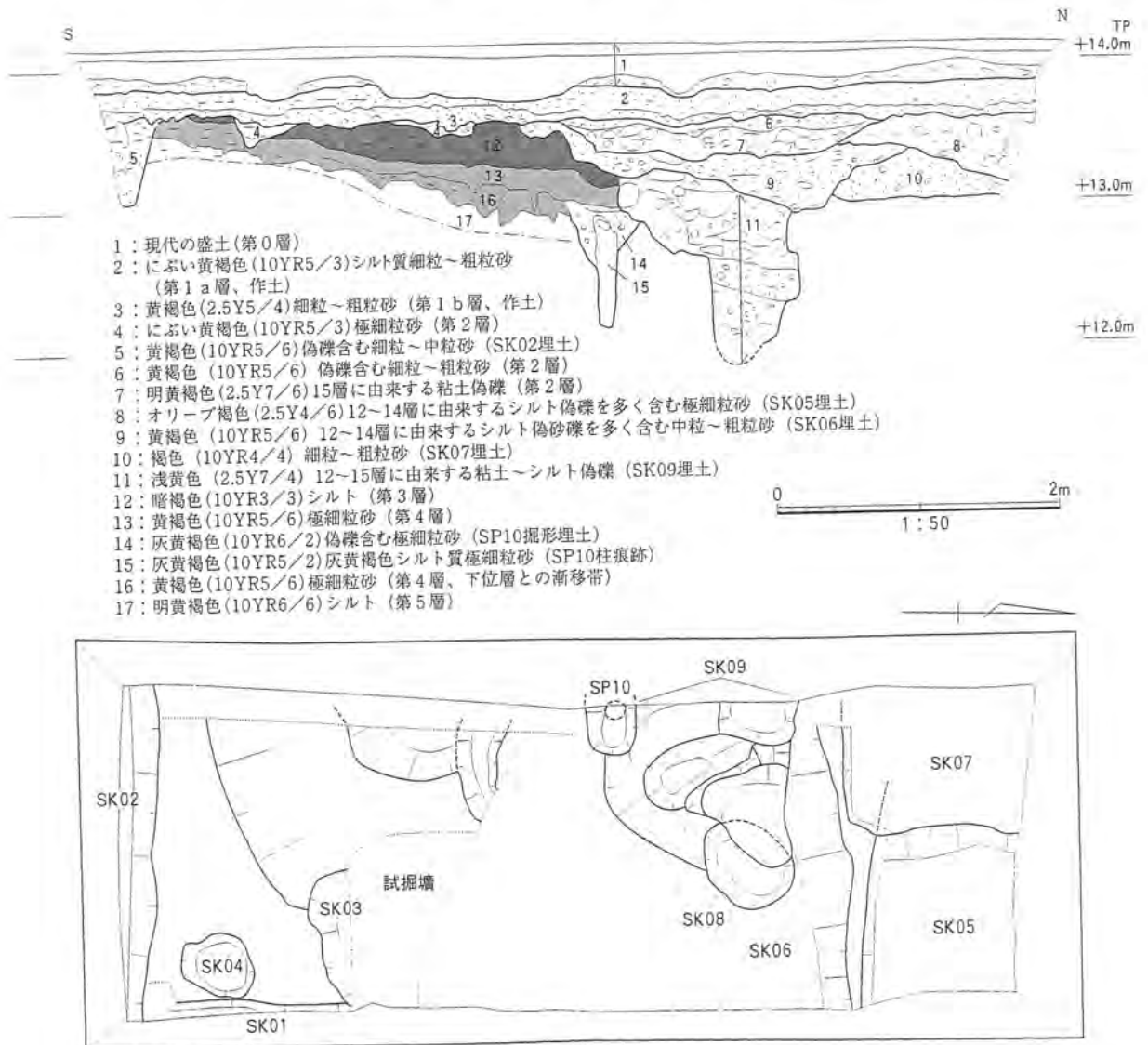


図4 調査区平面図・西壁断面図

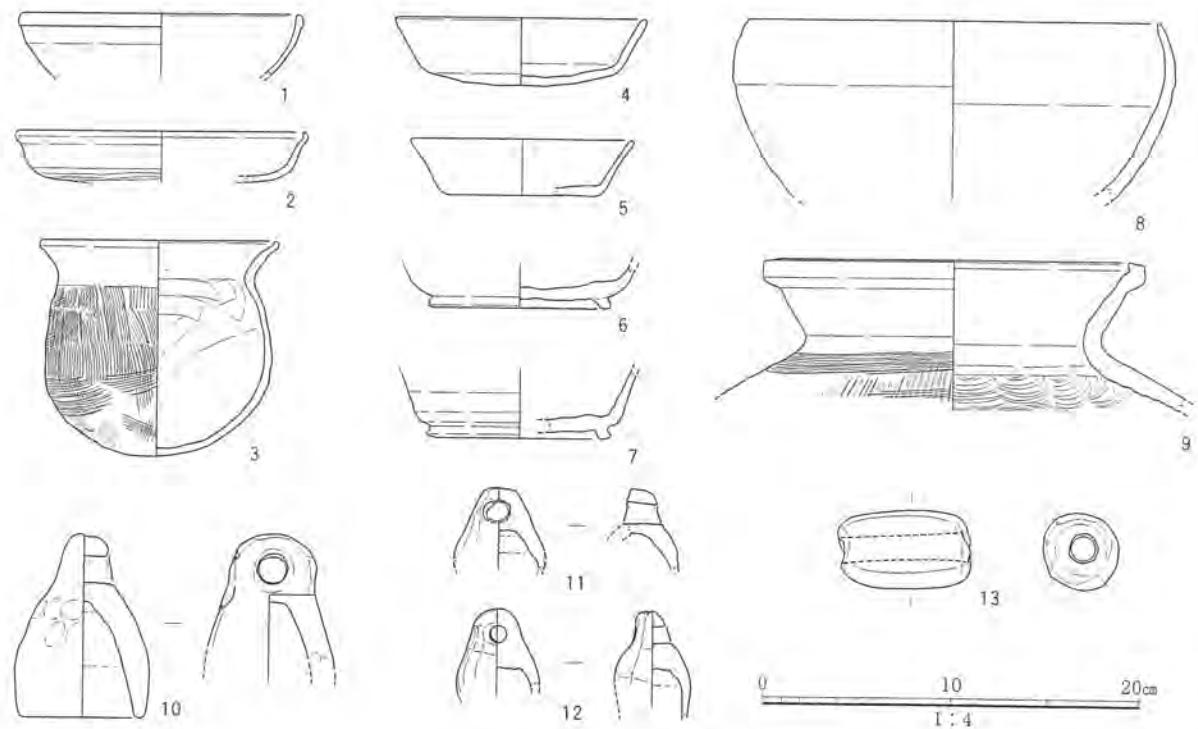


図5 出土遺物実測図

SK06(7)、SK09(1・2・5・9・10・13)、SP10(3・4・8)、第4層(12)、第5層(6・11)

の土取穴の掘削により削られ、遺存しない。古代の土師器・須恵器を含む。

第4層：第3層の下位にある黄褐色極細粒砂からなる暗色帯である。層厚は最大で30cmある。古代の土師器・須恵器を含むほか、本層内でSP10を検出した。

第5層：明黄褐色シルトからなる段丘構成層である。

2. 遺構と遺物(図4・5)

SK01～09 埋土や形状の特徴から、大きく3種類に分けられる。SK03・04・08は、第2層と共通する極細粒砂を埋土とする小規模な土壌で、検出面からの深さはSK03・04が0.1m未満、SK08が0.5mあった。SK01・02・05～07は、掘込みのプランが直線的かつ底が平坦で、検出面からの深さが0.5m前後と共通する。第3～5層に由来する偽礫や細粒～中粒砂で埋戻されており、土取穴と考えられる。これに対し、SK09は狭い範囲を深く掘込んでおり、形状も不整形で、底は凹凸が顕著である。埋土の特徴や切合い関係から他の土取穴よりも先行する。出土遺物は、SK09から12世紀前半の白磁碗1が、SK08からは瓦器の細片が出土していることから、遺構の時期は中世とみられる(図5)。そのほか、SK06から須恵器杯B7、SK09から土師器杯A2、須恵器杯A5・甕9、土師質飯蛸壺10・管状土錘13といった古代に遡る遺物が出土している。このうち、2は平城宮土器Ⅲに位置づけられる[古代の土器研究会1992]。

SP10 調査区中央の西壁で検出した柱穴で、第5層内から掘込まれていた。柱痕跡は直径が0.1mあり、柱穴の深さは0.9mと深い。調査区内でこれと組合う柱穴は検出されていない。SP10の上面付近で完形の土師器甕3と須恵器杯A4、土師器鉢8が出土した(図5)。これらは飛鳥Ⅳに位置づけられ

るものであり、他も同じ頃のものであろう。

また、須恵器杯B6、須恵質の飯蛸壺11が第5層、12が第4層からそれぞれ出土している。飯蛸壺は、SK06から出土した10・13とともに、周辺に古代の漁撈集落が存在していたことを示す資料といえる。

〈まとめ〉

今回の調査の結果、帝塚山古墳と関連する遺構・遺物は検出されなかった。ただし、飛鳥時代に遡る柱穴1基を確認するとともに、古代の地層や中世の土取穴から飛鳥・奈良時代の遺物が比較的多く出土し、付近に古代の集落が存在していたことが推測できる。特に土師質・須恵質の飯蛸壺や管状土錘が含まれることから、周辺で活動した集団は、漁撈を生業としていた可能性が高い。

参考文献

古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』

遺構完掘状況(南から)



西壁地層断面(東から)



SP10断面(南東から)



山之内遺跡発掘調査(YM08-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区杉本二丁目531-2・531-17・533
- ・調査面積 40㎡
- ・調査期間 平成20年8月4日～8月8日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、平田洋司

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は山之内遺跡の東北部に位置する(図1)。周辺の調査では室町時代を主体とする鑄造に関する遺構・遺物が多く見つかかり、河内鑄物師との関連が注目される地点である[村元健-2004]。

今回の調査地でも、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下1.1mにて、焼土や炭・炉壁を多く含んだ、中世末から近世初頭と考えられる地層が確認された。このため、工事に先立ち、当該地において発掘調査を実施することとなった(図2)。

平成20年8月4日より重機による掘削を開始した。進入路の関係から小型の重機の使用となったため、掘削には2日を要した。また、工期の関係上、重機による掘削は遺構埋土部分を除いて後述の第8層上面までとした。以深はすべて人力による掘削を行った。地表下1.5mまでが調査予定深度であったが、工事側の協力を得て、遺構に関しては一部、工事深度より下位まで調査を実施した。途中、適宜写真撮影・図面作成を行い、8月8日、現地における作業を完了した。

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、TP+〇mと表記する。また、示北記号は図1・2・5が座標北、それ以外は磁北を示す。

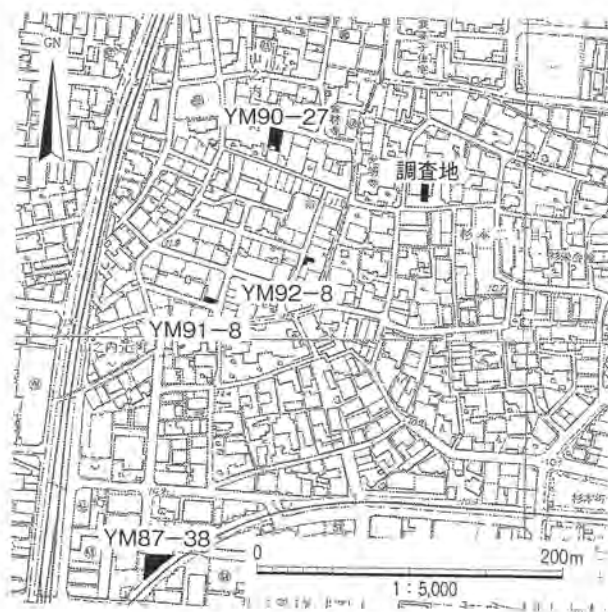


図1 調査地位置図

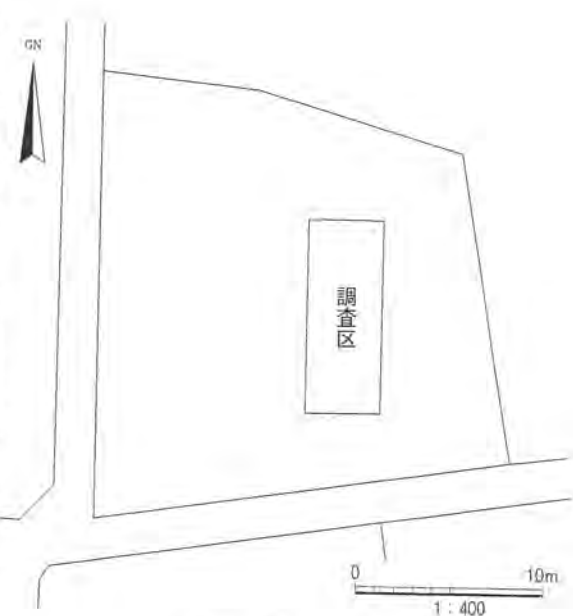


図2 調査地配置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

後述するように、第8層上面まで重機による掘削を行ったため、以下の記述はおもに断面での観察結果による。

第0層：現代整地層で、層厚は10～50cmである。

第1層：複数の整地層と生活面で構成される近代～現代相当層で、層厚は20～50cmである。

第2層：明黄褐色シルト偽礫や粗粒砂を主体とする整地層とオリーブ褐色粗粒砂質シルト層が互層となり、層厚は30～40cmである。江戸時代に相当する。

第3層：炭を少量含む黄褐色粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は20cmである。江戸時代に相当する。

第4層：地山層に由来する偽礫を多く含むオリーブ褐色粗粒砂質シルトからなる整地層である。層厚は30cm程度

で、調査地の南側にのみ存在する。肥前系磁器が出土しており、江戸時代に相当する。

第5層：炭を多く含む黒褐色シルト層である。層厚は10～15cmで、全域に分布するほか、後述のSK606の埋土となる。炭のほか焼土・炉壁片などを多量に含む。出土遺物から14～15世紀代に比定できる。

第6層：炭・地山偽礫を多く含むオリーブ褐色中粒砂質シルトからなる整地層である。層厚は20cm以下で、調査区のほぼ全域に認められる。上・下層との関係から14～15世紀代に比定できる。

第7層：炭を多く含む黒褐色シルト層で、層厚5～30cmである。後述のSK807の埋土でもある。第5層に酷似する。出土遺物から14～15世紀代に比定できる。

第8層：地山層に由来する偽礫を多く含むにぶい黄色シルトからなる整地層である。層厚は5～10cmで調査地の北側に分布する。本層は掘削していないために時期は不明であるが、本層上面の建物などに関係する整地層と推定できる。

第9層：にぶい黄色シルト層で地山層である。

2. 遺構と遺物(図4～6)

遺構の検出作業は第8層上面で行った。そのため第8層以上の各層からの遺構を同一面にて検出することとなり、本来の遺構面については不明なものが多い。ただし、第5～7層に炭が多く含まれることから、柱穴など掘削後にすぐ埋戻す遺構で、埋土に炭を含まないものは第8層上面の遺構と判断できる。これらについては現場作業時に付した二桁の通し番号に加え、百の位に8を付けて区別することとする。また、埋土に炭を含むもののうち、調査地の断面で本来の遺構面が確認できたものは、百の位にそれぞれの層番号を付けた。ただし、柱穴は本来の遺構面が判断しがたく、ひとまず百の位

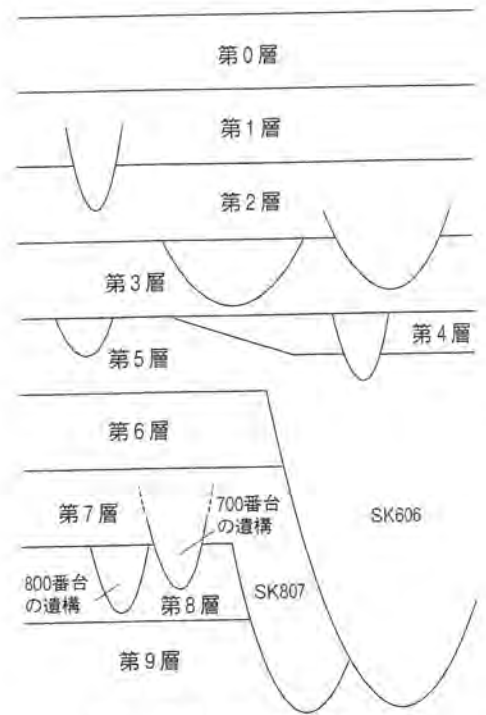


図3 地層と遺構の関係模式図

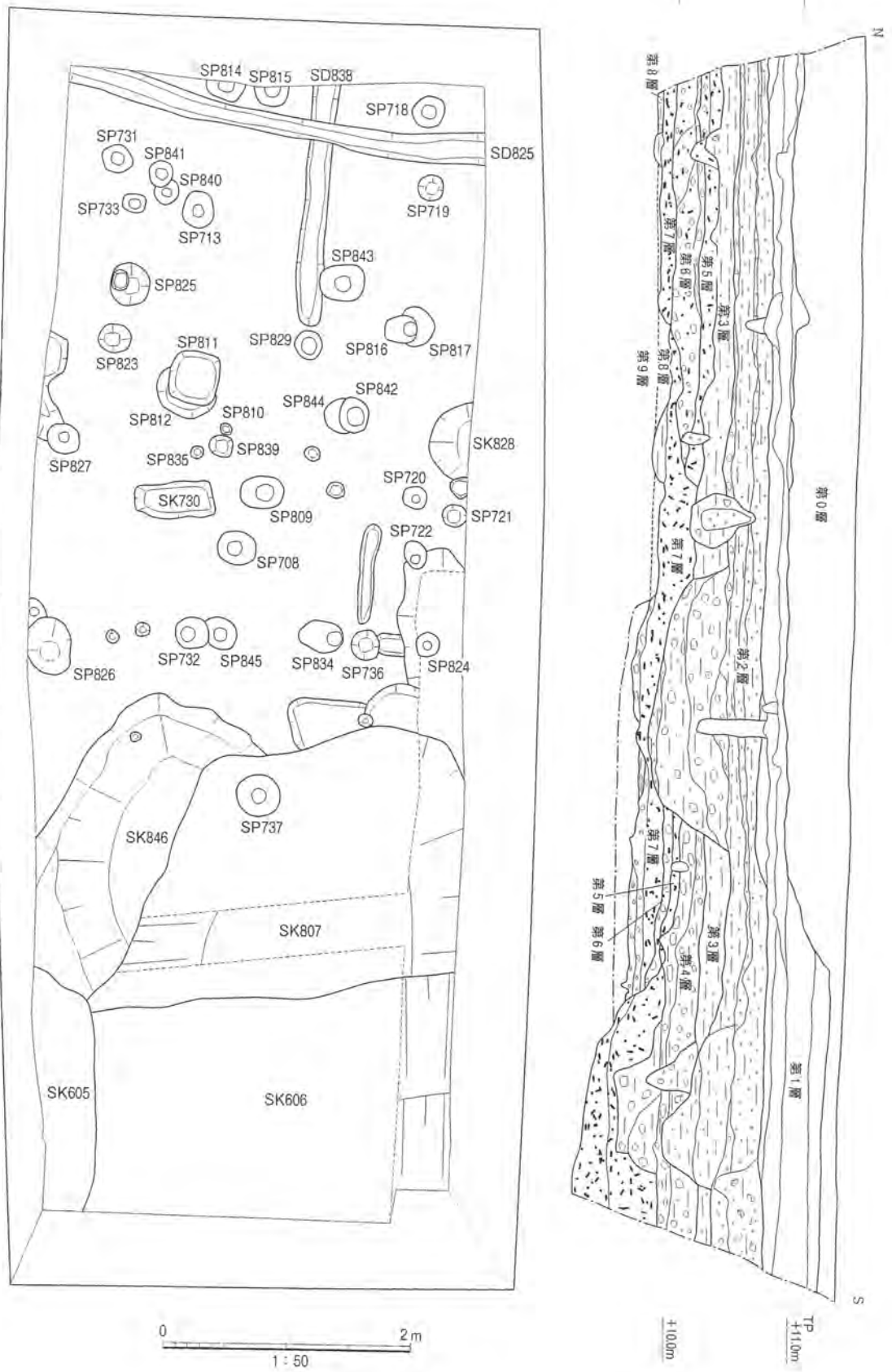


図4 検出遺構平面図および東壁断面図

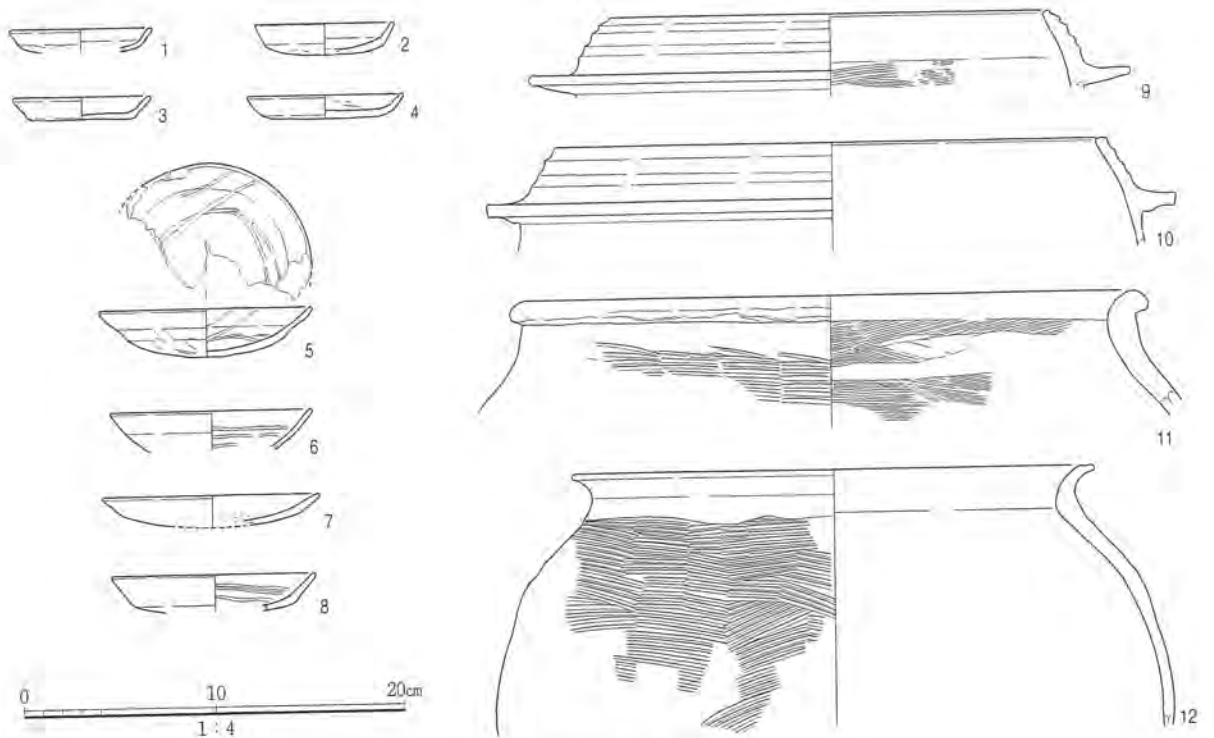


図5 出土遺物実測図(1)

SD838: 1・5、SP810: 2、SK606: 3・4・7・10~12、SP840: 6、SP828: 8・9

に7を付けて表記するが、第5~7層のいずれの層準の可能性もあることを断わっておく。

a. 柱穴

柱穴は30基以上を確認した。埋土に炭を含まず、第8層の上面から掘られたと考えられるもの(800番台)と埋土に炭を含み第7層以上から掘られたと考えられるもの(700番台)がある。また、第8層上面では長軸が0.2m未満の礎石と推定される石も検出された。

第8層上面の柱穴は検出面から0.20~0.55m遺存しており、総じて深いものが多い。このうちSP842は柱根が遺存していた。第7層以上からの柱穴は、SP731・737がやや深く遺存するもの、おおむね0.2m未満の遺存である。特に浅いものについては第5層からの掘込みの可能性もある。いずれも柱痕跡は0.1m程度のものが多い。

SP810からは土師器皿2、SP828からは瓦器椀8・瓦質土器羽釜9、SP840からは瓦器椀6が出土した。SP708からは甑炉の上段あるいは中段部と考えられる炉壁片13が出土した。SP713からは炉の最下段部15、鋳型片22が出土した。15は内部に崩落した炉壁片が多量に付着する。22は低い段が認められるが、製品については不明である。

建物については調査面積が狭く、復元することができなかったが、柱穴の並びや溝や土壇の方位、現在の区画の方位などから南北あるいは東西方向であった可能性が高い。

b. 溝

SD838 南北方向の溝である。幅0.20m、深さ0.05m未満であり、埋土に炭は含まず、第8層上面に相当するSD825・SP843にも先行し、今回検出した遺構の中でも古い段階のものと推測される。土師器皿1、瓦器椀5など規模に比して多くの土師器・瓦器片が出土した。

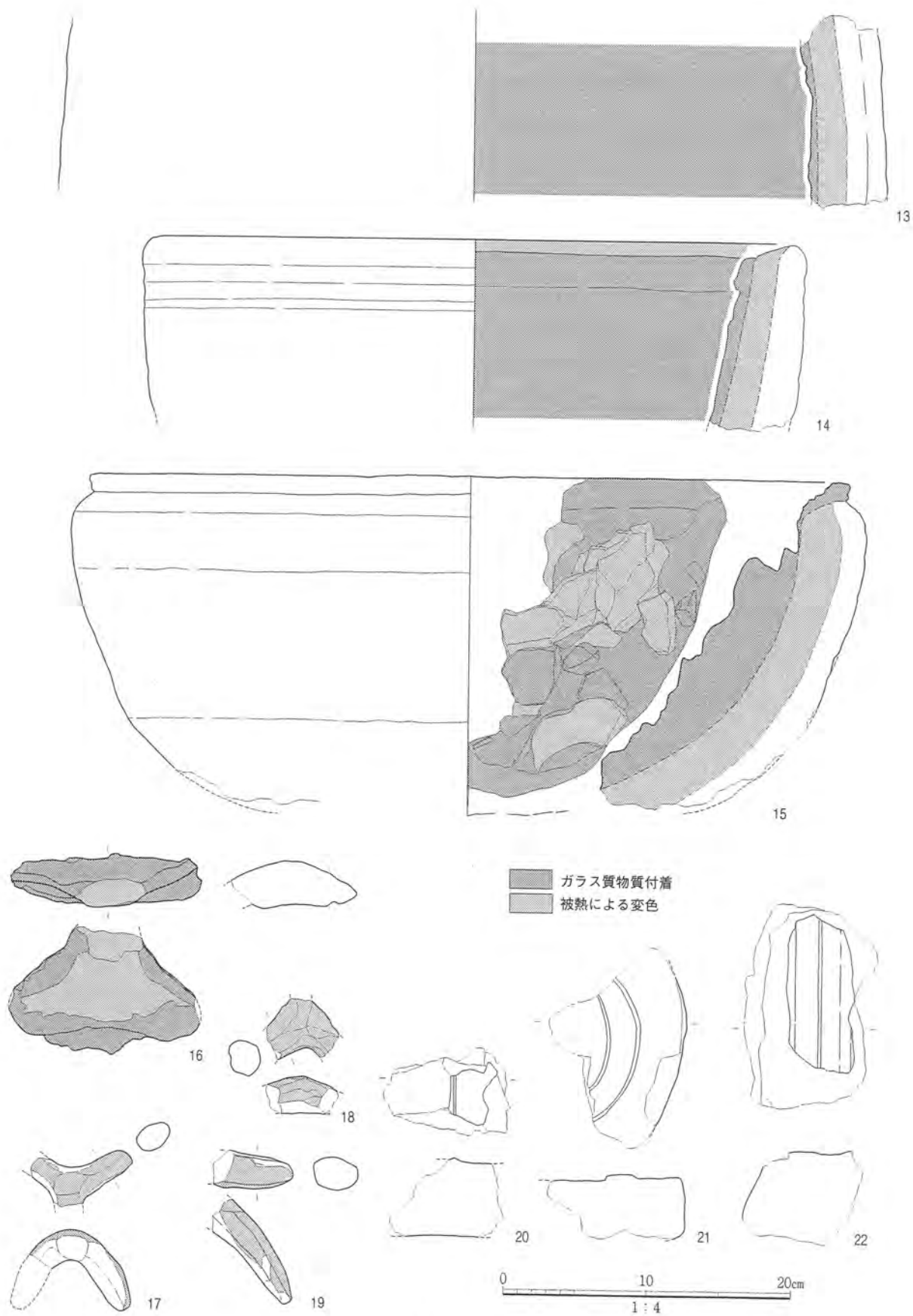


図6 出土遺物実測図(2)
SP708:13、SP713:15・22、SK606:14・16~21

SD825 東西方向の溝である。幅0.20m、深さ0.05mで埋土は黄褐色シルト層で炭は含まない。遺物は出土しなかった。

c. 土壙

調査区の南側に大規模な土壙が集中する。いずれの土壙も炭のほか、炉壁片・スラグなど鑄造関連の遺物を多量に含み、最終的には廃棄土壙として機能したと考えられる。土器の出土量は多くない。

SK846 深さ0.25mの不整形な土壙である。SK807との先後関係は明らかにできなかった。

SK807 深さ0.70mの土壙である。調査深度との関係から、全体としては0.2m掘下げ、部分的に土壙底まで掘削を行った。南側はSK606によって失われている。底面は地山層が砂質となる深さで、比較的平坦となることから、粘土の採取を目的とした土採穴の可能性もある。

SK606 第6層上面から掘られ、第5層で埋没する深さ0.8m以上の土壙である。調査深度との関係から、全体としては0.2m掘下げ、部分的に土壙底まで掘削を行った。調査区外南へと緩やかに落ち込む。北肩のラインは直線的であり、調査地南側には東西方向の道路があることから、土壙でなく東西方向の溝の一部の可能性もある。

3・4は土師器皿、7は瓦器椀、10は瓦質土器羽釜、11・12は瓦質土器甕である。14は炉壁片でガラス質の付着が多くないことから、甑炉の上段あるいは中段部分であろう。16は最下段の炉壁の出湯口に充填された蓋である。17～19は鑄型焼成用の支脚と考えられる三脚である。小型17と大型18・19の両者がある。20・21は鑄型の一部と考えられる。20には低い突線が、21には円形の低い突帯が認められるが、製品としては不明である。

d. 遺構の性格

遺構の分布を見ると柱穴が集中する北部と大規模な土壙が集中する南部とに分かれる。SK807の埋没後に掘られたSP737があるものの、南部には柱穴が認められない。柱穴には深く遺存するものも多量にも係らず、浅い土壙であるSK846の基底で柱穴が検出されていないことから、土壙の掘削によって柱穴が消滅したとも考え難く、この分布は当時の状況を示していると推測できる。建物については、柱径がさほど大きくないこと、周辺に炭が多く堆積すること、出土遺物に鑄造関連の遺物を含むことから、工房であった可能性が高く、北側に工房があり、南側に土壙群があった配置が復元できよう。SK606については区画の溝であった可能性もある。また、検出したのは第6層上面から掘られたものであるが、下位の第8層上面も南側に向かうにつれ緩やかに落込んでおり、第8層上面の時期からこの部分に溝が存在し、第6層上面の時期に掘直された可能性もある。

これらの遺構群は地山層を削平して整地した第8層上面に築かれ、途中第6層による整地を経たのちまで継続する。出土遺物から13～14世紀代の甑炉を用いた鑄造関連の施設であったと考えられよう。

〈まとめ〉

今回の調査は小面積であったが、当初の予測通り、周辺一帯に鑄造関連の施設が存在したことが明らかとなった。また、13～14世紀代の工房と土壙群という土地利用の一端がわかったことも大きな成果である。小面積主体の調査となる地域であるが、調査の積み重ねによって、施設や生産品の実態の

解明につながることを期待できる。

参考文献

村元健一2004、「苅田の鋳物師と山之内遺跡の鋳造関連遺構」：大阪市文化財協会編『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.54-58

調査地全景
(北から)



調査地全景
(南から)



SK606・807検出状況
(北西から)



平成20年度 大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日 平成22年3月31日
発行 大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会
編集 大阪市教育委員会文化財保護担当
(大阪市北区中之島1-3-20)
印刷 株式会社 京阪工技社
